生きる
～東日本大震災と地域青年の記録～
第2号

生きる

第2号

～東日本大震災と地域青年の記録～

編集・発行:『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第2号編集委員会

はじめに

『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第２号をお届けします。

第１号(2012年３月発行)と同様に、この記録もまた、2011年３月11日に発生した地震･津波･原子力発電所事故とその後を、各地域で青年たちがどのように生きぬいているか、その事実を記録として残すことを主たる目的としています。

今回は、第１号の執筆者で現役の青年団メンバーを中心に編集委員会を構成し、第２号の編集方針･内容を次のように考えました。

一つは、震災の体験の記録化の取り組みをさらに広げることです。第１号を通して自分とは異なる体験に触れ、新たに感じ気づくことがあったとの声をききました。特に、地震発生直後、情報が遮断された状態にあった津波被害地域の青年たちから、もっと各地の様々な青年たちの体験を知りたいと提起され、本号では、宮城県の内陸部や北海道・東京での被災の記録も収めることにしました。一年前にはとても書けなかったけれども、今なら書ける、伝えたいと思いきって綴ってくれた方もいました。（第１章　大震災の体験を綴る）

二つは、その後、どのように生きているのかを発信することです。第１号を読んだ方から、この書き手たちの仕事や生活はその後どうなっていったのか、それを知りたいと言われました。書き手の方も、失業や転職、転居、仮設住宅･借り上げ住宅での生活や高台移転問題、自身の生活や地域の復旧･復興をどうするのかなど山積する問題に直面するなかで、新たに伝えたいこと言いたいことが出てきていました。なかには、「一年前と何も変わっていない（書くことがない）」という方もいましたが、その「変わらないこと」の意味を考えるためにも、ぜひ書いてくださいと声をかけました。今、被災地がどのような状況にあるのか、そこで人びとはどんな課題に直面しているのか、そしてそれをどのように乗り越えていこうとしているのか、これは決して「被災地の問題」として切り分けてはならないものと考えます。私たち各々が自らの状況と重ね合わせながら、自分との関わりのなかで受けとめ考えていきたいものです。（第２章　暮らす――3.11後の記録）

三つは、『生きる』の読者の反応・感想を知りたいということです。日本青年団協議会（日青協）では、『生きる』１号の合評会やこれを資料とした研修会や学習事業の展開を支援してきました(５-７頁年表参照)。道府県や市町村の青年団では、独自に展開する様々な支援活動の取り組みとあわせて、『生きる』１号の書き手の話を聴く場を設けたり学習会を開催したりしています。２号では、そうした各地の青年団の取り組みの一端を紹介するとともに、加えてＯＢ・ＯＧなど地域の青年たちを傍らから見守り励ましてくださっている人びとに『生きる』１号の感想を書いていただくこととしました。青年団の支援活動も読者の感想も、数あるなかのごく一部しか掲載できないことを心苦しく思いつつ、日青協としては引き続き、震災被害・支援活動・経験の共有(記録)を媒介とする地域を越えた青年たちの

相互交流を促進していきたいと思います。（第３章　支援活動の記録、第４章　記録から学ぶ――『生きる』１号を読んで）

編集作業の経過は概ね以下の通りです。

2012年11月、宮城・仙台にて『生きる』１号執筆者何人かで２号に向けた編集の基本的な方向性を話し合いました。それを受けて、日青協から「大震災の体験、その後の暮らしを綴ろう」という原稿募集の呼びかけをしました。その結果、本号には、呼びかけに応えて自ら執筆した手記、語った言葉を聴き手が再構成し語り手の了承を得て作成した記録、あるいは語った言葉を聴き手と共同で記録化したものなど記録化の過程や様式においても様々な記録を39編おさめることができました。記録末尾には、書き手･語り手のプロフィールと、必要に応じて記録化の経緯を記しました(記載のないものは自ら執筆した手記)。

東日本大震災の発生から約２年がたちました。あらためて被災地に思いをはせながら、私たちの暮らしや地域、日本の社会を見つめ考えていきましょう。

2013年３月

辻　智子(東海大学特任講師)
『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第2号編集委員会(代表)

――― 目次 ―――

■はじめに

■目次

■東日本大震災に関する青年団関係の動き

――2012 年 3 月 12 日～2013 年 3 月 11 日――

■第１章　大震災の体験を綴る

北海道

・海は繋がっている・・・・・・・・・・・・・・様似町　千葉　浩行　10

宮城県

・3.11 を振り返って・・・・・・・・・・・・　気仙沼市　熊谷　公人　20

・あの日の食パンの味が忘れられない・・・・・大和町　武藤　順子　35

・あの日から・・・・・・・・・・・・・・・・・仙台市　山田　美香　39

・震災発生から 10 日間の記憶 ・・・・・・・・角田市　佐久間祥平　43

福島県

・『記憶』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・いわき市　鈴木　崇弘　54

静岡県

・3.11 の経験・・・・・・・・・・・・・・・・　静岡市　相馬　隆史　62

■第２章　暮らす　3.11 後の記録

岩手県

・震災はまだ終わっていない・・・・・・・陸前高田市　泉田　将治　73

・「米崎小仮設住宅から－2012年春」・・・陸前高田市　佐藤　一男　75

・一歩ずつ・・・・・・・・・・・・・・・・陸前高田市　松田恵美子　94

宮城県
・希望が持てる地域に・・・・・・・・・・・気仙沼市　高橋　弘則　95
・けせん避難所・仮設挿話集・・・・・・・・気仙沼市　芳賀　広美　99
・Ｍ９．０　震度７の地から（その２）・・・・ 栗原市　加藤　義弘 105
・震災後に直面した雇用問題と被災地の現状・・登米市　岩崎　大輔 108
・震災を経て～その後・・・・・・・・・・・・山元町　齋藤　　緑 113
福島県

・あの日から、間もなく２年・・・・・・・会津若松市　吉田　恵三 117

■第３章　支援活動の記録

・特定非営利活動法人 静岡県青年団連絡協議会
　～静岡県青年問題研究集会・拓けKATARI場2013～・・・・・・ 122
・高知県青年活動実践協議会にぎわいボニート
　～東北復興プロジェクト「ship for ship」～・・・・・・・・・125
・大分の青年たちの支援活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・129

■第４章　記録から学ぶ『生きる』１号を読んで

・『生きる』第１号に想う・・・・・・・ 北海道栗山町　本田　　徹 140
・他人事にさせないために・・・・・・・北海道当別町　穴澤　義晴 142
・「心をひとつに」～優しさは伝染する～ 栃木県足利市　鈴木　光尚 144
・語り継ぐこと・・・・・・・・・・・・福井県鯖江市　山田絵美子 146
・震災から２年を迎えて・・・・・・・滋賀県東近江市　戸嶋　幸司 147
・仲間の声を伝えたい・・・・・・・・・鳥取県米子市　砂口　　真 150
・『生きる』第１号を読んで想う・・・・ 香川県綾川町　岡下　進一 152
・この想いを伝えていく・・・・・・・香川県善通寺市　西梶　三枝 153
・仲間が地域で生きてきた証・・・・・・高知県檮原町　立道　　斉 155
・『生きる』からの学び・・・・・・・ 沖縄県南風原町　照屋　仁士 156

東日本大震災に関する青年団関係の動き

――2012年３月12日～2013年３月11日――

２０１２年

３月１７日　陸前高田市青協、「桜ライン 311」2012 春の植樹（第３回）を実施。

３月１７日　３月11日に岡山県団の震災復興プロジェクト「3.1ove1ine（スリーラブライン）岡山→東日本実行委員会」が岡山駅前にて被災地への応援横断幕を市民と作成。日青協第３回理事会で岩手県団へ寄贈。

３月２８日　『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第１号発刊。

３月２９日　日青協、『生きる』第１号の合評会開催。（参加者：矢口悦子・東洋大学教授、大高研道・聖学院大学教授、藤田美佳・神奈川大学非常勤講師、冨永貴公・日本学術振興会特別研究員、辻智子・東海大学特任講師、田中潮日青協事務局長、日青協事務局員）

４月　１日　香川県まんのう町（旧満濃町）青年会が結成した讃岐まんのう太鼓保存会が宮城県女川潮騒太鼓保存会を招待し東日本復興記念祈念コンサートを開催。

４月　７日　静岡県川根町青年団が桜まつりの露店売り上げを川根茶に換え、岩手県大槌町へ寄贈。

４月１４日　滋賀県マキノ町青年団と高島市青協が合同で「桜ライン311」プロジェクトへの募金活動を実施。

４月２９日　岩手県団定期大会にて、『生きる』第１号の合評会開催。

５月　４日　鹿児島県東串良町青協が岩手県大槌町へボランティア派遣。

５月１７日　全国消費者団体連絡協議会学習会にて『生きる』第１号について報告。

５月２７日　宮城県団、第60回宮城県青年文化祭復興祈念大会を開催。

６月１３日　元大分県団板井泉一氏が会長を務める臼杵市「気仙沼復興支援」実行員会主催「気仙沼から学ぶ　災害に負けない地域づくり知活フォーラム」にて、気仙沼市在住の高橋弘則氏（元日青協副会長）、芳賀孝司氏（元宮城県本吉郡青協会長）が講演。

７月　１日　月間社会教育７月号に『生きる』第１号の紹介記事（藤田美佳氏・奈良教育大学特任准教授、執筆）掲載。

７月２８日　新燃岳の火山灰を瓶詰めして販売し、売り上げを義援金にする宮崎県高原町青年団「灰プロジェクト実行委員会」が売り上げ金40万円を持参し、宮城県南三陸町と山元町へ寄付。山元町ではボランティア活動を実施。

８月　９日　岡山県団の震災復興プロジェクト「3.1ove1ine岡山→東日本実行委員会」、岩手県陸前高田市へボランティア派遣。

８月　９日　日本青年団新聞で福島県南相馬市の現状を取材。９月号に掲載。

８月１０日　高知県西土佐連合青年団が中心となって結成した「高知県青年活動実践協議会にぎわいボニート」が、高知県高知市で開催された「第59回よさこい祭り」にて、宮城県名取市へ「漁具保管倉庫」を建設するための物販と募金活動（募金時に鳴子にメッセージを頂く）を実施。

８月１２日　福島県などでＭ６・震度５弱の余震発生

８月３０日　宮城県などでＭ６・震度５強の余震発生
１０月　６日　にぎわいボニートが宮城県名取市へ「漁具保管倉庫」を贈呈。
１０月　７日　にぎわいボニートが宮城県仙台市で開催された「第14回みちのくYOSAKOI」に参加。よさこい祭りでのメッセージ入り鳴子を贈呈。
１０月　７日　日本青年団新聞で第61回全国青年大会に出場する、宮城県南三陸町軟式野球チーム「サンライズ」を取材。11月号に掲載。
１０月１４日　陸前高田市青協、第56回青年芸能祭を開催。
１１月１０日　第61回全国青年大会に被災地から多くのチームや個人が参加。
日本青年団新聞全国青年大会号外にて、岩手県大槌町青年団体連絡協議会「人形劇部玉手箱」、宮城県フットサルチーム「RECKLESS」、福島県バスケットボールチーム「TEAN･FMBC」の活動を掲載。
１１月１０日　陸前高田市青協、「桜ライン311」2012秋の植樹（第１回）を実施。
１１月１７日　宮城県仙台市にて復興座談会兼「生きる」２号編集員会開催。復興座談会の模様は、日本青年団新聞12月号に掲載。
１１月１７日　陸前高田市青協、「桜ライン311」2012秋の植樹（第２回）を実施。
１２月　７日　宮城県などでＭ７・震度５弱の余震発生
１２月　８日　栃木県足利市主催「ひと to ひとフォーラム」にて『生きる』第１号について報告。

２０１３年

１月１９日　静岡県団、第55回静岡県青年問題研究集会「拓けKATARI場2013」を開催。泉田将治氏（岩手県団監事、陸前高田市在住）を招き講演会及び震災分科会を実施。
１月１９日　鳥取県団、第57回鳥取県青年問題研究集会を開催。集会内で橋詰琢見氏（桜ライン311代表、前陸前高田市青協会長、陸前高田市在住）を招き講演会を実施。
１月２６日　第59次岩手県青年問題研究集会へ立道日青協副会長を派遣。
１月２８日　茨城県などでＭ５・震度５弱の余震発生
１月３１日　茨城県などでＭ５・震度５弱の余震発生
２月　２日　北海道などでＭ６・震度５強の余震発生
２月　３日　日本青年団新聞で大坪涼子氏・陸前高田市議会議員インタビュー。３月号に掲載。
２月　８日　滋賀県青年団体連合会が加盟する滋賀県青少年団体協議会、気仙沼へボランティア派遣。
２月１１日　宮城県黒川郡連合青年団、第６回くろかわコーラスチャリティコンサート開催。桜ライン311への募金活動を実施。
２月２５日　栃木県などでＭ６・震度５強の余震発
３月　１日　「生きる～東日本大震災と地域青年の記録～」第２号(暫定・全国青研版)発刊。日青協、第58回全国青年問題研究集会開催（３日まで)。問題別集会として「国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業『大震災から２年、被災地の女性は今』」にて被災地の女性が現状を報告。
３月　２日　陸前高田市青協、「桜ライン311」の2013春の植樹（第１回）を実施。
３月　９日　陸前高田市青協、「桜ライン311」の2013春の植樹（第２回）を実施。

３月　９日　いわき市青年団体連絡協議会が協力し、復興エイサーいわき実行委員会が主催する「復興エイサーいわき」が開催。

３月１０日　岡山県団の震災復興プロジェクト「3.1ove1ine岡山→東日本実行委員会」、復興支援ティッシュ配りを実施。

３月１１日　陸前高田市青協、「桜ライン311」が一般社団法人日本ファッション協会主催「日本クリエイション大賞2012」において、「日本クリエイション賞」受賞。橋詰琢見代表（前陸前高田市青協会長）が授賞式に参加。

第１章　大震災の体験をつづる

付記
・手記は、居住地の北から順に、居住地内は名前のあいうえお順に、並べて掲載した。
・編集作業においては、誤字・脱字の加筆修正、漢字と平仮名との変換、必要と思われる改行などを行った。（編集委）

海は繋がっている
北海道様似郡様似町・千葉　浩行

―2011年３月11日は？

漁業協同組合で保険の共済担当をやってるもんですから、その月の実績報告の会議を日高管内の職員９人が集まって浦河の組合事務所でやってたんです。そろそろ終わる頃に揺れが来て、いつもだとすぐおさまるのが、あれ、ちょっと長いぞ、ずいぶん揺れてるよねって。それが少し長めに横揺れが続いたなと思ったらドンってでっかいのが来た。テレビつけたらヘリコプターからの津波の第一波の映像が流れたんですよね。それで僕ら漁協職員は漁師の船をすぐ沖に出すっていう作業をしなければいけないので、自分の地元の部署の漁師たちに、すぐ沖に出なさい、まだ間にあうと電話をしました。

―間にあったんですか？

自分の地元では50艘くらいあるうちの９割は行けたけど、残りの何艘かは駄目でした。たまたま遠出してたとか、家にいなかったり地元にいなかったって人たちです。今回の震災で壊れた船は安くても4,000万円クラス。地元で一番高い船は140トンの10億くらいなんですけど、それはちょうど沖にいたので大丈夫でした。沖にいなかった船では29トンの船がギリギリ逃げられたってとこ。それが２億くらい。沖で底引き網で操業してた人も突き上げたのがわかったって言います。船は船どうしで、どこの海域まで沖に出ないと駄目だなどと連絡とりあっていました。２トンの船もあれば、40トンのもありますから。２トンくらいなら、その海域だと津波に飲まれるから、もっともっと沖出ししなさいとか。沖は沖で連絡をとり、陸は陸で連絡をとりながら。

―実際の津波は？

今回、津波が来る時に港の底が見えるっていうのを初めて体験しました。屋上にあがって、うちの港の水深３，４メートルの底がほぼ見えるっていうのを目の当たりにしました。同時に、ロープで港に係留されてて逃げ遅れた船が、ロープが切れて横に倒れちゃってるっていうのも見ました。港の底が見えた時、「やばい」と思いました。事務所３階の屋上にいたんですけど、「僕ら大丈夫なんですかね」って話して、とりあえず車だけは高台に持っていこうってことで、車で２，３分の高台に車を置いて、それからまた僕ら事務所に戻ってきた。戻ってきたら、波がブワーって湧いてくるんですよね。築港の中のヘドロっていうか、泥が巻き上げられてくる。そうするといっぺんにグワーッと波が湧いて来るんです。一波目は、湧き上がってくるようなのがブワーッとなってきて築港の水がいっぺんに真っ黒になった。１メートルちょっとですが、水位が上がって事務所のなかにも水が入ってきました。

間もなく、港に止めてあった車が全部流れちゃったんです。うちの職員も本署に30人くらいいるんですけど２人は車を流されました。買ったばっかりの車がローンだけ残った。津波特約をつけてないと保険もおりないので。漁協では様似支所と浦河支所の底引き船に乗ってる人の車が全部流れた。全部で60台くらい。未だに見つからない車もあります。一年

後に、たまたま港で潜ったダイバーが車を見つけて、でも撤去するのに誰が負担するのって話になり、結局は本人負担だってことで。地元の建設屋さんや小さいサルベージを持ってる人が、こういう時だからお金が極力からないようにってうまくやってくれたみたいです。とにかく車があれだけ流れていくっていうのはすごかった。でももっと僕がびっくりしたのは貨物列車のコンテナ。あれも流れたんですよ。築港の中で、ぐるぐるぐるぐる。びっくりしました。「え？どこから貨物のコンテナが？」って言った瞬間に波にプカプカおもちゃみたいに浮いてて信じられなかった。

津波によって流された車

―その後、どうしたんですか？

第一波の段階で職員の安全を確認しなさいって上から言われて、でも携帯電話はつながらないので、高台まで走って行って直接、漁協職員の生存を確認しました。人的被害がないって確認できて、僕ら、馬鹿だから戻ったんです。第二波、第三波が来るのに事務所に。テレビでは、あんなでっかいのが来ているけど、あれは東北の震源地で目の前だからだよって、そんな僕らのところまででっかいのは来ないでしょって感覚で、事務所にまた戻ったわけです。今思えば馬鹿だった。そんなでっかい波が来るとは思ってなかった。漁組の安全管理の問題ですけど、とりあえず男性陣は事務所待機。昔からなんです。何かあった時のために。漁師の人がたと無線はつながるんで、何かあった時の沖の通信は無線だから、とにかく皆でそこに待機しながら、その対応をしようということになりました。

―でも事務所は港にあるんでしょう？

そうです。目の前が港。だから後々考えると宮城や岩手のように20メートルの津波が来てたら僕ら死んでるんです。今ここにいないです。震災以降、危機管理が変わって、まず職場においても何においても、どこでも自分の身の安全の確保をまずしなさいということになりました。各々が自分で自分を守りなさいっていう方に変わりました。

―第二波、第三波はどうだったんですか？

第一波より大きかった。一波目が１メートル30㎝くらいだったはずで、二波目は２メートル、３メートル近かったんじゃないですかね。実際に事務所に水が入ってきたのが30～40㎝くらいですね。ＡＴＭの機械がちょっと濡れたくらい。何ともないだろうと思っていたら後々塩害で故障しました。

―屋上から自分たちの事務所の中に水が入ってくるのを見てたわけですね？

「えっ、これ、どこまで上がんだべな」って皆で言いながら、とりあえず逃げようがないから、「このままいったら僕らどうするんですかね」って話していました。完全に孤立してるんで。それなのに逃げ遅れた人の車がエンジンかかってるままだったのを、僕ら長靴履

いてるんでエンジンを止めに行った。何かあった時に困るよねって。とりあえずエンジンだけ止めに行ったけど、そこで、もう足がとられるんですよ。今、考えたら阿呆みたいなことしたんです。危機意識が薄すぎて。今、考えたら馬鹿みたいなことばっかりやってるんですよ。

―第三波は来たんですか？

第五波まで来ました。第一波は比較的早くて小さかったですけど、第二波、第三波は、第一波に比べたら30分くらい遅かったですかね。一波と二波の間に湧き上がってくるものは若干あったんです。だから、これでおさまらないよねっていうのは僕らの中でもあったんですが。第三波を見てから自分の受け持ちの支所に戻りますって言って高台に行って車で荻伏地区に戻りました。

受け持ちの地区では、昆布を獲る１トンくらいの小さい船は避難しようがないんで、沖に行っても危ないからって、それはもうなすがまま、なされるがままでした。それ以外の船は皆、逃げていました。それを確認した後、沖に逃げた船が、水もなければ何もない状態で行ってるので救難対策本部をたてて、水や食糧を買い出しに行きました。タバコも。漁師たちからは、アメも何もいらないからタバコくれ、銘柄なんでもいいからって言われるので、水・缶コーヒーの次にタバコ。あとは、おにぎり、パン、ソーセージ、日持ちするものを買い集めました。どれだけ沖にいなけりゃいけないのかわからないから、とりあえず。沖の船と連絡をとって、そこには何艘いて、どの船に何人乗ってるかっていう確認をして、今度は集めた食糧を箱詰めにして、一番小回りのきく船を出して、こっちから小さい船でどこまで行くからって沖の船と渡す場所を待ち合わせて中継して食糧を渡しました。結局、一昼夜、次の日の昼か夕方くらいまで船は沖にいました。

―港が戻れる状態ではなかったということ？

また津波が来るかもしれないっていうんで。うちの港は全国でも珍しくて砂がたまって港のなかに島ができるんです。海流の関係で。そういう状況なので、逃げ方を一歩間違うと、その砂の上に乗っかって座礁しちゃって逃げ遅れるっていうのがあったりする。港とその沖に出るところの航路が砂で埋まったりしてて危ないので確実に安全確認できないうちは戻ってくるなって丸一日、沖どまりしていた。

―その晩は？

２時頃、家に帰りました。家に戻る時が、ある種、地獄絵図でしたよね、僕のなかでは。自分の育った町がとてつもないことになっていたので。

様似では、道路に流木がどんとあったりとか、魚の木箱が道路にぼんぼん散乱してたり、津波でさらわれたものが、そのままそこに。様似の支所は低い所にあるので市場は全部流されました。市場のものは全部使えなくなって。様似の漁師の人の車も家も。家自体は流れてないんですけど家の中に波が入って。ちょうど定置網の時期で、昆布とりが終わって、皆、家の倉庫に昆布が入ってる状態だったので昆布は使えなくなっちゃった。津波は油とかいろんなものを巻き上げてくるから。とにかく様似の人がたは着の身着のまま、とりあ

えず逃げるしかなかったっていうところで逃げてました。山の上に逃げたのが夜中まで下に降りて来れなかったって。これはすごいことになってるなって。

―消防団にも入ってるんですか？

昔は漁協青年部に入ると消防団には入れなかったんですけど、今は高齢化してきてるから、どっちも入れるようにしようっていうことでどっちにも入っています。漁師を親子でやってる人は、父親が船を沖に逃がす、自分は消防団の仕事でサイレン鳴らしながら地域住民の避難をするってできるけど、若い人が自分一人で操業している場合は、自分の船も逃がさないといけないけど、地域の人、じっちゃん、ばっちゃんを荷台に積んで山まで運んでってこともしなきゃいけない。「俺、どっちを優先したらいいんだ」って葛藤があるっていうのは後から聞かされましたね。自分だけのことを考えれば船は大事だから、100万とか200万円で車みたいに買えるものではないから、自分だけのことを考えればやっぱり沖に行きたいけど、消防団員として町から任命を受けてやってる以上、最低限、自分が今、管轄している地域の人の安否確認して高台に逃がしてからじゃないと船では逃げられない。だから僕はどっちを優先したらいいんでしょうねって青年団で地域にすごい思い入れある子から言われました。「どっちを優先したらいいのか分かりません」って、２人くらいいましたね。すごい葛藤だって。皆を逃がして港に行って、さあ船を出そうって思ったら、下から湧きあげてくる波で船がこんなんなってて、ロープも切れる、こんなふっといロープが切れる勢いできしんで、その状況だから、自分の船、たぐりよせて、船に乗ることもできないし、自分の船がこのまま沈むんじゃないかなって思いながら見てて、俺のやったことはよかったのか悪かったのかって葛藤はあるって言ってますね。

―その方の船は、結局？

第一波、第二波、第三波とうねりがあって、その時は持ちこたえたので逃げたんです。うまく沖に逃げられたんです。被害自体はなかったんですけど。運がよかった、しかないです。だから、「今後こういう時、僕はどうしたらいいんですかね」って、消防団を続けるべきなのか、続けながらでもいい方法があるのか、そういう葛藤を抱えています。

―地域の数少ない若者がいろんな役割を担ってる。

地域の中での役割の重さが昔以上に若者に負担が大きくなってきている面があって。じいちゃんが、自分が逃げるのが精一杯だから、隣のばあちゃんまで助けられないから、消防団があるって、僕は考えたら、ばあちゃんがたをまず逃がさないとって。でも、それが果たして自分の生活面でよかったのかって言われるとわからない。昔から知ってる隣の家のばあちゃんがたも助けなきゃいけないしって。葛藤は持ってるって、未だに持ってるって言いますよね。次あったらどうしたらいいんだろうって。消防団をやりながら自分で経営している若者は皆言ってます。こればっかりは、その時のケースバイケースで、自分たちの判断で動くしかない。僕らがどうせい、こうせいって言えないんでね。こればっかりは。

―海岸の瓦礫の話ですが。

直後は、まず自分たちの瓦礫です。流されたものが戻って来たのは直後ですね。それをある程度片付けてきれいになったと思ったら今度は東北の瓦礫が…僕たちは「被災地からの贈り物」って言ってますが、５、６月くらいですかね。気仙沼のものがあったり、どっかの神社の境内におかさってたような龍の木彫りの板が流れついてきたりだとか、気づくと浜にボカッと置いてある。魚介を入れるストッカーとか、発泡スチロールのでっかいのとか、お風呂の板とか浴槽とか、流木のでっかいのとかが毎日。一日ですごい量がきました。流木は、漁師さんがチェーンソー持っていって沖で切りながらコンパクトにしながら持ってくるっていう、魚を獲りたくても獲れずに帰ってくるっていう感じでした。

津波で陸に打ち上げられた漁船やがれき

―基本的には流木で、あと漁具ですか？

いろんな漁具がからみついて危なかったです。金具がついているので網は傷つくし、浮いてて船にぶつかったら船に穴があいちゃう。プラスチックで作ってる船もあるので。あとガスボンベ。中にまだ入ってるのもありました。破裂したやつもありました。地元のガス屋さんに電話をして来てもらって、とりあえず引き取ってもらいました。ガスを抜かないとどうしようもないからガス抜きするわって。港の中には畳も５畳くらい届きました。

―漁協や漁師、地域の人、皆で出られる人が出て、その日に流れ着いたものをボランティアで回収したわけですね。

朝１時とか２時から操業する船もあるので、夜中に何が流れてるか見えなくて危ないので、ガスボンベにぶつかってボンってなったら大変なことになるから、明るいうちにやれるものはやろう、皆で一斉にやろうっていって、仕事の手を止めてでもいいからやろうってことで、一斉回収を２日くらいやりました。漁師の人たちからは、みんな被災者だしなって。俺たちだけじゃないし、東北から比べたら俺たち、まだ恵まれている方だから、やれることは自分たちでやろうよって。いつ自分たちもそうなるかわからんしって。流れ着くのが大方来なくなったのは11月くらいでした。

―北海道のこうしたことを知る機会がこれまでなかったです。

北海道の人的被害はほとんどなかったんですが、釧路市と根室市の間に位置する厚岸町（あっけしちょう）の牡蠣筏であったり、僕らのところの昆布であったりとか、そういう被害はたくさんありました。厚岸の方では牡蠣の養殖筏が全滅したので１年間は厚岸産の牡蠣というものがなかったです。

―船がやられた、牡蠣筏がやられた、仕事できなくなった、再建のためにまたローン組まなきゃいけなくなった、悪くするとそれで精神的に不安定になったとか、職を失ったとか、

そういった間接的な被害があったわけですね。

今回の震災によって新たな出費が、保険じゃまかなえないものに関しては基本的に自己資金でやるってことですから、その面では大変でした。

千葉　浩行（ちば・ひろゆき）

北海道様似郡様似町在住　職業：団体職員(漁組職員)

1976年生まれ　北海道様似郡様似町出身

北海道青年団体協議会会長

※2013年１月26日に北海道青年団体協議会事務局(北海道青年会館内)にて行ったヒアリングを再構成しまとめたものである(辻智子)。

全道青年大会で挨拶する千葉さん（2012年５月）

3.11 を振り返って

宮城県気仙沼市・熊谷　公人(語り)

１．地震

仕事が気仙沼市役所税務課固定資産係なので鹿折地区に課税漏れの調査に行っていました。次の現場に移ろうとしたら、胸に入れてた携帯が嫌な振動をしたんです。「ん？なんだ？このパターンは？」って思ったら、エリアメールって出たので、中も開けずに運転席の同僚に、「でっかい地震、くっから気をつけろ」って言ってラジオのスイッチを押したら、次の瞬間、車がロデオ状態なんです。まっすぐ走れない状態でした。大きい道路から一本入った狭い道で、すごく揺れてるんで、ここは危ない、大きい道路に出ようということで、コンビニの駐車場に行ったら、直後停電が起きて、これは絶対大きな津波が来るだろうと思いました。

実はその２日前の昼頃にも地震があったんですが、その時も同僚が、「これで宮城県沖(地震)、だいぶガス抜けましたね」って言ったんですど、「いやいや、多分つっかい棒はずれたんでしょ」って話をしてたんです。けれど、まさかその 2 日後とは思わなかったです。昔、公民館で仕事していたときの研修で、宮城県沖に 100 年に 1 度くらいの割合で大津波を起す震源があるので、連動を起す可能性があると聞いていたので、これは多分来るねって話していました。地震後、本庁に戻ろうとすると、海沿いを走らなくちゃならない。そういう場合は最寄の市の施設に行くという指定になってるのですが、鹿折地区にあるのは、「やすらぎ」という総合福祉センターで、そこは私が９年間働いた場所なので、コンクリ造りだから建物自体は大丈夫だけど、海の側なんで駄目だと判断しました。それで近くに水道事業所があったので逃げ込んで、そこで職場に「水道事業所に避難したから」ってメールを送りました。そしたらその時すぐに、大津波警報が発令されまして、「大津波警報だとここはもたないから、他に逃げてくれ」ってことで追い出されました。

今度は山手の健康管理センターというところに逃げました。でも、そちらも田んぼを埋め立てて建物を作ってるので、液状化がひどくて、駐車場もぼこぼこしている上に、もともとデザインに凝った建物だったんで、建物の接合部がずれてきていました。「この建物自体も危ないから、避難者が来ても入れないでくれ」って言われました。実際、私たちが中にいても、ずっと余震が続いてたので、天井や庇とかが落ちてきそうな状態で、とにかく来た人には、「小学校・中学校へ逃げてください」って言って、備蓄してあるものを全部持たせて誘導しました。

２．避難・救助活動

そのうちに、避難してきた人が、「鹿折がもう終わった」って言って来たんです。津波が来て、もう木造の建物はないよと。残ってるのは鉄骨とかコンクリでできた建物で、もう終わりだって話されて。そのうちに、その逃げた場所と鹿折地区との間に、市役所の建物があるんですけど、市役所の方向、なんか雲じゃないモノが見えたんですよね、雲にしちゃ黒いよねって。日がかげってきたら赤いんです。火事だ。きのこ雲みたいなものがあったんですよ、もわっとして。こりゃ、役所、焼けたんじゃないかって話になって、でも確

かめるすべがなくて。逃げてきた人から、鹿折地区が燃えてる、油でやられたって話で。

健康管理センターは患者さんを輸送するためのマイクロバスを持ってたんで、運転できないけど、ここでエンジンかけて情報収集しましょうって話で、そこにいた介護師さんとラジオを聴いてたんですけど、ラジオからの情報がどうも信じられない単位の話になってるんですよね。利府のイオンの天井が落ちて親子連れが亡くなったっていうのが、一番最小単位で、後はもう３桁の、仙台の荒浜で200人から300人の遺体って。何言ってるんだ、って。

そんな中で、各主要な沿岸部の津波の情報が入りまして、「気仙沼地区は市街地の大部分が水没しました」って。皆「浸水って言わなかったよね、水没っていったよね」って話をして。その中で市役所の前に、市役所の課が入ってる、ワンテンビルってところがあるんですが、そこの１階、２階が行政庁舎で、３階から５階が駐車場という建物なんですが、１階が水没したって情報が入ってきまして、これはもう大変なことになってるってことで。

ただ、帰れないんです。水も引いてないし。結局、戻れたのは23時半頃。携帯も使えなくて、ショートメールも駄目になって、もういくらなんでも引いただろうってことで、別の人が車出して迎えに来てくれたんで、市役所の中で夜を明かしました。職員もだいたい帰らずに残っていて、あとは一般の避難者も結構、多分200から300人くらい。電気が来てないんで、下手に歩けないんですよ。職員も自宅と連絡つかないって方が相当いて、一睡もできず次の朝になりました。

一応、緊急時には、担当がだいたい決まっていたので、私たち税務課では、基本的には罹災証明を発行するために、まず浸水域の特定の調査に歩きました。地図を持たされて私と同じ本吉地区出身の人と一緒に、「本吉地区の浸水、道路、行けるところまででいいから」ってことで任せられました。

たまたまその前に、市民会館に詰めてる職員に用事があったので行ったら、そこに避難していたおばあさんから、屋根の上に取り残されている女の子がいるからなんとかして下さいって泣きつかれました。それでそこに避難した人に志願者を募って、何人かで市街地に下りていったんですけど、まぁ、なんていうか、夢だったらどんなにいいのかなっていうような状態で、もう瓦礫の山なんです。

目の前に軽自動車が３、４台垂直になっていました。「その女の子はどこにいるの」って聞いたら、20㍍くらい先の屋根の上。でも、足場がないんですよ。瓦礫の山はあるわ、傾いている家はあるわ。下からしかアプローチできないんで、みんなで瓦礫の山を手探りで、ここは行ける、ここは行けないって判断したり、ガラス割って家の中入って突き抜けてとかして進みました。

怖かったのが、その瓦礫の中に湯気が出ているプロパンのボンベがあって、そこしか手を掛ける所がないっていう状態。あとは津波って、ヘドロ、しかも油交じりのヘドロだったんで、それが瓦についていると、ものすごく滑るんですよ。私も一回滑って、受け身をとろうと思ったら、このまま受け身とっても下に落ちるけど、その下ってすごい瓦礫があって。だから、もうそのまま瓦に倒れた方が安全だと判断したりして。そんなこんなで、救出に１時間以上かかったかな。７歳くらい

の女の子で、低体温症になってたけど意識はありました。女の子を布団でくるんで、せーのっていう状態だったので、踏んばっても、踏んばった場所がいつ崩れてもおかしくなかった。

３．自宅周辺

本来の業務ということで、本吉地区の方にいったんですけど、まず国道がもろに津波を受けていたので、山沿いの基幹農道に迂回させられました。後に、それは瓦礫だけじゃなくて、亡くなった方が複数いたことで通せなかったらしいと聞きました。

近くの小学校に車をとめて、そこから歩いて行ったんですけど、私の家あたりは道路が２箇所で分断されていたので、車じゃ行けない状態でした。見慣れたはずの景色が全然違ったものになっていて、車を停めた小学校は海岸沿いの国道から内陸に入ってるんですけど、そこが津波受けたって情報は前の日のうちに入ってたんで、そうすると津波の高さは確実に10㍍は越えているだろうと、そうすると家は高台だから、親は油断して逃げるって頭は多分ないだろうなって。同僚にも、もしもの時は覚悟したからって、もうこんな状態だもん、って話はしてました。あ、このカーブを曲がると家が見えるんだよな、って恐る恐る行ったら、2 階はあるな、あ、１階もなんか大丈夫そうだなって。家の周りの家は、避難所も含めて全部やられてたんですけど、うちは坂の入口がやられたくらいで、家に帰って、ただいまーって、おー、帰って来たね、って。「あんだのごったがら運悪く鹿折地区あたりで被災したんじゃないかと思って」って。まさしくその通りなんだけど。やるな、家の親。

やっぱり私の両親も、最初は家の庭でのんき構えてたらしいんですけど、家の下の避難所になってる振興会館が、波を受けて飲まれた時に怖くなって、裏の山に逃げたそうです。他にも、避難所が流されたって話がありました。不思議なもので、気仙沼では、市が津波の避難場所として設定した場所と、国土交通省が津波の浸水区域と考えていた場所に違いがありました。国土交通省の方が正確でした。家の下の振興会館っていうのが避難所なんですよ。津波から逃げるマークで「避難所」って看板があったんですけど、一昨年あたりに、その会館の前の道路のところに新しく道路標識が立ったんですね。「これより津波浸水区域」って。避難所のまん前に。「これより…」ってなってる下に避難所。なんの冗談だろう、これはって。シミュレーションの結果で、こうなったのでしょうが、なんか悪い冗談にしか思えない光景が。見事に、国土交通省の勝ちでしたね。私が、次に見たときには、もう基礎しか残っていませんでしたから。地域の人たちは、その会館の上にある家の庭に逃げてきた人の方が多かったですね。うちの地区で言うと、約 400 人のうち亡くなった人が２人でした。ただ、亡くなったって言っても、１人は津波が怖くて２階に逃げたら、家ごとっていうのと、あとは、最初に津波警報が出たときの予想高さが６ｍっていう予想で、６ｍなら大したことないって思ったらしくて、私の家から道路挟んで向かいの家の人が、自分の家の庭で写真撮ってたんです。津波の。６ｍなら大丈夫だろうと思って。６ｍ以上あると気づいた時には、到底間に合わないんですね。そこの家から更に高台に逃げるには、

一回、道路を降りて、っていう状態なんで。それで、土蔵に逃げ込んだんですけど、土蔵もすっかり波を受けて。蔵は残りましたけど、中で見つかって…。見ていた人が「逃げろ、逃げろ」って言ってたんですけど。津波って、時速 200 キロとかそういう速さなので目で６ｍじゃないとわかるような状態だと、もう間に合わないんですよね。

４．自治体職員として

安否確認して、自分の家からキャンプ用品全部持って、あと、しばらく帰れないからって、これ以上悪いことは多分起きないからって言って。職場に戻りながら、大谷の町のほうの浸水域とかをチェックしていきました。

そこで自転車を押して歩いている20代の若者に会ったんです。その若者から「気仙沼の市場って遠いですか」って聞かれて、「遠いですよ、ここからまだ10キロ以上ありますし、道路が通れないんで山道行くしかないですから、遠回りになりますよ、どうしたんですか」って聞いたら、「私、仙台から来たんですけど、気仙沼にいる彼女と連絡つかなくなったんで、今朝、自転車で出て来たんです」って。「本当は昨夜出ようと思ったんですが」って。停電しているし、道路がないから危険だよって言ったんですけど。私たちの乗っていた車がステーションワゴンだったので、このまま行かせても危険だから自転車積んじゃえ、調査が終わったら市役所の方まで乗せていくからって。市役所の近くに３箇所避難所があって、多分ここが一番人がいるから、ここで聞いてみてって話したんですけど、その後、どうなったかは分らないですけど、そういった方もいらっしゃいましたね。

12～13日は税務課の方で、支援物資の仕分けとか、そういったのをやって欲しいって話があったんです。私も行くのかなって思いましたら、大島とか唐桑の道路が寸断されてる所から、ヘリが救助した人を運んでくるから、その方々をバスに乗せたり、Ｄマットの医療班に引き渡すのをやってくれって話をしているところにたまたま通りかかって、じゃああんたやれって話になって、そこで一週間くらいやりました。人の輸送と、あとは米軍や自衛隊からの支援物資が投下されてくるので、そういった物の積み込みとかやりました。

病院に搬送っていうのが、衰弱とかの方が多かったですね。怪我っていうのはほとんどない状態で。実際、震災関連の本で病院関係の本とか読むと、今回の被災っていうのが、もう怪我が０か100か。要するに、無傷か、駄目かって状態らしいんです。怪我っていうレベルでは。津波で怪我をするって状態の人は、ほとんどいなくて、ほぼお亡くなりになっているんですよ。あとはすごい軽度な怪我の方という状態なんで。医療班に引き渡すのもあまりない状態でした。

搬送が終わった後、今度は病院に運ばれた人を避難所に移動したいっていうことがあって、それについてもバスは３台あるんですけど、市の対策本部の方にそういう使い方してもいいですかって言っても、ぜんぜん返事が来ないんですよ。そこで私は「税務課の熊谷ですけど、私の責任で勝手にやりますからね、バスを遊ばせてもしょうがないですから」って言って。それについても返事がこなかったから、勝手にやりました。

ところが、防災無線が震災後24時間で、バッテリーが切れちゃったんですよ。ってこと

は、何か市の方で注意を呼びかけようにも手段がなくなって。ご存知の通り結構、余震が頻発していたのと、翌週もたしか津波警報がでたんです。ところが防災無線が動かないんですよ。結局、職員で人づてに言って、多分、私の持っていた無線に入って来たのが、海の方にいた職員が持っていた無線だと思うんですけど、もう、必死、生声で「逃げろ、逃げろ」って、無線の音声を入れたままにして、もう悲鳴やら何やらが生々しく全部聞こえてきて、結局、そこには津波はこなかったから良かったのですが、あれ以来、行政の方でも震災の時にそういった防災無線が停電しないような、24時間以上使えるようなものを今考えています。

５．支援物資のこと

21日以降は、集められた物資を、各避難所に配る作業をしていました。私以外の同じ課の職員は、その前の週も、その仕事していたわけなんですけど、全国からの物資がものすごい量で、かつ、夜中にも普通にきたので寝れないし、水とか当然ものすごい重いじゃないですか、寝れないし休めない、終わりがあるのかどうかっていう状態でやってたらしいんですね。クロネコヤマトさんと自衛隊が入って、フォークリフト使えるようになってものすごい楽になって、そこに、私がのこのこ復帰してしまって、非常に申し訳ない状態でした。その物資も全国の皆さんに助けられて、ものすごくありがたいという気持ちでいっぱいだったんですけど、やっぱり先が見えないっていうのもあって、物資を配りに行っても、「いや、もう水いらないよ」「余ってるからいいから」「他のないの」とか、だんだん出てくるんですよ。

１日に３回くらい、「また、水ですよ」って感じで行った。というか、そうやらないと保管しきれないんですよ。どうにもならないんですよ。で、たまたまその私が行ったルートが、９年間いた鹿折地区のルートだったので、知ってるが人いっぱいいたんです。だから、「また水か」「お茶くらい持ってねぇのか」「飴、ねぇか」って言って。「あの今、いらねぇって言っても、この状態が、この、物資をもらえるのが、いつまでかって分らないんだよ」って話をして、「今、余ってる、余ってるって言っても、どっかで大きな災害があったら、そっちに行かれる可能性もあるし、ペットボトルに入ってるんだから、外に置いておいたっていいんだから、今の内に蓄えておいた方がいいよ」って無理やり置いてきました。

田舎だから各家庭で結構大量買いして備蓄食料があったりしたので、学校の体育館だったある避難所では、有志の方々がドラム缶半分にぶったぎって、津波で壊された木材を焚いて食料を持ち寄ってバーベキューやってました。あと市街地でも、家なくした、仕事なくした、やることはない、金はいささかあるという人が、酒屋で酒買って酒盛り、ブルーシート敷いて。ソフトドリンク類が全部売り切れて、酒しか残ってなかったんですよ。で酒盛りやっていたりとかですね。結構、そういうのがありましたね。

あと私が後々お風呂とかでお世話になった家では、最初のうち、５、６世帯が、その家に避難してきて、共同生活を送ってたらしいんですね。そこにNHKの取材がきて、その記者が、阪神大震災の取材もされた方で、そこで驚いてたらしいんですね。「神戸の震災と、東

北の震災で、決定的に違う部分が一つあります。それは、皆さんこの状態で、なんでこんなに明るいんですか」って。結局、田舎の付き合いがあるから、隣近所の人が寄せて生活していても、全然、ストレスがないんですよね。ま、あまり長い時間だとあれですけど、短期間、１ヶ月くらいだったら普通に暮らせますからね。それを驚かれたって話です。

ちなみに、支援物資になぜかお酒が送られてきたりとか、いや、これ今、避難所に送ったらまずいでしょっていうようなのとかありました。あと、支援物資で変わったものといえば、ロデオの「ジョーバ」を送ってきた人がいましたね。１台ですよ。避難所は何箇所もあるのに、その支援物資のステーションに、「ジョーバ」。

食料品の中にも、電子レンジ専用品とか。今、停電中なのにってのもあったし。あと、ある公的機関から弁当がどーんと届いたんですけど、消費期限が半日とか。もう配れないって状態のものとか。そこの団体から４月になってから、今度は炊き立てのご飯15キロ１パック、これを200箱くらい、消費期限の30分前に到着したんです。配りにもいけないし、逆に消費期限が切れたものをどこまで出せるのかって衛生上の問題もあって、皆と途方に暮れましたね。

６．被害調査・罹災証明

調査で離島の気仙沼大島に行きました。津波の被害調査。例えば、全壊とか半壊とか内閣府の基準で色分けをしていくんです。１階の天井まで波がくれば全壊、床上の１ｍで大規模半壊、それ以下の床上だと半壊、床下だと一部破損っていうふうに４段階で分けていくんです。

実際に証明を出す関係でやっぱり家の中に入るわけですよ、ごたごたしてる、皆さん、片づけしている中に。それで、すみません、税務課ですけど、調査に参りましたって。住民の方たち、被災されているんですよ、家がもう１階が全部抜かれちゃってるんですよ、なのに、「あー、あんだだちも大変だね」って支援物資から、私たちが配った食糧から、さらにこちらによこしてくるんです。自分たちもすごい状態なのに、大島に一日いただけで、それが両手一杯になるくらい。「えぇ？この人たち、自分たちがこんな大変なのに、なんでこんなにしてくれるんだろう」っていうのはびっくりしましたね。

調査が始まって、東京の23区であるとか、山梨県甲府市、遠くだと佐賀県の方からも建築士の方がおみえになりました。地震の被害調査っていうのは、我々事務屋でもできるように内閣府からマニュアルが来てるんですけど、我々事務屋が言うのと、建築士が言うのとでは、ぜんぜん住民の皆さんの納得の仕方が違いました。なので、その方々にずっと来ていただいて。今も何人かと、昨日も甲府の方で地震がありましたね、お互いに連絡とりました。今でも本当に助けられてますし、中には一人で５回くらい来た人もいます。

調査に行くってことは、基本的に家は残っている方なんです。津波を受けてない、地震の調査なんで。国とか県とかの義援金がでるものって判定が半壊以上なんです。半壊以上にならないともらえないので、建築士さんと我々の調査の結果、半壊まで行かない、となると、もう態度が変わって、「何で出ない」のって。何人かは、これだったら家流された人

の方が幸せだよね、とか。支援の人の前で恥ずかしいから言うなよって、この人たちどんな気持ちでこれ聞くんだろうって思って。先日も言われたのが、これだったらダンナが死んでくれたほうがよかった、それならお金が入るでしょって。家がなくても仕事が残っていた方が幸せだからって腹立たしいやら悲しいやら。

７．被害判定をめぐって

津波の被害を受けたとこは全部、地震の被害は半壊以上だと行政の方で壊すようにしてるんですけど、実際は津波では半壊だと義援金どまりで、大規模半壊以上だと国からの支援金もいただけるんです。その津波の判定の基準が、床上、おおむね１ｍを越えるかどうか。それで半壊か、大規模半壊。だから、津波の跡が判定基準になるんです。多分ウェブで共同通信かどっかがまとめたと思うんですけど、被災３県、岩手、宮城、福島で、自治体によって基準がバラバラなんです。内閣府で示してるんですけど、職員が亡くなったとことかは、そんなに細かくは見てられない。ざっくり、ざっくり。それもあるので、よその自治体ではこうだった、って怒鳴り込んでくる人もいるし、なんて気仙沼は冷たいんだって。いや、そうじゃなくてこっちはこっち。

あと、地震の基準について、内閣府で示している建物の被害の状態の４段階と、共済とかそういった地震保険の見方がぜんぜん違うんです。極端な話、地震保険、地震の被害調査で行くと、基本的に建物の外側しか見ないんです。屋根と壁と基礎。あとは地盤沈下によって、建物が傾いているかどうかって部分なんですね。中がどれだけ壁紙が破れようが、ヒビが入ろうが、点数にならないんですよ。もっと詳しく見る二次調査っていうのがあって、そちらでは見るんですけど、それはすごく細かく厳しくなるんで、それで半壊になることはほとんどない。そういう民間の保険、共済とかだと、全部積み上げていくんで、私の家もこっちのマニュアルだと一部破損だな、って帰った時に思いました。で、共済の方が来て見てたら、半壊って。あ、こういうことかって。これがトラブルになるんだよな、って思いました。

集合住宅も基本的に１棟として見るんで、それでお金がおりるくらいのレベルっていうと、アパートが傾くような感じじゃないと出ないですね。ただ、中には、ゆるい自治体もあるんですよ。聞いた話だと、ある自治体では壁紙がやぶれただけで半壊になったこともあるそうです。

つきつめていくと、制度上、すごい不公平があるんですけど、罹災証明って、建物１棟で見るわけですよ。津波の被害があるとすると、全壊が１階の天井まで水没して、２階、３階が無事な人、いますよね。けど、罹災証明は、集合住宅の場合２階、３階の人にも全壊で出るんです。建物は１棟なんでね。その後で、国の方も著しく被害の度合いが違う場合には、一部屋ごとに見てもいいですよってふうにはするんですけど。

津波の水位にしても、一軒家だとしても、基礎の高さとか建物の内高で、全然違うじゃないですか。だから、基礎の高い和造りの家って不利なんですよね。和造りの家って、下手すると内高３ｍとか普通にあるんで、しかも基礎が60㎝って考えたら、４ｍの浸水でやっと全壊判定。今どきの基礎30㎝から45㎝で、

内高2.4㍍の家だと、浸水高によっては、かたや全壊、かたや半壊って。だけどほぼ同じようなダメージなんですよ。水位から言ったら。

文句を言ってくる人が、お金の問題じゃないんだ、って言うけど、いやお金の問題でしょ、あなたが言ってるのはって。行政はもっとあたたかくすべきなんだ、お金の問題じゃないんだよって前置きされるんですけど、言ってること、こうだよねって。中には、一律でみんな全壊なみの義援金を出すべきだっていう人いるんですけど、それやったら、必ずどっかで不公平だって話になりますよね。家、流されたのに、ひび一本で同じ金額っておかしいだろって。結局、堂々巡りになっちゃうんで。もう、基準を作った内閣府を悪者にして。

ただ先ほど、自治体によって判定の基準にばらつきがあるって話しましたけど、それについて内閣府が出したコメントが、地方自治だから仕方がないって言っちゃってました。それ言ったらどんどん崩れていくのでそこは何かもっと精査するなり、交付金で何かやるなり、何かないとどんどん広がって行くなって。もっとも国の判定基準も、津波も、地震も、２回ほど変わりまして、調査し直しでえらい目にあいました。

８．避難所、仮設住宅

避難所ですけれども、３月の時点で、私たち税務課が担当した体育館では、300人が生活していて、最初は２階のキャットウオークから、舞台から全部使って対応していたんですが、税務課の方で担当の避難所を回るようになったのが夏頃だったんですけど、その時点では、かなり人数は減ってきたのでダンボールで仕切りを作れる位になっていました。仮設住宅が建って、そちらに抽選で当たった人が抜けていくので。

ただ今度は、避難所にいた人が、仮設が当たって出て行って、学校の体育館は避難所として機能、校庭には仮設住宅となりました。仮設の人と、避難所の人との対立というか、避難所に残っている人たちは、抽選から外れた人たちなんですよ。だから、「あんだだちはいいよね」。仮設の人たちはこっちにもう入ってこないでくれっていうようなのとか。それが悪くすると、子どもたちのレベルまで。あんたは来ちゃ駄目だから、って。もしくは遊んでたのに、「外で遊んで」「こっちに入ってこないで」とか。本当にそんなにギスギスするようなことではないんですけど。

実際、気仙沼の方で、仮設住宅の建設が遅れた部分もあったので、ちょっとずつしか割り当てられなくて。やっぱり隣で、近所で当たった人、外れた人がでてきてしまって。あとはどうしても、独り身の人は後回しにされてしまうんです。複数が優先されるので。独り身の人が遅れるっていうのは、孤独死を防ぐという意味もあるんで、一概に悪いとはいえないですけど、そこは人間ですから、感情的な部分もあって。避難所の中でも、いじめってわけじゃないですけどね、あそこの家はああだこうだとか。あそこの人に物を盗まれたとか。そういった半分は子どものいたずらとかもあったんですけど、「多分、あそこの家がやったんだ」とかそういうのが出てきましたね。

私の受け持ちのところは、東京都の江戸川区役所がメインで、そこに市の職員が一人つくような形で、連絡調整を私たちがやって。

大体が江戸川区の職員がトラブルについては解消してくれました。どうしても何ともならない時、市から総務課に連絡して判断を仰いだり、それを記録として残して総務に回したりっていうのがありましたね。

避難所は、中には仕切ってくれる人もいるんで、その方が中心になってくれて、こっちは楽なんですけど、必ずそうなるとおもしろくないって思う人もいるわけで。その人がいなくなると、陰口とか告げ口とか。あの人ってねどうでこうでって言ってきた人もいましたけど。私たち職員は日替わりでしたけど、江戸川区の職員は２週間とかそういうスパンで入っていたんですけど、お昼とか午後のお茶飲みの時間とか設けてあったんで、そこでいろいろ市に対しての要望や、不満がでてくることはありましたね。中には何やってんだって頭ごなしに怒鳴りつけられた職員もいましたし。それは上にあげるような形でですね。本当に先が見えない状態。仮設住宅については、不足しているっていう情報だけ出てたので、それで気仙沼市内だけでは到底用地が足りないので、隣接する岩手県の一関市の手前の方に、学校跡地とかを借りて仮設住宅を作ったんですけども、今度は逆に、気仙沼から離れたくないっていう人が相当いるんですよ。そちらの市外の仮設住宅は入居率３割か４割くらいだったかな。やっぱり不人気で。

あと、空いてる仮設住宅のことで、ご存知の方もいらっしゃるかと思うんですが、気仙沼は、市内の旅館、ホテルが、二次避難所であるとか、あとは業者さんが押さえちゃってて取れないんですよ、だから他の自治体から支援にいらしている方々を、あいている仮設に住まわせようと思ったら、厚生労働省が待ったを掛けたんですよ、目的外使用だって。それは被災した人の建物なんだから、支援の人たちを泊めちゃいけませんって。市としてはホテルを応援に来ている職員が確保すると、業者が遠くから通うことになって、ひいては一般の市民の建物工事とかに全部跳ね返ってきちゃうので、それは復興支援にならないだろうってつっぱねて、強攻策で泊めますっていうふうにいったんですけど。総理大臣の、いやいいんじゃないかって、鶴の一声があってからコロッと変わりましたけど。なかなか政治的な、それこそお役所の仕事になってしまうんですけど、そういうのもあって、ちょっと復興が遅れてる部分があるなっていうのはありますね。すみません、今（2012年１月）、まだリアルタイムで続いているもんですから。終わってないです。

まだ仮設住宅も。避難所だけは（2011年）12月末に解消しましたけど。悪くすると年越すレベルだったんですよ。ただ二次避難している人たちはまだ結構いますし、ホテルとか民宿で二次避難している料金は県が持つんですけど、新聞によると支払が遅れているらしいんですよね。

９．復興計画

復興住宅もですし、高台移転とか、あとは市のほうで示した中で他に、かさ上げゾーンとか、緑地帯ゾーンとかあるんです。さっきの話でも言ったように、１階の天井まで波がいけば全壊なんですが、建物が残っている人の中には、直して住まわれる方もいらっしゃるんです。そのかさ上げゾーンの中でも、直して住んでる方が結構いらっしゃるんですが、その方々がどうなるかっていうと、建物を壊

さなきゃならないんですよ、かさ上げするために。かさ上げして３～４m位上げるんですけど。何年かして土が落ち着いたら地権者に返るような。いくら手をかけて土に圧をかけても厳しいですね。実際気仙沼市内で、地震の判定で半壊以上は９割以上が地盤沈下で家が傾いちゃってる。それがどういうとこかっていうと、地盤の弱い所。土を盛ってそこに建てた家とか。そういう部分なのでそこを落ち着くまで待たないと同じことが起きてしまうんですよ。それで移転の保障も最初に聞いた話だと家そのものの分で、住むために直した分、一回津波受けて直した分、それは含まれないって。直し損のような。結局、最後は、じゃその分色をつけるからってことで落ちるんでしょうけれども、住民の中には、もっと早くそのかさ上げゾーンなり、緑地ゾーンなりを決めてくれれば直さなかった、と。

各地区には回ってはいるんですけど、地区の自治会長がお亡くなりになっているところもあり地域協議会も難しいです。行政員会議とかの際にいろいろ要望とか出てきているようですし、市のほうでも各地区回ってますが、そもそも集会所も流されてますし、なかなか草の根までいかない。

実際、復興にあたっては、土盛る部分にしても、国の予算次第って部分があるじゃないですか。こうですって言い切れない部分もあって。なかなかそれが。中には、町村独自で高台移転の費用を出したりとかする場合もありますよね。被害が大きいせいもありますけど、気仙沼市はなかなか一手が打てない状態になってます。職員もかなり壊れてきていますので。病休が全体の３％くらいかな。今年度は中途でやめる人が結構でています。もう駄目だって言って。昨日たまたま 40 才くらいのご夫婦が、２月末で市役所辞めるって聞きました。職員でもギリギリのが出てきてます。終わりが見えないっていうのもありますし。私自身は、実際、惨状を目の当たりにしてますし、確かに判定で不満不服は受けるんですけど、我々が判定しないことには話は先に進まないわけですね。結果的に、お金のもらえる半壊なのか、それより下の一部破損なのかってのはありますけど、罵られてもなんでも、これが住民のためになるんだって仕事してますね。最近になって、本来業務である新築家屋調査とかも入ってますけど、中には「この震災なのに、税金かけるの？」って言ってくる方もいるんですけど、国の方で出してる特例もありますんで、かなり新築家屋も被災して、その代替でとった家屋とかは優遇されてる部分があるので、それで納得していただくようにはしています。

震災後の雇用対策で、臨時職員を採用していますが、結局、任せられる仕事と任せられない仕事っていうのがあって。実は今、義援金バブルなんですよ。というのは、臨時の求人出しても応募が来ないんですよ。なかなか決らないんです。ただ、一応今月から失業手当が切れ始めるので、これから変化は出てくると思うんですけど、うちの係でも、常に２人くらいずつ、臨時さん、バイトさん入れているんですけど、求人出してもさっぱり来ない。

心のケアとかそういうことも含めてってことになるんですけど、やっぱりその家族を亡くされて、もう失意のどん底っていう人もいるわけで。

10.これから

私が９年いた鹿折地区の校庭が、やっぱり仮設になってたんですけど、お盆に連絡があって、盆踊りやるから来いって。校庭にやぐら組んで、そこで鹿折地区の人たち一堂に会してですね、そういうイベントがあって、そこで無事を確認できたってのもありましたし、やっぱりそこでご家族亡くされた方についても周りが支えるような、といったことも、そういったことでも救われる部分はあるのかなっていうのを、感じましたね。

一時の現実逃避に見えるかもしれないけど、それは未来につながるんだったら、逃避じゃないと思うんですよね。希望っていうか。生活を支える仕事の部分と、精神的な支えになるような文化活動だったり、スポーツだったり、そういうのが両方、必要なんですよね。

熊谷　公人（くまがい・きみと）

宮城県気仙沼市在住　職業：自治体職員

1973 年生まれ　宮城県本吉郡本吉町(現気仙沼市)出身

元本吉町青年連絡協議会広報部

※2011年度第34回宮城県青研の分科会内で語られた内容を編集した:芳賀広美､岩崎大輔､熊谷公人、辻智子

宮城県青研集合写真・熊谷さん(上段右から３人目)と菊池さん(上段左)　(2012 年１月)

あの日の食パンの味が忘れられない･･･

宮城県黒川郡大和町・武藤　順子

１．コーヒーまみれのままで避難作業

私は宮城県多賀城市にある、老人福祉施設（通所者向けのディサービス）で看護師をしています。

３月11日の震災当時は、ちょうど３時の休憩時間だったので、私は利用者に出すコーヒーを入れていました。

その時、急に大きな地震が発生し、今までに経験したこともないくらい、大きな揺れだったので、逃げるどころか立っていることも出来ずに、その場から動くことが出来ませんでした。入れていたコーヒーメーカーを押さえるも、中のお湯だけは押さえることは出来ず、ビシャビシャと熱湯がかかってきて、私はコーヒーだらけになりました。しかし、コーヒーまみれの衣服を着替える間もなく､｢津波が来る！」と周囲は大騒ぎになりました。

私の勤務地は宮城県多賀城市の大代地区で、近くには自衛隊多賀城駐屯地があります。海沿いに面した七ヶ浜町まで車で２、３分の所にあります。

地震直後は余震が止まず、更に電気も止まった為、全く情報が入ってこない状況でしたが、津波警報が鳴ったのか（鳴った記憶も全然ないですけど）あるいは誰かがラジオか携帯のワンセグで情報を入手したのか、津波が来るという事を知りました。しかし当時は、七ヶ浜方面からと仙台新港方面からと両方向から波が来るのでは？と情報も錯綜していました。

私の実家は宮城県内陸部の黒川郡大和町です。正直、生まれてから一度も沿岸部で生活した事が無い為､津波に対して疎いというか、正直、実感がありませんでした。しかし沿岸部出身の同僚達が「みんな（利用者さん）２階にあげるから！」と大騒ぎになりました。

それからは大慌てで１階の利用者さんを２階に移動させる作業になりました。足の不自由な方は車椅子に載せたり、寝たきりの方はシーツで包んで上げたりと大変でした。エレベーターが使えればまだ楽なのですが、停電の為に使えず､コーヒーまみれの格好のまま、階段を何往復もして必死に移動しました。

幸いな事に、地域の方々はここより北側の方に中学校があったので、そこに避難したので大きな混乱はありませんでした。

私の職場は２階建ての建物だったので、もっと別の高い場所への避難も考えましたが、私たち職員だけが避難する訳には行かず、まして避難しようにも利用者さん全員が歩ける訳でもない。車椅子も人数分ある訳も無く、更に入院者もいるので、ここにいた方が安全だと同僚達と残る覚悟を決めました｡(心の中では２階以上来たらアウトだねって覚悟したのかと思います)

その後、どこからともなくゴーという音がして、津波がやって来ました。

私の職場は、ちょうど丘に差し掛かる場所にあったので、すごい勢いで津波が来たのではなく、なだらかな丘をゆっくりゆっくりと徐々に登ってきた感じでした。なので、津波が来た直後は正直何が起こったのか分からなかったです。

津波は建物のちょうど入口で止まりました。しかし､ピチャピチャと水深は凄く浅いのに、そこら辺に駐車してある車が全て流されていました。

私の愛車（買ったばかりのプリウス。夢のハイブリッド。今は幻(>_<)）も、プカプカ浮いて流されて､近くの民家の入口で止まって、周りの車がどんどんどんどん乗っかって、折り重なるような状態で見つかりました。

２．極限状態での職場泊まり込み生活

そんな状況なので、その日は職場に泊まりになりました。正直、ひと晩くらいで何とか家に戻れるかなと思いましたが、そこからまさか２週間近く職場に泊まり込みになるとは思いませんでした。

職場の方からも、可能ならばここに留まって、利用者さんの面倒を見て欲しいと言われました。２、３時間程度で帰ってこられる程度ならば、自宅に一時帰宅しても構わないとの事でしたが、私は職場まで通勤時間は車で片道１時間弱。道もどうなっているか分からないし、まして家に戻るにも車がない。家族とも連絡が取れないから迎えも呼べない。更に利用者さんも見捨てる訳には行かない。私の実家は内陸部なので津波の心配は取りあえず無いだろうと思ったので、周辺に住む同僚を一旦自宅に戻して、私はここに留まる事にしました。

それよりも、目の前の利用者さん達を何とかしなければ、寒いし、電気も無いし。その想いだけで当時は必死でした。

震災当日、病棟100床に対し、残った看護士は５名。徐々に同僚のみんなが駆けつけて、７人とか８人とかになったものの、被災した同僚もいたので、交代シフトを編成したものの、時間までに戻ってくることができなかったり、家族の安否確認に追われたりと、人手不足は改善されませんでした。

病棟には電気で動く医療器具が多い為、停電の状態は利用者さんの命に関わる危機的な状況でもありました。寝たきりの方の痰を取る吸引器も動かすことが出来ず、電気を使わない注射器では、なかなか奥の方が取れずにいら立ちました。手回し式の発電機を持ち歩いて病棟内を回りましたが、機器は重い上に手回しの為、作業効率が悪く、さらにたくさんの利用者さんを回るので、疲労はピークに達していました。

追い討ちを掛けるように、食事の問題が発生しました。病院施設ですからある程度の食事の備蓄はあったのですが、震災後の混乱の影響もあって、調理係担当が仙台からこちらに来ることが出来なくなり、私たち看護科で急遽食事を作ることになりました。幸いな事に､石油ストーブと灯油の備蓄があったので、ストーブの上に鍋をかけレトルトパックのお粥を温めて配給することにしました。しかし備蓄には限界があります。外部と閉ざされた状況下で、いつまで食料が持つのだろうか？毎食お粥。お粥で果たして栄養面とか大丈夫なのだろうか。そういう不安が常に付きまとっていました。

限られた備蓄を持たせるために､１日２食、ほんの少しのおかゆで２週間食べ続けているとみんなもう、みるみる違う人になっていくのです。利用者さんが蝋人形みたいな姿になって生気がなくなって行く感じがしました。

でも、中には認知症の方もいて「これぱっかりしかよこさないで」って言われました。現状を理解していない為､「もっと食べたい」と騒ぎ始めて、事態を収束させるのには精神的にかなり疲れました。数日後、道路が復旧したので調理担当係がこちらに入ることが出

来ましたが、それまでの数日間は本当に寝る事も出来ずに、交代で２時間程度の仮眠を取るのがやっとの状況でした。

さらに困った事がありました。当時、仙台港の石油コンビナートから火災が発生しており、貯蔵タンクに引火した場合、大爆発が発生して衝撃で窓ガラスが割れるという話が聞こえて来た為、大急ぎで窓際の利用者さんの移動をするものの、利用者さんからは「なぜ寝せない」とブーブー文句を言われたり、「とにかく寝せろ」って騒がれたり。外は爆発すると何度も鳴り響く警報、中でも騒ぐ利用者さんと、内と外に挟まれて大変でした。

火事の勢いが増すに連れて今度は煙の問題が発生しました。石油化学物質が燃えることによって発生する黄色い煙が施設の周囲を覆いはじめました。有毒ガスの可能性があったのですが、防護服やマスクとかの用具もないので利用者さんにどうするか。全身を何かで包むにも何もない。もうパニック状態です。そのうち、勢いが増してきたので窓の開け閉めだけで無く、外部への出入りは完全に禁止状態になりました。言い方を変えると施設内監禁状態であり、精神的にはもう限界になりました。しかし、何人かだけの状態なら凄い恐怖なのかもしれませんが、同僚の仲間がいたから救われたのだと思います。

施設の一箇所に皆で集まって、「外に比べればストーブはあるしね。」とか、利用者さんの状況を話し合ったりして、吹き抜けで常に凍えながら過ごすくらい寒い環境だったけど、みんなでひとつになって支えあっていた感じがします。

最悪の環境だったので、前記の様に吸引ができなくて痰が絡んで亡くなった方とか、この間に３人の方が亡くなりました。

寒くて、雪も降っていた中、毛布くらいしか暖を取るものも無かったので、お年寄りだから寒さに耐えられなかったのかと自分を責めたりもしました。亡くなって、震災の状況では葬儀屋さんも簡単に来ることが出来ない為、数日間、施設内に安置するような状況も続きました。当時は冬だし震災の中だからあまり意識はしませんでしたが、他の利用者さんには精神的に良くなかったかなと今は思います。

３．あぶった食パンの味に涙する

数日後、支援物資が到着し、その中に食パンがありました。この間、水道も使用することが出来ず、給水車も数日間来ない状況が続いていたので、利用者さんに食パンを食べさせると、水もないので喉に詰まってしまう危険性があったので職員で食べることにしました。

同僚の誰かが「トーストで食べたいね」って言ったので、火も無くトースターも無かったので、冗談半分にライターで炙って食べることにしました。

香ばしい匂いとその食感から、誰かが「（焼肉の）カルビみたいな味がする」と言った途端、皆が「カルビ、カルビ」と騒ぎ始めました。そのくらい、極限状態だったのでしょう。後日、県団の仲間たちにその事を話したところ、大笑いされましたが、本当にあの味はカルビでした。２週間で救援物資は１度しか来なかったので、もし２回目があったとしたら正直そう感じることは無かったと思いますが、あの味はおそらく一生忘れることが無いと思います。

震災から５日程経った時、まだ道も悪く凄いヘドロの中を、父が車で私の職場まで心配して来てくれたのです。真っ暗な夜に足下がドロドロの中やってきたので、みんなで不審者でないのか？と構えたのですが､「あの～すみません。ここに武藤順子っていますか？」って。何か聞き覚えのある声だなあって思って確かめたら間違いなく父でした。普通ならば感動再会シーンか何かでしょうがその時は、みんなが不審者だと思って構えた相手が、実は私の父だった事と、内陸部で沿岸部の状況を知らない父の穏やかさに対してなのか、非常に恥ずかしさが込み上げて来ました。

父と一緒に弟も心配でついてきていました。姪っ子達も一緒にいたので､「危ないじゃないの。」と問いかけると、義妹も介護士をしており、私と同じ状況で母親が職場に出ていて家にいない為、パパ、パパって叫んで弟から離れないから連れて来たとの事でした。張り詰めていた緊張感が一気に和らぎ、姪っ子達の笑顔に心がとっても癒されました。

何もなければ父と一緒に自宅に帰りたかったのですが、まだ戻れる状況でないので、父が持ってきた着替えだけを受け取り、また勤務に戻ることにしました。

４．久々に戻った自宅のご飯に驚く･･･

３月20日頃に電気も復旧して、その３日後には水道や携帯電話も復旧、都市ガスも復旧し徐々に職員も勤務体系が整ってきたので、家族に電話を入れて迎えをお願いし、震災以降はじめて自宅に戻ることにしました。

自宅に戻りながら、沿岸部は壊滅的な状況なのに自宅周辺はそんなに被害がないので、被災地と自宅周辺のギャップに驚きました。

自宅に帰って、久々に家族と食卓を囲んだ際も、普通に食卓に肉が出たり…おかずがたくさん（それほどでも無いが）並ぶのに正直驚きました。

確かに震災直後は停電とかもあったので、冷蔵庫にあった買い置きを痛むから早めに食べて過ごしたらしいのですが、よく考えると震災前は普通の生活だったのですよね。普通の食事だったのですが、極限状態にいたから「何でこんなに出るの？」と思った自分が悲しくなりました。

実家の周辺は４日くらいで停電も復旧し、普通の生活を取り戻しつつありました。弟が「お母さんとお婆ちゃんは、いくらテレビを見ても（沿岸部の）現実が解らないだろう」と言い、私もそうなのかなと思いました。

震災後、ガソリンは入手するのも困難な状況だったので、数ヶ月は職場で借りてくれたアパートからの通勤になりました。月日が経つにつれて徐々に職場も、その周辺も落ち着きを取り戻してきました。あの過酷な状況、あれは何だったんだろうと徐々に考える事も少なくなってきました。しかし、あの震災の出来事は忘れることが出来ません。

５．あの震災を通して伝えたいこと

2012年12月末に大きな地震がありました。3.11程大きくはなく停電や断水などはなかったものの、周りの状況は当時と比べて一変していました。マスコミは「避難して下さい!!」と何度も何度も繰り返し叫び続けており、不安と恐怖に更に拍車がかかっていました。その日も私は仕事をしていたので避難出来なかったのですが、周りの住人が一目散に避難所へかけだして行くのです。当時は、何が起き

たか分からずに半信半疑で辺りをうろうろしていた人たちが血相を変え走っていました。そんな姿を目の当たりにし、何故か安心した自分もいました。

職場の周りではどんどん復旧していき、普通の生活に戻っていく中で、ふと思い出されたとき、忘れていた自分が恥ずかしく思えました。そして、行き違う人や車を見ながら、忘れ去られていくものなのかなと悲しい気持ちになりました。しかし、今回の地震で気づいたのは、考えないことが多くなって行くけど、忘れている訳じゃなく、3.11の恐怖や過酷な状況は染みついて取れないものなのだということでした。

みなさんは、今回のような震災にあったら、どうしますか。避難所や避難経路の把握をしていますか。いつ3.11のような大きな規模の震災が起きるか分からない中で、心構えは常に必要なのだと思います。

武藤　順子（むとう・じゅんこ）

宮城県黒川郡大和町在住　職業：看護師

1977年生まれ　宮城県黒川郡大和町出身

宮城県青年団連絡協議会副会長

※2011年度第34回宮城県青研の分科会内で語られた内容を編集した：岩崎大輔、武藤順子

黒川郡連合青年団で合唱する武藤さん(2012年10月)

あの日から

宮城県仙台市・山田　美香

3.11を思い出すことは、時間が過ぎていくだけで未だに辛く、胸が締め付けられるような心と気持ちと不安が混ざり、涙があふれ、息ができない自分をどのように表現したらよいのか、わからないものです。しかし、全国の仲間からの支援、協力、力強く優しい激励をたくさん頂いたこと、この場を借りて心から感謝申し上げます。

あの日は、被災地だけでなく様々な地域、そして一人ひとりが違った体験をし、被災者になったのではないでしょうか。職場、組織、近所や町内会、そして大切な家族を思い、考え、その立場でけんめいに務め上げたのではないのでしょうか。当時の私は、地震で被災し、実家と生まれ育った地元が津波によって壊滅状態となった悲劇の人物だと感じていました。しかし。多くの方々の体験談や『生きる』の第１号を見聞きするなかで、あの日のことを考えると、自分の甘さ、他人への依存、自分の行動がどうだったのかと振り返り責めたこともありました。この原稿を作成するにあたって、拒む気持ちもあり、伝える気持ちもあり、とても複雑な気持ちになっていることが正直なところです。

3.11と再会、そして産まれ育ち、暮らした地元

当日は、勤務先に向かう前で日用品の買い物をしていました。レジに並んだ直後に大きな横揺れに立っていることが出来ず、レジの台を必死に掴み、しゃがみこむ状態で長い揺れをしのぎました。商品棚が崩れ破片で左足

を負傷したことは、地震がおさまり店員の誘導で店外に出た後に気付きました。

店が用意してくれたラジオからは巨大地震と大津波警報を伝える慌てた声。沿岸部にある実家、両親、二人の弟とその家族のことだけが心配で携帯電話をかけ続けました。不安な気持ちが募るばかりでしたが、いっこうに繋がる気配がまったくありません。車内のラジオからは、依然として大津波警報の避難の呼びかけと各地域の被害が繰り返しながれていました。

時間の経過とともに事態の把握ができ、とても大きな災害だと確認することができました。雪が降る寒い中、子どもの手をひく母親、ヘルメットをかぶり自宅へと急ぐ人、信号機は停電のため一部のみ稼動で車道は渋滞。帰りを急ぐそのなかでも相手を思う譲り合いの行動があちらこちらでみられました。

停電で足元が見えないマンションの非常階段を昇り、土足のまま家財等でめちゃくちゃになった部屋をかき分け、避難用に準備していた軍手、懐中電灯、携帯ラジオ、カイロ、毛布、防寒着と仙台市から支給されていたヘルメットを探し、それらを装着し指定されている避難所へと向かいました。

しかし、体育館は避難者で埋まり、入ることはもちろん座ることも出来ない状況でした。マンションに戻り、１階のエントランスで居住者の方々と幾たびの余震の恐怖と鳴り止まないサイレンと寒さに震えながら過ごしました。夫とも連絡が取れず、依然として両親とも不通のまま時間と携帯電話の充電の減りだけが進むばかりでした。

夫と出会えたのは、23時をまわったあたりでした。マンションの駐車場から二人でみた夜空はどこまでも深く、真っ黒で吸い込まれそうで、そこに輝く満天の星たちに改めて宇宙の広さと大きさ、そして人間の小ささを痛感し、感動も感じながら身体が恐怖で震えたことを覚えています。

大津波の被害状況が大きく報道されるなか、連絡がとれない両親のことは無事に避難していてほしいと思いながら最悪のことも頭から離れず、もしも、もしかしてと自問自答を繰り返すなかで冷静な行動も言動も出来なくなり苛立ちが大きくなるばかりでした。

午前２時過ぎに母親の携帯電話とつながり弟と話ができ、両親も弟家族も全員無事であることが確認でき、安堵から緊張していた身体を熱い血液がめぐり、心と目の前を光りがはしるのを感じました。

両親と弟は津波で１階天井まで浸水した自宅２階で難を逃れたが自力で避難することが出来ない状態であること、避難後の待ち合わせ場所、中学校に避難していた義理の妹と姪、甥を迎えにいくことを約束し、眠れない夜を過ごしました。

日の出とともに中学校へ救出に行き、役割を決め、食料の買出しを終え、約束の場所で両親と弟を待ち続けました。瓦礫で寸断されている道なき道を避難してくる数人の人影に、お父さんだ。お母さんだ。亘（弟）だ。と三人を確認しました。腰まで泥だらけになった姿のお父さんとお母さんをぎっしりと抱きしめました。ただただ、生きていてくれたことに感謝しました。

父の友人からマンションの一部屋を借り、両親と弟家族を休ませることができました。大津波で壊滅した地元のことや近所のことを詳しく話すことも聞くことも出来ませんでし

たが、翌日弟から話を聞くと、消防団で住人の避難誘導を後輩と行なったこと、その後輩の行方が気になっていること、自宅に残っていた両親を救出するために津波に向かったこと、大津波で町内全体が流され、かなりの犠牲者がいること、自宅の被害状況、瓦礫の山になっていること。それは私の頭では想像することもできませんでした。実家のある町内では、私のことをよく知り、私も知る 52 名の方々の尊い命が犠牲となり、４分の３の家屋が津波によって破壊されました。

炊き出しと買出し、全国の仲間からのたくさんの支援物資

３日目からは自宅のある町内会で炊き出しの手伝いをし、４日目には電気が復旧した近所の美容院や飲食店から延長コードを引き、特設の携帯電話100台分の充電所を開設。町内の方々と協力し合い数日を乗り切りました。ほぼ電気が復旧したころには、各自自宅の復旧が優先となり炊き出し等の活動は終了となりました。二人とも青年団で培ったものが役に立ち、積極的に活動に参加できたことは自信と誇りとなりました。また非常事態であり、被災したことで都会なりの希薄な人間関係が消え、心も気持ちも一つになり不思議に楽しさと逞しさを感じた瞬間でした。

登山用のリックを背負い、街を歩き廻り開いている店に並び決められている数量の食糧を買いまた歩き、同じ事の繰り返し。両親、上の弟家族５人、下の弟家族の７人と私たちの16人分の食糧の確保は難しいものでした。被災している親戚もいるなかで宮城県青年会館の石垣理事長から頂いたお米はとても助かりました。

物流が再開したと同時に自宅にたくさんの支援物資が届きました。送り主は全国の青年団の仲間でした。一つひとつの箱の中から温かい気持ちが溢れてきて、胸がいっぱいになりました。手に入り難い野菜や果物、スパムの缶詰、カレー用にとジャガイモ、玉ねぎ、人参、カレールー、お米等々の食糧、子どもの洋服や下着類、歯ブラシや爪切りなどのエチケット用品、細かいところまでの心遣いが嬉しく感じました。マンションの方々に必要なものを少しずつ分け、実家のある地域で復旧、復興に頑張っている両親と近所の人たちと犠牲者の捜索活動を行なっている自衛隊員の炊き出しに使わせて頂きました。本当に感謝してもしきれないほどの気持ちです。

尊い命の最期と復帰した仕事で

葬儀社で働く私は、４月から身元が判明された犠牲者の方々のお世話に携わることになりました。

仙台市内にある10箇所の葬儀会館のうち被害が少なかった会館が安置所となっていました。その中の一つの会館が担当となり、毎日お迎え、お見送りが繰り返されるなか 30 体前後のご遺体に「おはようございます」と挨拶をし、線香、お茶、水、だんごを毎朝手向けることと、ご遺族の対応やご案内、ご出棺の立会い、面会時間後にドライアイスの交換、身体のケアを、犠牲になった一人ひとりを自分の大切な身内と思いお世話をしました。ご遺体にもご遺族にもかける言葉が見つからずに切なさだけが募る日々でした。

４月下旬から、犠牲になられた方々の通夜、葬儀告別式を行うようになり、一度に複数の故人の式に立ち会いました。子どもと奥さん

とおなかの中に授かった赤ちゃんの式に立ち会ったことも、前に述べた消防団の後輩の式も、私が産まれてからこれまで見守ってくれた近所のおじさんやおばさんの式にも。仕事とはいえ、辛いものでした。

現状と今後

実家は、両親や弟の迅速な対処と、親戚、多くのボランティアの努力で母屋の復旧が出来、現在は自宅で生活をしています。実家の地域はほぼ壊滅状態ではありますが、浸水した数軒の母屋を修理・復旧すれば住むことが出来る状態でした。しかし、仙台市が危険地域と判定し、増築・改築・新築が出来ない、もちろん住むことができなくなるということになり、数度の住民説明会と町内会の話し合いの中で市の判定を覆し、防潮堤や盛土などの条件付きで居住の許可を勝ち取りました。

しかし、津波の恐怖、住宅再建への不安で戻ることが出来ない方々、復旧せずに解体し他に移住を決めた方、昔からの強いコミュニティから複雑に入り混じっている人間関係の修復が難しいようです。母親は、いつも仮設住宅や買い物等で近所の方と会うたびに「明かりをつけて待っているから」と声をかけ続けています。いつの日にか、また近所の方々の笑い声が聞こえることを私も待ちます。

やむを得ず仮設住宅で生活する被災者だけを被災者として扱わず、自宅や借り上げ住宅で生活している被災者への平等なケアと支援、被災から復興する意識や目標、経済的な不安の解消など被災者に寄り添い、ともに考えてくれるコーディネーターの育成を行政だけに任せることなく青年団はもちろん、民間の団体が担うような環境が必要とされていると考えます。

この大震災をうけて感じ、学んだことがあります。それをいくつか述べさせてもらいます。

最初は自分自身や家族について。①何よりも自分の安全を確保すること。生きていれば出来ることがあります。②普段から家族間で災害時の避難場所や連絡方法を確認すること。③当日は通信が混乱していたが県外との連絡が取れやすかったので被災していない県外の親戚を安否確認の拠点としておくこと。④興奮状態で食欲がなかったが水分の摂取に苦労したことから最低３日間の食糧と水を確保すること。⑤自分が暮らす地域や自治会、近所と常にコミュニケーションをとり、行事等に意欲的に参加すること。

次に支援者について。①災害発生日の被災地域以外からの電話での安否確認は控え、インターネット等で検索できるシステムを活用すること。②被災した関係者から連絡や情報があるまで自分たちで何ができるのかをまとめること。③震災後、私は助けて欲しいや支援して欲しいとは言えませんでしたが、被災体験や懸命に生きていることを誰かに聞いて欲しいという衝動にかられました。そのことから、是非話を聴く体制を整え、そこから支援体制を考えてほしい。以上の事を私は今後の教訓として伝えたい。

また、私は震災後、このことや震災体験を多くの仲間に伝えたいと思い、宮城県へボランティアや視察に来てくれた仲間や、全国各地での講演で伝えてきた。しかし、もっとうまく表現できたのでは、もう忘れられて関心がなくなったのではと思う事もあります。まずは私自身がもっと前に進まなければ、何か

やらなければと頭の中を巡ることもありますが、私なりに焦らずに一歩ずつ進んでいきます。みんな被災者です、被災地域や被災状況で区別をせず、絆を大切に復興の字を復幸せに変えていくこと。そして、震災で受けた多くの恩に報いること。すべてに感謝すること。犠牲となった方々の尊い命と震災を忘れないこと。出会ったすべての方々にいかなる時も確実に生き抜くことを約束と切望して終わりとします。

山田　美香（やまだ・みか）

宮城県仙台市宮城野区在住　職業：会社員(パート)

1968年生まれ　宮城県仙台市宮城野区出身

元日本青年団協議会副会長

(日青協経歴：05～06年度･常任理事、

07～08年度･副会長、09～11年度･監事)

日青協臨時理事会で演説する山田さん（2009 年５月）

震災発生から 10 日間の記憶

宮城県角田市・佐久間　祥平

この手記を書いている最中（2012年12月７日午後５時18分）に久々の震度５弱の揺れを東日本で感じることとなりました。１メートルとはいえ津波警報も発令。改めて思い出したこともあるので､特に宮城県角田市という､海から一山隔てた街に住んでいる私とその周りの人々とのその当時の会話や思いを綴らせていただきたいと思います。

１．３月11日（金）

３交替の職場で働いている私は、その週は日勤（朝８時出勤）で、いつも通りの勤務をしていました｡そしてその日は蔵王町にある、ございんホール（文化会館）で２月末に行われた仙南青年文化祭の反省会が開かれる予定でしたので、仕事中からもう、来年度へ向けてどのような反省が出るのか楽しみでした。

そんな昼下がりの午後２時46分に職場の後輩から「大きな地震が来る！！！」と大きな声が上がりました。緊急地震速報が届く携帯電話を持っていた人たちから複数そんな声が聞かれた直後に、今までの人生で感じたことのない揺れを感じました｡「これはダメなやつだ！！！」私も直感でこう叫んで職場である工場から外に出ました。一度収まりかけた地震が再び強くなると停電も発生し動揺して泣き出す女性職員もいましたが、いずれは収まるだろうと楽観視していた私は､「大丈夫だから。それに、これで宮城県沖地震も来たし、みんな安心して家が建てられるね！」と、笑顔で話していました｡30年以内には 99%の確率で発生すると言われていた宮城県沖地震。

「地震が来ないと怖くて家なんか建てられないね。」我々世代は、よくこんな話をしていたのでふと私の口からついて出たのでした。一山向こうでこれから繰り広げられる惨劇など全く予想もしていませんでしたから。

やっと地震も落ち着いて（ちょこちょこ余震はありましたが)、職場の前の駐車場（指定されている避難場所）に集められた我々社員は上司から、①今日はもう帰っていい、②停電だからとりあえず夜勤と深夜勤は休みの方向で、③でも月曜日は必ず来い、の３点を言われそれぞれの帰路につきました。

職場の周りがさほどの被害に見舞われていなかったとはいえ、やはり県内にいる青年会関係の仲間の事が気になり、県団役員と各加盟団のメンバーに安否確認のメールを送り（まだ何回かに一回は届いていた）帰り道、車で家路を急いでいると、舗装道路のアスファルトがところどころ上下左右にずれており地震の強さを物語っていましたが､「見た目にはあれほどの地震の割には被害が少なくて良かった。早く停電回復してくれないかな？」くらいの気持ちでまだまだいました。

家に着くと母親が玄関先で近所の方と立ち話をしているようで、その輪に加わると当然話題は地震の話。近所の方は家の中にいて、外に出たかったけど立てなかったと。ただ家の中はめちゃくちゃにはなってないという話。うちの母は車で大河原町から帰ってきている最中の橋の上で地震にあったということで、信号やら看板やら標識やらがグラグラと揺れて、正直ダメかと思ったと話していました。私も職場での状況を伝えて、今日の蔵王での反省会は中止なのか電話もつながらないからわからないと、今考えればまだまだ呑気な話をしていました。

「まずは家の中に入ってみよう」ということで被害状況をチェック。この時点で佐久間家には誰も入ってない状況だったので、恐る恐る入ってみると食器棚からコップが２つくらいと、２階で私のパソコンのドライブが倒れていたくらいでさほどの被害は無し。いつまでも家の中にいると余震でやられるかも知れないという不安から、５時頃とりあえず外に出て私の車に母親を乗せて近くのパチンコ店の駐車場へ避難。そこなら街灯が倒れてきても大丈夫なくらい広い場所だったので余震が落ち着くまでと向かったのですが、暗くなっても一向に収まる気配のない余震に母親から「今日の夜は家に入るのが怖い」ということで一晩車の中で過ごす事を８時頃に決定。幸い前日に給油を済ませていたことで、若干の余裕を持って車中泊を決めることが出来ましたが、車のワンセグテレビからの情報だとガソリンが不足しそうとの話もあり、早く電気だけでも復旧してほしいと思っていたことを覚えています。

ワンセグが車についていたおかげで、映像つきの情報が少しずつだけではありますが手に入る環境に居られたのは、良くもあり、正直悪くもありました。まず夜になって飛び込んできた情報は、「仙台市若林区に300体以上の遺体が打ち上がっている」との話。そしてもう一つは県団事務局長が勤めている造船会社の作りかけの船が200人近い作業員を乗せたまま流されたという話。この時点で間違いなく局長は乗ったまま流されてしまっていると確信してしまい、無事の知らせが届く４日間は本当にあまり空腹にならない状況になりました。まだこの時点では津波が来ているら

しいという情報はワンセグから得てはいましたが、当時の我々のイメージする津波というのは50㎝くらいの「ピチャ」というくらいなので、なんかとんでもない事になっているぐらいの印象でした。

そのような中でこの日、感心する場面も目撃しました。避難していたパチンコ店から田んぼを挟んだところにコンビニがあるのですが、そのコンビニの店長であろう女性と若い男性店員一人が、電気も通ってない暗い店内に24時近くまで残り、店に来るお客に対してずっと応対していました。その日、角田は雪こそは降らなかったものの相当な寒さで、後日店長さんにそのときの話をお聞きする事が出来たんですが、「とにかくああいう時、お客さんは何かと困っているし、停電だから傷んでしまう商品もあるから少しでも対応できればと思って。」とおっしゃっていました。プロ意識だなと本当に感動しました。

２．３月12日（土）～13日（日）

車は時折エンジンを切りながら（節約より事故防止のため）、次の日の朝を迎えました。夜中の間ずっと余震が、それも強めの揺れが続いたものの、いつまでも家に入らないわけにはいかないので、勇気を出して家へ戻りました。前の晩は、車の中ということもありほとんど寝られなかったはずなのに、緊張とある種の興奮のせいか朝から全く眠くありませんでした。

まず家に居ても仕方がなかったので情報収集に徒歩で角田市役所を目指しました。普段だと家から15から20分で着く場所なので歩いたのですが、歩道も車道も至る所が隆起と陥没の嵐で、非常に歩きにくかったのを覚えています。

市役所はすでに情報を求める市民でいっぱいでした。青年会関係でお世話になった職員を見かけることが出来ましたが、皆住民への対応に追われていました。「電気はいつ通るかわかりません！」「水は給水車が出ます！」怒声に近い声があちこちで聞かれました。各小学校や公民館に避難している人たちの名前も張り出されており、内陸部であるとはいえ家族や親せきと離れ離れになっているケースはあるんだなと感じました。

その後、旧角田女子高校の前を通ったところ、葬儀屋さんの車とすれ違いました。何でこんなところにと考えながら歩いていると、自衛隊の車が何台も連なって女子高に入っていきました。後から聞いたところによると、隣町である亘理町、山元町で津波の被害にあった遺体が運ばれてきていたとのことで、そこでもまた悲惨な現実を思い知らされました。

帰り道、近くのファミリーレストランに列ができていました。電気も回復していないのにと思いながら近づいてみると、ガスで調理できる冷凍食品などを組み合わせて、魚フライや唐揚げなどを弁当にして販売していました。昨日の夜から私も母も何も食べていない状況だったこともあり、近所の親せきの分も合わせて３人分購入して食べたのですが、温かいものを食べられると思ってなかったので本当にうれしかったのを覚えています。

夜は家にあったドライフルーツなどを少しずつ食べ石油ストーブの近くで寝ましたが、なかなか余震も収まらなかったので不安な夜を過ごしました。

翌日13日も朝から食べ物がないか探してきてほしいとの母からの指示を受け、この日は

自転車でより広範囲を駆けずり回りました。市役所はより多くの市民が集まっていて、どこのスーパーが何時から開くなどの情報が張り出されていました。この２日間も車のワンセグでニュースは１時間ほどは見ていたのですが、気持ちが暗くなるので、なるべく原発の話題はほとんど聞き流して（内容も難しいので）いました。もちろん深刻な状況だと分かったのはもっと後だったので、しょうがないことですが、この２日間、外を駆けずり回っていた私はどの程度の放射能を浴びたのかと少しだけですが不安になりました。

３．３月14日（月）～15日（火）

14日は、金曜日に帰るときに、必ず月曜日は来いと言われていた日なので、ガソリンを使いたくないという気持ちが強くありましたが、職場も心配だったので仕方なく向かいました。職場に着くとだいたい半分くらいの従業員が集まっていました。この３日間の近況報告などを周りの仲間としていると会議を終えた上層部の方々がやってきて、とりあえず今日は安否の確認が最重要だということなので、来ていないメンバーを手分けして安否確認を取り、水曜日にまた出勤するようにとのことでした。電気も回復せず、うちの職場は水がないと仕事ができないので「出勤するだけガソリンの無駄だな」と思いながら、次は自転車で来なくてはいけないかもとみんなで口々に言いながら帰宅しました。

会社帰りに近くのガソリンスタンドに長蛇の列が出来ていました。あの日以来、停電のため閉まっていたガソリンスタンドが１台20リッター3,000円で燃料がなくなるまで営業しているのを聞き、私も並びました。これがこれから何度となく並ぶこととなるガソリンスタンド行列の１度目でした。この日は２時間ほどで順番が回ってきて無事入れることができましたが、この後数回デマ情報が流れ、開かないガソリンスタンドに無駄に並ぶこともありました。２度目以降はもう３～４時間は当たり前に並んでいました。それくらいあの時ガソリンは必要だったのです。

この日、良い事もありました。あの日以来全く電波が届かなかった携帯電話（当時母親も私もソフトバンク）にアンテナが１本立ったり立たなかったりの状況になり、100件近いメールが少しずつ届き始めました。同じ日に当時の会長から事務局長の無事が確認されたとの連絡を受け、飛び上がって喜びました。本当にうれしくて電話を切ってからも鼓動がすごかったのを覚えています。

４日目の夜を迎えて、懐中電灯などに頼っていた佐久間家で初めてろうそくが登場しました。何か不安感を煽るような気がしてろうそくを使用するのに消極的だった私ですが、火をつけてみると非常に明るくむしろ温かい気持ちになったことがものすごく印象に残っています。寝る前に私は電気、母は水道が早く復旧するといいなと話しながら床に就きました。

15日、角田市役所に行ってみると、とあるうわさが聞こえてきました。「そろそろ電気が復旧するって聞いたんだけど。」市役所の方々の対応は「はっきりしたことは分かりません！」とのこと。ただその対応していた人は知っている方だったので話を聞いてみると、「確かに復旧しそうなんだけど、もし明日って言って明日電気が復旧しなかったら嘘をつくなとか言われてしまうからこう対応するし

かないんだ。」と苦しい胸の内を明かしてくれました。ただ復旧が近いのは確かだと分かった私はかなり晴れやかな気分で家路につき、明日の仕事に備えました。

４．３月16日（水）～３月20日（日）

ガソリンは月曜日に入れたもののできれば余計な動きはしたくないのが本心、しかし職場へ向かいました。もしかしたらどこからか水を汲んできて少しは仕事を進めるのだろうか？とも思いましたが、電気が来ないのであれば機械が動かせない。この日も月曜からの新たな安否確認情報を集めただけで１時間半で帰宅となりました。ただ隣町は電気が来ていたので月曜日からは仕事を行うとのこと。

私はまっすぐ家へ向かったのですが、ある異変に気が付きました。我が家にいちばん近い交差点に差し掛かった時､「信号が点滅している･･･」本当に誰もいない車の中でつぶやいてしまいました。急いで家に帰ると部屋から母親以外の声が･･･テレビが５日ぶりに映ったのです！確かに流れてくる映像や情報は目を背けたくなるものばかりでしたが、ものすごくほっとしたのを覚えています。その日は久々に自分の部屋で就寝し、また一歩普段の生活へ近づいたなと感じました。

翌日から日曜までは、月曜からに迫った仕事の準備を主にしながら、ガソリンスタンドに４時間並んだり、わずかに入ってくる食料を店舗内がガラガラのコンビニに仕入れに行ったりと、生活に直結する事のみをやっていた気がします。ただまだ水道が復旧せず、この日まで体はわずかな給水車からの水で拭いたりはしていましたが、風呂には入れずじまいでした。

５．３月21日（月）以降、そして・・・

この日から仕事が始まりました。約10日ぶりの職場は、若干の損傷はあるものの、大きな痛手は負っておらず、水だけを近くの池や沼から汲んできての仕事再開でした。避難所から通ってくる従業員もいる中でのスタートで、家が無事だった私のような内陸の人間はなかなか気を遣って津波の話などをまだ聞ける状況ではありませんでした。この週の間に何度か断水しながらも水道が復旧し10日以上ぶりに風呂へも入ることができ、こんな日常的な入浴という行動が普通にできることに痛く感動しました。

こうして仕事が再開してから３日ほど経ったころ、今まで頭に浮かばなかった、いや頭に浮かべてはいけないと無意識に思っていたことがよぎりました。「青年会のことも考えないと･･･」高校を卒業してからこの時まで17年間、はっきり言って私の頭から青年会のことが離れた日は１日もなかったと断言してもいい生活をしてきました。しかし、あの日から10日以上、私の頭から青年会という文字が消えていました。確かに事務局長の無事が確認されたり、全国の仲間からのメールなどで励まされていたのは事実ですが、いざ活動という事までは頭が回ってませんでした。

そしてもう一つ私は例年とは少し違う状況に置かれていました。震災前の２月の県理事会にて、４月から宮城県団の会長になることが決まっていたのです。あれをやりたい、これもやりたい、あそこをもう少しこう変えたいなど、毎日毎日そればかりを考えていた私が、一切そのことを考えられなくなっていました。もちろんこんな事が起きればそれどころではないという事もありますが、こういう

時だから動かなくてはいけないのも青年会の役目だとも常日頃考えていました。それでも考えられなくなっていたのは17年間一度も離れたことのなかった「仕事」の存在でした。確かに20代のころは､「仕事なんかしないで青年会活動で飯が食えたらいいのに。」と考えていたくらいでしたが、いざ仕事から10日も離れると、生活に対する危機感というものが半端じゃないことに気づかされました。家族はもちろん守らなくちゃならないし、仕事がいつ再開できるかわからない状況では、本来余暇活動である青年会活動の事までは考えられないと思い知らされました。だから、仕事を再開してから数日過ぎて、ようやく落ち着いてきたころにやっと考えられるようになったんだと思います。

　今回、地元がこのような被害にあって、青年会においても、人生においても考えさせられることが非常に大きかった時期がやはりこの約10日間でしたので、集中的に書かせていただきました。辛く苦しく厳しい経験をすることになりましたが、これを必ず今後に活かさなくてはならないと考えています。最後になりましたが、あの日以降の全国の仲間からの支援や激励の言葉すべてに心から感謝し、これからも宮城での青年運動を精一杯行っていくことを約束して結ばせて頂きます。

佐久間　祥平（さくま・しょうへい）
宮城県角田市在住　職業：会社員
1976年生まれ　宮城県角田市出身
宮城県青年団連絡協議会会長

復興座談会で現状を語る佐久間さん（2012年12年）

全国からの支援に感謝を伝える横断幕を作成

『記憶』

福島県いわき市・鈴木　崇弘

その日、植木屋の私は四倉海岸沿いの光り輝く春の海を見ながら仕事をしていました。その家の主人（友人）が「ここはいい土地でよ、夏は涼しく、冬だってそれほどでないしよ。数年前にこんな春の海を見ていて娘に名前を付けたんだぁ…」と年中問わず波乗り達が集まる四倉海岸を見ながら話していたのが印象に残っています。

友人と近くの馴染みの蕎麦屋で昼食を共にし、当日は市内の中学生が卒業式という事もあり「こんな穏やかな良い日に卒業式っちゃいーわい」って話した覚えがあります。

午後になり北西からの黒雲に急かされるように仕事を進めました。夜に予定していた飲み会に期待しながら…。そんな当たり前の田舎の日常を生きていました。既に頭では翌日の仕事内容まで考えていました。

その時「あーっ！植木屋さぁ～ん!!地震！地震来るってよ～!!!」と叫び声が響き、友人の両親と就学前の娘さんが飛び出してきました！思わず後ずさりしながら皆と堤防に駆け上がり、きしみ出す家並みや揺れ動く自分のトラックや倒れるハシゴを何も出来ずに見ていました。立っていられたのかもしれませんが､怖くてゆっくり四つん這いになりました。揺れは全く収まらず、生まれて初めて本気の悲鳴を聞きながら屋根を滑る瓦や弾け飛ぶガラスサッシをただ固くなり見ているしかありませんでした。

大きい揺れが収まり冷静な判断が取れずに作業に戻ろうとした私に､「植木屋さん､電話忘れたんだから家に帰りな！」と帰宅を促さ

れた時に、でかいサイレンが鳴り「大津波警報が発令されました。住民の方は避難して下さい」というアナウンスが何度も聞こえました。警察や消防士も駆けつけてきました。そこから妻子の顔を見るまで記憶が曖昧です。

家族と合流し、生後半年の娘は「？？」って感じで妻におんぶされていました。「良かった！津波に遭わなかったんだね？」と妻と近所の方に言われテレビを見ました。先ほどの家族を思い電話を掛けましたが、混線で不通でした。（後程、津波による被害は受けましたが、ご家族は無事と判明）思い出したように消防団の支度をし、実家（家族）の様子を確認しながら消防団詰所へと向かいました。家族は無事でしたが、母親の車とトラクターが瓦の下敷き、土蔵と物置が全壊となっていました。

少しずつ泉崎消防団詰所に集まってくる団員達。その家族の無事を確認出来ると、地域の被害状況確認を命じました。いや、実際は団員達が自主的に行動してくれました。人的被害は無かったものの、住宅（主に屋根）や道路の損傷は痛々しかったです。その夜、分団長が各班の詰所を回って翌日からの活動要請を伝えてくれました。

翌日朝６時、付近の海岸線（新舞子）における「行方不明者の捜索活動」が始まり、防風林（松林）の中に刺さった車や、砂で見えなくなった道路を探し歩きました。今後の不安を考えないように大声を出して行方不明者を探しました。本音を言えば、あの状況の中、人間を見つけたらどうなっていたか…「おぉーい、誰かいませんかー？」と声に出していましたが、心の中では「誰もいないよなー！」って叫んでいました。情けなくもあり、二次被害の恐れがあるため、警察と自衛隊の指示で数時間にて休止となりました。

昼過ぎより行政から消防団に連絡があり、母校である草野小学校・中学校に相双地区避難民の受け入れをするための準備に向かいました。車の誘導や炊き出しの運搬、避難民を訪ねてくる家族の案内など経験した事もない活動にただ従事しました。自他の団員達に「ウチラはいつになったら帰れるんすか？」などと何べんも尋ねられました。「少し陰で休んでっせ」と返すしかありませんでした。帰宅したのは23時頃です。体育館に泊まった団員もいました。

３日目からは朝７時からの活動が続き、皆が知る原発事故の時も消防団である我々は小学校の校門にいました。次々と避難してくる人々、350名の受け入れを予定としていましたが、最終的には2,700名にまでなっていました。体育館だけではなく、各教室や保健室なども避難民で溢れ、それでもなお校門から車が入ろうとし「この小・中学校はいっぱいです！大変でも南小に行って下さい。」「あーっ？ここに行けって言われたんだ。南小ってどこだよっ。」そんなやりとりを私もやり合ううちに、ジュース缶を投げつけられました。酒を片手に「しっかり仕事しろ、テメーら。」って騒ぐオヤジもいました。当初は「こんにちワン♪ ありがとウサギー♪」などと、まるで徹マンのような変なテンションだった我々も、終わりが見えない活動に堪えきれなくなっていきます。

避難民と団員、団員同士でのケンカや罵り合いは、上の人間達が知らない所でしょっちゅう起きていました。「中（校舎・体育館）の活動の方が楽なんじゃね？」「ウチラだって被災者だっぺよ。」「皆してクソ真面目に毎日集

まってるから、いつまで経っても消防団が解散できねーんじゃね？」等など、たくさん聞きましたし、私も言いました。ひどい事も言いました。そのうち原発の問題が外にいる我々にも伝えられ、機転の利く先輩の指示でマスクを着用しました。それでも、「俺らは絶対被爆してるって！もうダメだっぺ。」等、誰ともなくそんな事を言い続け、「やっぱり早く逃げてれば良かったのに」「俺は今夜にも逃げっから、もう皆とも会う事ねーべ」等、発言は人によって様々だったがみんな険しくも諦めた様な顔をしていました。そのタイミングで妻から娘の写真付きメールがうまく受信でき、見た瞬間涙が出て小学校のプールのトイレに隠れて声を出して泣きました。いけない事ではありますが、壁や置いてあったバケツを思い切り蹴りながら泣きました。そして１時間位トランシーバーを切って隠れていました。モヤモヤした何かの答えや決断は見つからず、涙と一緒に片方のコンタクトが無くなっていました。言い訳は、お腹を壊していた事にしました。

夕方、当時危険と噂が流れた（死の）雨が今にも降りだしそうな空の下、本部役員の居ない中で各班長（私も含む９名）が集まり一つの決を出します。「明日朝からは参加しないようにしよう。皆も職場と家族がある。いいよな？」賛成でした。それよりもその言葉を一番若い自分が言い出せなかった事を恥じました。一番騒いでいたのに。雨の前にアパートに帰り「今日もお疲れ様だったね！さーちゃんはね、とーってもいい子だったよ～！」って労ってくれる妻に「もう行かねーがら…」と告げてすぐに寝ました。

次の日から弟と一緒にスーパーに並びました。朝６時半から並んで20番目、11時半に開店するまで十数年ぶりに弟と長話をしました。自分達の順番がくると走って買い物をしました。そんな経験は初めてでした。帰り道に気になって小学校の前を通ると、人数の減った消防団員が変わらぬ活動をしていました。罪悪感・カッコつけ・後々のため・何かやってないと…他のグチャグチャな理由を頭の中で回しながら午後からは草野小学校へ向かいました。

買い物も済んだし、いつでも避難できるように自家用車に荷物を積んでおきました。活動最中に合間をみて、関東各県と新潟の友人や親戚に、もしもの事（原発）があったら妻子を頼むと約束をしてもらいました。その皆が口を揃えていたことは「そんな事（消防）してる場合か。お前もすぐ来いよ。」でした。

「遅くなってすみません」。活動に混ざり、親戚酒屋の２トン車に３トンの水を積み(違反ですが)、一日数回に渡り地域内に給水する活動に従事しました。後輩達は積載車（消防団の車）で広報活動をしましたが、「何を言ってるのか聞こえないよ…」と苦情が住民から多々ありました。我々の積載車は有事の際に前方の人々や車両に注意を促すため、前方にしかスピーカーが付いておらず、構造上不便なものでした。水も一人４リットルの割当てで、住民から嫌みも言われ憤慨していた者もいました。（私は内緒で多めに配っていました。）仕方ない、みんな不安と苛立ちを溜め込んでおり、若い者は避難して残された年寄りが苛立っている傾向に見えました。ちなみにうちのアパートは25日に水が出ました。

作業の合間、分団長が特別に娘のためにオムツやミルクを取っていてくれました。「お前

の娘にも苦労をかけてるな。」この恩は忘れません。28日、消防団の活動が終了しました。地域行政が動き出したからです。嬉しい半面、最終日に顔を揃えたメンバーを見ると、ほとんどが自営業、多くは専業農家でした。私に至っては、翌日からの予定（収入を得る）は何もありませんでした。その頃、東京時代の友人が電話をくれて開口一番、「鈴木ぃ〜！お前…金はあるのか？正直に言え!!今必要なのは水や支援物資じゃなく現金なんじゃないのか？何日働いてない？」。３回断りました。「お前…マジで我慢はやめろよな！東北の人間の良い所でもあるが、悪い所でもあるぞ！」。後１回言われたら借りるところでした（笑）。その数日後、引き落とし不履行でカードが止まります。

ネガティブな文章が続きますが、あの頃は音楽（番組も）を聴く気になれなくて、情報を得るためにラジオかテレビだけの生活が続きました。携帯の地震アラームに備え iPod も使いませんでした。震災ゴミを運ぶ途中、堀内孝雄の「愛しき日々」や一青窈の「ハナミズキ」がラジオで流れた時はツツーッと涙が出ました。

４月から６月までは人づてにいろんな仕事をし、原発作業には行かずに済みました。仕事をしつつ、それまで休止状態だった青年活動の依頼も増えました。

私の住む福島県いわき市は『じゃんがら念仏踊り』という 400 年続く郷土芸能があります。市内には 100 を超える踊りを継承する青年会、保存会、愛好会などあり、女性だけの団体や子どもだけの会もあって、毎年８月お盆の時期には市内各所において、ご先祖の供養の為に唄や太鼓と鉦の音が響き渡ります。私も中学生の頃からそのじゃんがらに係わっており、その文化を大切にしてきた人間の一人と自負しています。

その風習に惹かれた（とされる）全国各地より、いわき市の各部署を通じて私の元に依頼が殺到しました。被災地の復興支援が主な理由でした。九州・関西・関東各県など…しかし、震災の痛みが残ってるいわき市のじゃんがら団体は参加が難しかったです。震災・原発・津波により市外に移った者が多かったからです。

なかなか条件（日程）が合わない中、震災以前より交流のあった東京都中野区のチャンプルーフェスタを取り仕切る方々より熱い出演依頼があり、他の青年会の力も借りて私の所属する泉崎青年会でじゃんがら念仏踊りを披露してきました。いわき市の踊りが少しでも知れ渡った事が嬉しく感じました。震災当時はもう同じメンバーで唄い、踊る事も無いかもと思っていたので、心からモヤモヤが少し消えた気がします。東京のド真ん中で深呼吸した覚えがあります。

９月に福島県連合青年会の渡辺会長を通じて、沖縄県青年団協議会（略称：沖青協）の被災地復興支援として、沖青協主催の「青年ふるさとエイサーまつり」への参加オファーがありました。真っ先に手を挙げたのが上高久青年会でした。メンバーに友人も多く、付き合いも長いことから補助メンバーとして参加させてももらいました。３度目の沖縄でありましたが行く度にその魅力に惹かれ、何よりも沖縄の青年会から受ける言葉・行動・情熱には毎回感動します。沖縄に行く人がいたら、観光もいいですが、あちらの青年会の活動に触れてみるといいと思います。

そしてそこから続いてる付き合いの延長で、少ない正月休みにこの原稿執筆をする羽目になっています（笑）。軽く引き受けたものの書き始めたら終わらなくなり結構後悔しています。福島県連合青年会の渡辺会長に年末年始の穴埋めをしてもらう事を期待しています。

じゃんがら繋がりで言えば40年間続いている「いわき市青年じゃんがら大会」という発表会があります。震災当年（８月）は混乱と安全面などを考えて無理であろうとされていましたが、いわき市内平（たいら）地区七夕祭り実行委員会や各青年会、保存会など10団体の力を借りて『じゃんがら慰霊祭』を開催できました。開会式には初めての試みである全団体参加の一斉打ち鳴らしえを行って、震災やここ一年内に亡くなった新しい仏様を偲びました。毎年各団体の持ち前の唄や技が発表される素晴らしい大会でしたが、この年は各団体から唄や演技を通じて滲み、いや溢れ出る気持ちがありました。こらえきれずに泣いている観客も多数みられました。

第41回いわき市青年じゃんがら大会は無事に2012年８月６日に開催されました。年を追うごとに休会する青年会と、減少を続ける青年会員の数…そんな中でも毎年お神輿や清掃活動、盆踊りに駅伝大会、公民館まつりにじゃんがら大会などなど…自分達も受け継ぎ携わってきた活動を、仕事や家庭、人によっては農作業、趣味などの時間を割いて運営・参加している青年会の友人や後輩達。「お前達には世話になったから」と自然に手を差し伸べてくださる諸先輩方の繋がりとパワー!!私は青年会を通じて出会った仲間とじゃんがら念仏踊りを舞う事は、いわきの心だと思っており、それに精一杯携わる人々は手を繋ぎ合い、さらに自分達の地域を光り輝かせる事が出来る人達なのだと信じています。

最後に、様々な問題が山積みのこの社会が、どのような回復の道と解決の未来を辿り迎えるのか、正直私には分かりませんし、個人で片付けられる問題でもありません。それならば私達が出来る事とは…。

社会生活の根っこである、自分の家庭を今一度大切に明るく、そして健全に問題を解決していく事に努めて、家庭の集合体である地域社会から福島県へ、東北へ、最後には優しい明かりが灯る国へと続いていく事を本気で願っています。

鈴木　崇弘（すずき・たかひろ）

福島県いわき市在住　職業：造園業

1974 年生まれ　福島県いわき市出身

いわき市青年団体連絡協議会事務局長

じゃんがら念仏踊り(2013 年３月)

３.11 の経験

静岡県静岡市・相馬　隆史

東日本大震災により、亡くなられた多くの方に哀悼の意を表すとともに被災されたすべての皆様の復旧復興を、心よりお祈り申し上げます。

『生きる』第１号を手にしたとき、メディアで知らされていた情報では知ることのできない、想像も絶する内容に、胸が痛くなる思いをすると同時に、知ることのできた一人として決して忘れてはいけないものだと、感じました。

2011年３月11日、震災のあった日、私はちょうど青森県連合青年団に青年問題研究集会の助言者として呼ばれていました。

本当は午前中に青森入りをめざしていましたが、その日は仕事の都合で13時37分発の新幹線に乗り、静岡駅を出発しました。

静岡から青森に行くには東京駅で東北新幹線に乗り換える必要があり、14時40分に東京駅に到着し、15分位乗り換えの時間がありました。その間にお弁当を買おうと東北新幹線のホームの売店に入っているとき、地震にあいました。

ただ、最初は揺れていることには気づきませんでした。電車酔いでもしたのかなと思っていて、気持ち悪いなと感じていたぐらいです。ところが、売店の外に出たときに看板が揺れているのを見て、これは地震なんだとわかりました。

１回目の揺れでホームにはアナウンスが何回も繰り返し入っていましたが、避難誘導は

ありませんでした。周りも少し大きな地震にざわざわしていたぐらいの騒ぎで、私もまた歩きはじめたところ、２回目の揺れが来ました。

２回目の揺れではホームにしゃがみ込んでいる人もいれば、悲鳴も聞こえ、天井が落ちているところもありました。周りの人も動くことができないという状況でした。

その瞬間は、「関東大震災か東海地震が来たんだ」と思ったほどです。

とにかくホームにいては何があるか分からないので危ないと思い、東北新幹線の車内に急いで駆け込みました。車内も揺れによって大混雑となっていて、立っていられずに柱につかまっている方もいました。

青森行きの新幹線も全く動きませんでしたが、混乱が収まればすぐ動き出すだろうと、しばらく座席に座って待っていました。「東京がこれぐらいの揺れだったんだから、絶対に東海地震が来たんだ」。そう思っていたからです。とにかく東海地方は危ないから、なるべく遠くに離れた方がいいんじゃないかと。

それからしばらくして、新幹線内の電光掲示板にニュースが流れました。内容は東北で地震があったというものです。ここではじめて東日本大震災が起きたことを知ります。

とにかく行き先の青森県が心配になり、日青協常任理事（当時）の成田豊さんに連絡を取ろうと電話を掛け続けましたが、一向につながりません。ここから携帯電話の電池が切れるまで５時間、成田さんとは一回もつながりませんでした。

電車はすべてストップしていて動かなかったため、とりあえず駅を出ようと思い、ホームを降りて改札から出ると、外の広場は人でごった返していました。東京駅の八重洲側に出ましたが、もう大パニックです。広場のテレビでは東北の映像が流れていました。

八重洲口のタクシー乗り場にはもう一台もタクシーが無いにもかかわらず、タクシー待ちの大行列ができていました。また、バスもまったく来る気配が無く、電車も動いていないという状況で、交通機関が完全に麻痺していました。

携帯電話もつながらなくなっていたので、とりあえず電話ボックスから日青協（新宿区）に連絡しようと思いました。しかし、東京駅の電話ボックスには、既に数100mにも及ぶ列ができていました。

そうこうしているうちに、もう15時30分になっていることに気づきます。その間も東京駅の混雑は一向に解消されず、タクシーもバスも来なかったので、とりあえずここから離れよう、歩こうと決意しました。外は小雨も降っていましたが、歩いていればいつかタクシーを拾えるだろうと、この時点ではそれぐらいの考えでした。

歩きはじめてすぐ、八重洲口の裏路地にあるコンビニの電話ボックスが空いているのを見つけました。すぐに日青協事務局へ連絡をしました。日青協事務局に状況を説明し、このままでは何もできないので日本青年館へ向かうと伝えました。日青協へ行けば青森の状況も分かるかもしれないし、何とかなると思ったからです。

路地裏に来て気づいたのですが、所々、ガラスが割れている建物がありました。大通り以外は足下も危ないことを直感しました。そこで大通りへ戻って、大勢の人がただひたすら歩いている列に混ざることにしました。し

かし、それ以降は見つける電話ボックスからどこへ電話をしてもつながらない状況に陥ります。

東京の道はさっぱり分からないので、ずっと人の流れに沿って歩き続けました。ただひたすら旅行用のキャリーバッグを引きながら歩くだけです。歩きながら考えていたことは、とにかく青森県がどういう状況なのかということです。東北で地震があったというのは新幹線で知りましたが、どこが震源地なのかは全くわからないままだったからです。

ひたすら歩き続けていると、一通のメールが届きました。青森県団の川井若奈団長からでした。「地震があったので、今日の青森県の青研は中止にします」という内容を見て、青森のみんなは大丈夫なんだと知り、とても安心したことを覚えています。

ただ、歩いている最中もほとんどタクシーを見かけることはありませんでした。とにかく黙々と日本青年館だけをめざして、青年館に着くことと青森県のこと以外は何も考える余裕もなく歩いていました。道も分からない東京を歩き続けている中で、たぶん人の群れの中にいたことで安心感を得ていたんだと思います。人の流れに合わせて歩いていても、日本青年館につくはずもないと気づいたのは、冷静に考えることのできた翌日以降の話です。

３時間半ほど歩き続けた19時30分頃、めざしていた外苑前駅でも千駄ヶ谷駅でもない新宿駅へ到着していました。新宿駅に着いてはじめて自分が新宿にいる、人の列が新宿をめざして歩いていたんだと気づきました。新宿駅に着いたのでとりあえず駅構内に入ろうと思いましたが、夜の新宿駅は帰宅困難者で大混雑となっていました。新宿でも乗用車はたくさん見かけましたが、タクシーは全く見ませんでした。とにかく座れそうなところには全て人が座っていて、駅の中に入ることもできなかった私は、また人の列に戻って歩きはじめました。

東日本大震災当日の帰宅困難者

青年館に行くとだけ伝えていた日青協事務局からは、青年館も帰宅困難者の受け入れのために部屋を開放していて、空き部屋がないというメールが来ていました。それなら道のわからない日本青年館をめざすより、東京駅に戻れば新幹線が動くかもしれない。そんな淡い期待を抱きながら、ただひたすら来た道を戻りました。東京駅へ戻っている時は、一度歩いた道です。先ほど見た建物を確認しながら、東京駅へ向かっていることを安心しながら歩いていました。そのおかげか、だいぶ冷静になってきました。日青協や各所へ電話やメールもし、無事につながったところには状況を説明しました。日青協事務局にもつながったので、東京駅に戻っていることを伝えました。戻っている時には、東北の青年団員やお世話になった先輩たちのことを思い出しながら、みんな無事だろうかと思いつつ歩いていました。

新宿へ行く道も、東京駅へ戻る道も、誰と

もしゃべらずに黙々と歩きました。ああいう状況になると人間はこんなに歩けるのかと不思議に思います。あの日は歩いている途中に小雨も降っており、寒いなと思い、ダウンコートを着ていました。いつも薄着の私ですが、幸い、豪雪地帯の青森県に行く準備をしていたので、キャリーバッグの中には防寒着があったのです。

携帯電話にはワンセグがついていましたが、電池の消耗が心配なので一切見ませんでした。電源が切れて外部と遮断されることが一番怖かったので、かかってくる電話やメールを待っていました。電池の消耗が激しいスマートフォンが普及している今、震災が起きたらどうなるのだろうと不安です。

携帯電話は混線していて電話がつながることはありませんでしたが、メールは入ってきていました。青森の成田さんからは「生きてるか」というメールが入ってきていて、他の人からもたくさん「大丈夫か」というメールが来ていました。ただ、ほとんどのメールに２時間、３時間のずれがありました。

新宿駅から東京駅をめざし、皇居の前を歩いて東京駅へ。行きに歩きはじめた東京駅の八重洲口ではなく、反対の丸の内側へ着いたのが23時ごろでした。

そのころには駅の外でタクシーやバスを待っていた人もだいぶ少なくなっていました。ただ、新宿駅と同じように、東京駅の中もいたるところに人が座り込んでいました。壁も、階段も、地面もすべてです。私も休憩しようと座れるところを少し探しました。新幹線乗り換え時にホームで買って持ち歩いていたお弁当を食べようと思ったからです。歩いていた間に口にしたものは、お弁当と一緒に買った500mlのお茶だけです。しかし、このお茶も歩いている最中に飲みきってしまったので、東京駅のコンビニで飲み物を買おうと入りました。このとき、震災以降はじめてお店に入ることができました。ただ、食べ物も飲み物も何もありませんでした。あんなガラガラのコンビニを見たのは初めてです。

その後、東京駅の中を歩き、座れる所を見つけることができたのでやっと座ることができました。ここで持ち歩いていた弁当を食べようと思いましたが、周りを見渡すと誰一人として食べ物を口にしている人はいませんでした。お腹は空いていましたが、ここは食べるべきではないなと判断しました。

それからは新幹線が運転再開しないだろうかと、静岡に帰るため、東海道新幹線の改札近くで座って待っていました。いつ動くか確認しようにも駅員が一人もいません。ただひたすら待っていました。

東京駅にいる間は来ていたメールに返信をしていました。24時が過ぎると駅員が改札の近くでバタバタと動いているのに気づきました。「これは新幹線が動くのでは」と思い、改札の前で待っていました。すると、５分、10分で東海道新幹線が動くとアナウンスが流れました。切符も何もいらないので、乗ってくださいという指示で、フリーパスでした。私は改札の最前列の方で待っていましたが、アナウンスが入った後は我先に改札を通ろうとする人でパニックになりました。私は大きな旅行カバンがあったので、改札を通っても階段でどんどん後ろから来た人に追い抜かれていきます。

階段を上がると車両の入口にものすごい人がいて、これは乗れないなと思いました。し

かし、階段から遠い入口は空いているように見え、人垣を掻き分けながら、先頭車両の１号車に向かいました。その１号車には誰も乗っておらず、一番乗りでした。私はガラガラの１号車の先頭に座りました。私が１号車に乗った後、それに気づいた人がどんどんと押し寄せてきて、15分ぐらいで車内がすし詰め状態になりました。私が座っていた先頭の３人がけの座席の前に、５人が無理矢理入り込んで乗っているような状態です。

人が乗れるだけ乗ると、新幹線も動き出しました。しばらくすると、東京駅の隣の品川駅に停車しました。品川駅の新幹線ホームも東京駅と同様に開放されていて、ものすごい人数がホームで待っていました。一応、駅に止まったという感じです。品川駅ではもう少し詰められないかとの声も聞こえましたが、明らかに無理です。あまりにも人が乗っているので、品川駅で降りたい人も降りられないような状況だったと思います。

すし詰め状態の車内も、次の新横浜でほとんどの人が降りて行きました。乗ってくる人もほとんどいなくて、それ以降は車内もガラガラです。品川で降りたかった人もいたでしょうが、新横浜までは何も動くことができませんでした。東京から新横浜までは徐行運転もし、途中で何回も止まりました。いつもの倍は時間がかかったと思います。

新幹線は「こだま」だったので、それ以降の駅も全て止まっていました。ほとんどの人が新横浜で降りたのを見ると、都内で働いている人が家に帰るために乗っていたんだと思います。新横浜から東海地方へ向かうホームも人がまばらにいるぐらいでした。

それ以降、静岡駅までスムーズに着きました。途中で降りる人もほとんどいません。静岡に近づくと東京とは携帯電話の基地局が変わったのか、貯まっていたメールもどんどん入ってきたので返信をしていました。静岡駅にはおそらく３月12日の午前１時30分ぐらいに着いたはずです。静岡に着いた後、自分の乗った列車の後にも少し運転していたと知りました。

静岡駅はとても平和で、東京での出来事が嘘のようでした。東海道新幹線の改札も空いていなかったので、駅員に説明して通してもらったぐらいです。

駅から自宅にはタクシーで帰りました。自宅に着いたのは２時頃だったのを覚えています。家を出て、13時間ぐらいかけて戻ってきたことになります。

最後に、今回偶然ではありましたが、青森にむかう途中に東京で震災に遭い、様々な事を感じさせられました。

今の日本は、何もない時であれば、自分の知りたい情報も当たり前のように得ることができます。しかし、混乱の最中では殆ど何の情報もつかめません。その時の怖さや不安は、とても大きなものに感じました。

私の住む静岡県でも、30年以上前から東海大地震が起こると言われています。もし起こってしまった時、少しでも大切な地域や仲間の力になれるように、今回の震災を決して忘れずに対応を考えていきたいと思います。

相馬　隆史（そうま・たかふみ）

静岡県静岡市在住　職業:自営業

1975年生まれ、静岡県清水市（現静岡市）出身

日本青年団協議会常任理事

(日青協経歴：10～12 年度･常任理事)

第 43 回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会にて司会を務める相馬常任理事(2012 年７月)

第2章　暮らす　3.11後の記録

付記
・手記は、居住地の北から順に、居住地内は名前のあいうえお順に、並べて掲載した。
・編集作業においては、誤字・脱字の加筆修正、漢字と平仮名との変換、必要と思われる改行などを行った。（編集委）

震災はまだ終わっていない
岩手県陸前高田市・泉田　将治

あの東日本大震災から間もなく２年が過ぎようとしています（寄稿時2013年１月）。

眼前に見渡す限りに広がっていた瓦礫の撤去・分別作業も終わりに近づき、残されていた公共物の解体も進んでいます。残された広大な空き地を見ると、震災前の情景も思い出せなくなっていることに気がつきます。それとともに、改めて津波の威力、そして失ったものの多さを痛感しています。

大震災以降それまでの仕事場所(ガソリンスタンド)を失い､市役所の臨時職員として瓦礫の撤去作業を一年間従事していました。瓦礫とはいっても大震災前まで生活していた痕跡なので複雑な思いで作業をしていました。目につくものが知人の物だったりすると、改めて失ったものの多さに絶望を感じることもありました。

全壊した陸前高田市役所（2011年４月）

あの日以来自分の生活を維持するだけの時期がありましたが、改めて回顧してみると、こうして「生きている」ことが奇跡に近いことだったような気がしています。一歩間違っていたら自分も流されていたかもしれないと考えてみると、津波の恐ろしさ・逃げることの大切さを感じています。

市役所前から見る陸前高田市街（2013年１月）

この大震災以降、全国各地からボランティアが集まっていましたが、最近はそれもまばらになっています。土日でも呆れるほど見た大型観光バスも来なくなり、被災地（東北地方）から一歩離れれば、あの大震災が無かったかのような現実があります。メディアによる報道も少なくなってきており、それに伴い人の記憶から大震災のことが忘れ去られてしまっているのではないのか？との疑念に駆られてしまいます。「もう終わったのでしょう？」と言われるたびに悲しい思いもしました。現実は復旧に目途がつきはじめ、復興に向けての一歩が始まったにすぎません。震災以前の生活基準に戻るには何年必要なのか？復興に青年団として何ができるだろうか？いくら考えても答えを出すことは難しいです。

被災地では様々な問題が浮上しており、その解決方法・指針も明確にならないまま日々だけが過ぎていきます。瓦礫の処理・住宅の移転・市街地の形成・人口の流出等、数えたらキリが無いくらいです。例として、同じ被災者なのに仮設住宅に住んでいる人とそうでない人との間に格差が生じ始めているような

気がしています。その最たる例が情報の格差です。仮設住宅にだけ支援の情報が流れ、一般住宅でも支援を必要としている人には情報が来ないなどの格差があります。

これまでの経験がまるで役に立たないとまではいきませんが、大震災前まで当たり前に感じていたことが失われてしまい、「何」をするのにも時間と場所に制限がかかるようになってしまいました。そのような中でも青年団としての活動を継続できる下地を残してくれた先輩たちに感謝しつつ、自分たちに「何が」出来るのかと自問自答を繰り返しながらも前進するしかありません。地域に根ざした活動を展開してきたからこそ、これから始まる「新しい地域」の中でも変わらない「青年団らしさ」を前面に出しながら活動を展開していく姿勢こそが大事だと考えています。すべての事業において手探りの状況ながらも、これまでの経験を生かしながら活動することによって、新しい事業を起こそうとする余力も出てきました。大震災直後は青年団活動のことなど全く考えられずにいましたが、徐々に生活に慣れ始めると活動をしていこうという気持ちにもなりました。というよりは、活動をしていると気がまぎれるという表現が正しいのかもしれませんでした。

この大震災を経験して、全国各地の仲間から励ましや支援を頂き、感謝しても足りないくらいです。震災前はあまり気にしてはいませんでしたが、このような状況下になり人との繋がりの大事さを再確認しました。青年団活動を通じて人との繋がりを構築できていたことに感謝し、これからの世代にも伝えていけるように努力していきたいです。

泉田　将治（いずみだ・まさはる）

岩手県陸前高田市在住　職業：運送業

1975年生まれ　岩手県陸前高田市出身

岩手県青年団体協議会監事

前岩手県青年団体協議会会長

静岡県青研で講演する泉田さん（2013年１月）

米崎小仮設住宅から－2012 年・春
岩手県陸前高田市・佐藤　一男

―昨年(2011年)８月10日、避難所からすべての方が仮設住宅に入られたとのことですが、その後、生活や仮設住宅の運営は落ち着いてきましたか？

本来、仮設住宅は中間点なので、自分がうちを建てる、終の棲家を見つける、っていうのが最終目的であって仮設住宅はゴールではありません。そういう意味では一段落したというか、仮設住宅には慣れましたけど、次のステップとして、自分はどこに行くって決断して、その準備をしなきゃいけない時期に入っちゃいましたので、高台への集団移転を選ぶ人、自分で自宅を建てる能力がないので公営住宅の方を選択する人とあるんですけど、それがどこになるのか、どこに行くのかっていうと、行きたいなって思うところはあっても、もともと他人の土地なので、なかなか話が進まない。

市、県、国から言われたのは、自分らで、その行きたい土地の所有者と話をつけて市の方に持ってきてくれということで、市内で実際そういう動きがあって進んではいたんですけど、じゃ、それを市、国、県が坪単価いくらで買うかってなった時に、被災前の現況地価格でしか買わないんです。土地提供者の半分くらいは被災者ですので自分も家を建てたいわけです。であれば、せっかくある大きい土地を売って、それを元手にして、できればそこに自分のうちも建てたい。その時の元手になればと思って売りたいわけですが、被災前の値段となると坪300円とかなんです。100坪売ったって３万円。３万円。とてもじゃないけどうちは建たない。何にもならない。結局、話は頓挫しまして、だったら、俺が自分で業者を頼んで、俺が勝手に土地を売るよって話になる。そうすれば、自分の儲けは、坪5,000円か１万円､そこにかかった経費を乗っけてやれば100坪で100万円にはなりますから。これが現実です。

佐藤さん、米崎小学校仮設住宅前にて

―国や県の方の動きが遅いですね。

そうですね。なんでこんなにかかるんだろうって思います。もしも関東で、この震災が起きた場合､このスピードで動くのかなって、ありえないと思う｡そうこうしているうちに、都市計画も出ないうちに、どんどん業者さんによる土地の買い占めが始まっているので。今、新しい動きになってるのは、自分で土地を用意して､自分でうちを建てるっていう人。自分の土地が山の方にあるから、そっちに建てるとか、親戚と一緒に建てるからっていう人も、だいぶ出てきました。そこで発生している問題が仮設住宅の運営。中心メンバーとして頼まれる人ほど、やっぱりそういう動きは早いんですよ。決断力や行動力のある人から先に自宅再建も動き出すから。そういう人には自治会も頼みやすいのですが、自分のことでも動きは早い。結局、そういうことの出

来ない人たちだけが、最後に仮設住宅に残る。残った人がどうなるのかなって考えると、ちょっと怖いところがあります。

―そうすると残ったなかでの、より「動ける人」に、ケアとかサポートなどの活動の量が過剰に増えてしまいます。

それこそ１年後、２年後に「自治会運営ボランティア」っていうのが常駐で必要になってくるんじゃないかなと思うくらい。

―佐藤さんは自治会長をやっておられますが住民の方の相談にのる機会も多いのですか？

相談すらこないです。逆に、動き出す人ほどさっさと、「俺、土地みつけたからさ」って、「何月頃いなくなるからさ」って。出ていくな、とも言えませんしね。そういう過渡期に、今、入ってきました。

―大きな分かれ目ですね。佐藤さんご自身は？

とりあえず今、三か所の土地をあたってるんですけど、正直、漁業をやってると厳しいところもあります。集団移転計画は、国の場合、制限100坪となってるんですけど、100坪じゃ自宅建てて駐車場を置くと終わりなんですよ。漁業の場合、どうしても高額の資材が入るんで、自宅から見えるところに倉庫がないと、とてもじゃないけど怖くて。倉庫と離れたところに住むってわけにもなかなかいかなくて。100万円くらいの資材が入るので。

―漁業の方にはいつ頃から復帰したのですか？

私はこの４月(2012年)から海に戻ったんです。去年の８月くらいから皆で共同作業やってたんで、それからやっと。桜ライン311の方も一段落したし。浜の方にも行かずに、浜の人間に「桜植えてくれ」って言っても、「お前、何やってるんだ」って言われて終わりだから。自分のやることもやっていかないと。

―漁師の仕事と自治会の運営との両立は大変でしょうね。今日は午後から足のマッサージのボランティアが来るとおっしゃっていましたが、そういう外からのボランティアの受け入れは自治会長の佐藤さんが一手に受け入れの調整をするのですか？

今のところはそうです。最近は、こっちも選ばせてもらってます。最初の頃から宗教関係はお断りってことでやってますけど。仮設住宅に住んでるからって、うちらだけが、もらうだけの支援は、もういいんじゃないかっていうことで。いろいろな店が建って復活してきたんで。そこにお金が回らなくて店がつぶれた場合、じゃ、３年後、５年後にうちらはどこに買いものに行けばいいのってことになっちゃうから。できるだけ地元でお金を使うように。陸前高田に、もともとあって、でも今回の被災でなくなっちゃったものの支援はお願いしますと。もともとあって、今、もうできちゃったものは、申し訳ないけどお断りします、ってことでやってます。

―例えばどんな店ですか？

この辺で一番最初に断り始めたのはヘアカット。この近くにも床屋さんがありますし、他にも何軒かできてきて、そんなに待たずに床屋に行けるようになった。その段階で、うちらだけ無料でカットしてもらうっていうっていうのもおかしい話なので、そういうボラ

ンティアはお断りしました。あと、こないだお断りしたのが自転車の無料修理。ずっと来てもらってたんですけど、パンク修理程度ですけど、してくれる自転車屋もできたので、その店をつぶしていられないんで、もともと数少ない自転車屋ですからね。学校でブレーキと空気圧の定期点検してもらっていたのに、その自転車屋さんが対応できなくなったので、それは外からのボランティアさんにお願いしましたけど、有償で修理になる部分に関しては地元の自転車屋さんに行って下さいって形にしてるんです。

陸前高田市内の仮設商店街

―外からの支援の申し出は、事前に必ず連絡があって自治会を通して受け入れるという状態ですか？ゲリラ的に突然やって来て困りつつ対応することもありますか？

結構ありますね。年が明けてから(2012年)は、そんなになくなりましたけど、年末までは、いきなり来て、駐車場でブルーシートを広げて、「はい、物資配布です」っていうのもありました。断るっていうのも変な話なんですけど、結局、そこにいた人だけが得をするっていう形だとトラブルになりやすいので、事前に周知して「何月何日の何時から何時までいます」って言って、その時、仕事だからいないのはしょうがないでしょ。突然やってきて、いた人だけさっともらうっていうのはね、極端に言っちゃうと、仕事に行く意欲を削いじゃう可能性すらあるなって思います。断るっていうのも変なので、とりあえず目をつぶるようにはしてるんですけど、あんまり極端なのはお断りしたりもしました。

―何人くらいで自治会運営をしているんですか？

４月までは私の独断で全部やってました。あとは、もともとの自治会の運営役員の人が、この仮設住宅にも３、４人入ってるんで、何かあれば、その人たちに相談しています。米崎小学校の仮設住宅に関しては、米崎町の人間だけで構成されているので、コミュニティとか、ものすごくかたくて、運営も結構楽にやらせてもらっています。

もともとあった部落、今回の震災で解散してしまった部落、それから新しくできた仮設住宅の自治会があって、仮設住宅は米崎町内に８つ。その仮設の自治会の会長が月１くらいで定期的に集って情報交換会をしています。

―始まったいきさつは？

俺がコミセンに相談に行って。俺が不安だったのは、どれくらい甘えていいのってこと。皆、どれくらい甘えてるの？っていうのを知りたくて。甘え続けて、お世話になるっていうのも悪くないと思うんですけど、でも甘え続けることによってでてくる弊害っていうのもあると思うんで、俺の年齢で、それを一から十まで判断するっていうのは怖い。他の自治会のうち５つは、元自治会長経験者がなっているので、その人らがどういうふうに考え

ているのか聞きたくて情報交換会を開いてくれって言いました。

―その会ではどんな話をしたんですか？

最初の時は役所の悪口で２時間終わっちゃいました。俺の方も、こういうのを設置したいとか改善したいとか市の方に要望書を出していたんですけど、不平等という言葉を盾にとって、結局、何もしないんですよ。米崎小だけにやるわけにいかないと。コミュニティで連絡会を作った時の一番の目的は、うちからだけじゃなくて米崎町全体の要望として、８仮設の要望として上げれば、市も動いてくれるんじゃないかと思ってです。それで、情報交換会に、俺こういう書類を市に出したら、こういう返事きたんですよって見せようと思って持ってったら、やっぱり、それなりに皆、動いている人なんで、同じようなことを考えてて、既に要望書だして突っ返されて、市にこう言ったら、こう言われて、こう返されたとか、頼んだら、こう言われてだめだったとか、そういう話ばかり。もうそれで２時間、ついやされました。

―その要望って、例えば、どういう内容？

外水道をつけてくれっていうようなこと。共用の。実は、当初は仮設住宅を建設する業者が、自分らの工事のためにつけて、取り外すのを忘れていった水道があったんです。ところがある日、突然、はずされちゃったんです。事前連絡なしにはずされちゃって、なんなんだ？こんなに便利に使ってたのにって。そしたら、いや、もともとあっていいものじゃないし、米崎小学校しかないし、不平等になるからはずしますってことだった。だったら、皆使うんだから、皆につけろって。役所の理屈は、じゃあ、凍結した場合に誰がめんどうみるのって。

あと建物に関しても、水が出なかったり、水圧が高かったり、低かったり、それから多々トラブルがあったんですけど、トラブルの窓口が、そのトラブルの種類によって、市役所の建設課だったり、保健推進課だったり、岩手県の窓口だったり、行先が違うので、どこか窓口を一つにしてくれと頼んだ。その窓口から、県なり市の建設課なり保健進課なりに連絡するシステムを作ってくれって言ったんですけど、やっぱり県と市にはものすごい壁があるみたいで、いろんな理屈を並べて出来ませんって言われた。管理がどう、責任がどう、っていうのが必ず先にくる。

共用電気のブレーカーボックスがあるんですが、その鍵を自治会で持ってないんです。ブレーカーが落ちた時は、夜中でも市役所の職員を呼び出さなきゃなんないのに、時間外で連絡がつかないっていう返事がきたり。「電気屋さん、今、動いていませんから」って平気で言われて。「じゃ、俺の知り合いの電気屋を呼んでいいか」っていうと、「そうすると個人で頼んだことになるんで有料になりますけどよろしいですか」って。３ヶ月くらいケンカして、結局、こっちで責任持って管理するからって一筆書いてブレーカーボックスの鍵はもらいました。こういう前例を作っちゃったんで、今は要請すれば、すぐ鍵を預けられます。うちら仮設住宅に入るのも(2011年)５月と早かったんで、こういうトラブルが出たっていうのを報告してたら、後の方にできた仮設住宅では、それがちゃんときちっと対策されてたりしました。役所への対応はずっと

11月くらいまで続いて、年明けてから（2012年）ほとんどなくなりました。

―仮設の自治会長の情報交換会はいつから？

(2011年)10月、９月かな。仮設住宅によって、全然支援物資をもらってないところもあれば、積極的にいろんなとことつながって、こういうものがほしい、お花見やるんで、どっか炊き出しやってくださいって発信してきてもらってるところもある。それがものすごい差になっちゃってる。

―その差はどこから来るのでしょうか？自治会役員の機動力とか？性格とか？

あるでしょうね。自治会長が日中ずっと仕事してると、支援団体さんって、例えば、米崎小学校に何かの企画で来た時に、スタッフが時間をみて、他の近隣の仮設住宅を回って声かけて、こういうのやってるんですけど、どうですか？現物が米崎小にあるので見てくださいって来るんですけど、そこで自治会長に会えなかったら、そこの仮設住宅には何もない。自治会長が小学校まで見に行って、あ、これだったら欲しいねって動きをしなければ終わり。やっぱり、その差は、どんどんどんどん出てきてる。

―確かに、昼間、時間がどれだけとれるかとか、外と電話がどれだけできるかとか、そういうことになりますよね。

実際、自分も仕事に行っちゃっうととてもじゃないですけどできない。船を運転しながら電話とるなんてできませんし、共同作業やってる時にってわけにもいかないですし。

―では自治会長さんが代わったって自治会も？

何件かありますね。やっぱり自治会長を頼まれるくらいだと話が早い人ですから、もう、うち建てて出ちゃった人とか、あとはもう疲れきっちゃってダウンして辞めちゃった人とか。うちはそれを避けるために、自治会長と行政区長を別に立てて、俺は自治会長やって、区長は別の人やってもらってます。行政関係の方、市役所に行って会議に出たりするのは、その区長さんがやってくれますので、それだけでもだいぶ違う。町内の８つの仮設住宅自治会のうち７つは区長と会長が兼務ですから、そうなると支援団体さんの対応から、市役所の対応から、呼び出されるところまで全部自分一人でこなさなきゃなんないんで。情報集約という点で話は早いんでしょうけど、一人だけ、ものすごいことになってる。

―ほとんど仕事ですよね。

ほんとに去年の段階で誰か給料くれ！って言いたくなるくらい。去年に比べたら、だいぶ支援団体さんの方も数も減ったので。あとは、どうしても、平日の日中に例えば、ここでマッサージとか、健診とかってなった場合に、俺が対応できなくなっちゃうので別の人に鍵を開けてもらって、よろしくお願いしますって対応と最後の片付けの対応をしてもらう。そうしないと、受け入れることすらできなくなってくるので。

―自治会メンバーの中で、いつも相談にのってもらえる方は？

２人。困ったことがあれば、やっぱりもともとの自治会、部落会の運営経験者、この人たちがものすごい力になるんで、そういう人

が３人。そのうちの１人が区長さん。

―そういう点では、震災前からの地域での存在感や経験が、やっぱり大きい。

でも逆に、俺はそれをほとんど経験してこなかったために、今までのやり方にとらわれずに、「はい、これもお願いします」「これはこうします」っていうのが、かえって、できたっていうのもあるんです。ただ、だんだん従来の、本来の自治会としての形に近づきつつあるので、市役所の方からは保健推進委員をとか、部落の方から推進委員の理事を出してくれとか、いろんな役が回ってきて、町や市のなかの一つの部落として、通常の部落として扱われるようになってきたので、何から何まで甘えて、お金を出さずにサービスだけ受けるってわけに行かないんで、そのへんが、どんどんどんどん変化してきてるところです。

―では自治会費も集めて？

はい。仮設住宅の電灯、ここの場合は水道がポンプアップでやってるんで、ポンプの電気代とかが、月６～７万かかってるんで、それを共益費として、各家庭から集めています。

―いつ頃から？

集める月と、集めない月とかあったんで。入ってすぐ、５、６、７月は、ここの集会所ができてなかったんで、仮設住宅の狭いとこで、子どももいる家の中で、お金を預かる、管理するっていう自信がなかったので集めずにやってきて、８月にこの集会所の建物ができてから、役員を決めてもらって、会計、副会長、総務を決めて、それから集金を始めた。12 月は年越しということで集めなかった。だから集める月と集めない月が極端にある状態。集める月で一回2,000円（一世帯）。

―今、何世帯あるんですか？

60世帯です。

―そのうち一人暮しのお年寄りの割合は？

今、一人暮らしが17軒。65歳以上だと、ちょっと正確な年齢がわからないんで、見た目で言うと、14軒が一人暮らしの高齢者。早くできた仮設住宅っていうのは、50%要保護世帯を入れるって規約があるので、どうしても一人暮らしの高齢者が多くなって、あとは母子家庭とか、身障者とか、で50%を占める。ちょっとたいへんです。こないだの総会の席で飲みながら言ったんですけど、もともとの従来の部落でさえ、60軒あったら毎年１軒や２軒、黒い幕が立つんですけど、ここでは一年間、黒い幕が立たずに来たっていうのは奇跡だよね、って。まだ、誰もいないです。いつ逝ってもおかしくはないって人が何人か思い浮かぶ人がいるんですけど、ここの人は、まず元気でいてくれましたんで。

―皆さん、自炊されてますが買い物はどうしてるんですか？

最近、MAIYA（スーパーマーケット）が建ちましたし、歩いて行けなくもない距離に店があるっていうのが一つと、薬王堂（薬局）やラーメン屋さんもすぐそこにありますし、なんだかんだで。60世帯中54世帯は車を持っていますし。米崎町だけの人でできてるんで、親戚関係が、結構、皆つながってる人が多くて、そこのうちは一人暮らしで車がないっていうのがわかっていれば、買い物に行く時に

声かけてくれますし、そんな感じで、わりとうちらの方は運よく、何かをねらったわけじゃないんですが、結果的に、運よく、回っている状態です。

―なぜ佐藤さんが自治会長を引き受けることに？

体育館の避難所の運営役員やってたんで、その流れがあって。米崎小の体育館から、この60世帯のうち20世帯が出てるんですよ。じゃ、20世帯分の書類を俺が取りまとめて出すからって言ったら、米崎町の分全部まとめてくれって話になっちゃって、それで体育館に全部書類集めて、市役所に出すって話になっちゃって、その流れの延長です。市役所の、その時の担当職員が、青年団ＯＢで、俺らと一緒に青年団やってたヤツなんで、見た瞬間に、ニコッとされて。

―体育館の避難所運営では、やっぱり青年団やっていたとか、今まで地域で活動していたとか、消防団やっているとか、そういうなかでの人脈があったことが生かされているのでしょうか？話を取りまとめたり、意見の違う人にも話を通すとかといった場面で、今までの経験が役立ったとかっていうのは？

大きいですよ。特に、青年団ＯＢと、消防団ＯＢっていうのは、結構いるんで。何かトラブルが起きた時や、誰かが文句を言い出した時に、その文句言い出した人をＯＢが、「ちょっと、こっちさ、来いよ」って、ちょっと連れ出して説得してきてくれたりして、ひじょうに助かった。

―じゃあ、結構、自然な流れで、お願いします、はい、って。

正直、こんなに大変だと思わなかったので、受けちゃった。

―やめたいとかは？

思ったことありますよ。これじゃ、俺、海に戻れないって。去年の年末あたりは本当に思いました。

―去年（2011年）の年末あたりが一番しんどかった？

うーん、そうですね。10月くらいまでは、支援物資、炊き出しが主だったんですよ。そういうのは、だいたい、電話いただいて「何月何日こういうの持って行きますから」って言われて、「はい、わかりました、じゃ、こっち周知しときます」って、済んだんです。それが、どんどんどんどん中味が変わって来て、交流とか、何かしたいんだけど、何がほしい？何があるといい？っていう問い合わせが増えるようになってから、一つの支援もらうのに電話が５回から10回くらいなんですよ。

―やりとりが続くんですね。こういうのはどう、ああいうのはどうみたいな。そのへんでは、交流のきっかけにするイベントみたいな話になるわけだ。

はい。わりとうまくいってるのは手芸クラブ。お母さんたちが毎週火曜日に集って、ここ（集会所）で手芸クラブやってるんですけど、そういうのだと、材料とノウハウを提供してもらって、お母さんたちで来れる人が集って、強制力もないので、わりとスムーズに、やりたいことをやれる。そうじゃなくて、全

員にとか全体にっていうのはやっぱり難しくて、高齢一人暮らしと、若い世代の乳幼児かかえた世帯と、欲しいものが同じかっていったらまったく違うので、じゃ、それをどうバランスとるのってなると、かなりやりとりが複雑になっちゃうんですね。

（ここで電話が入り、話は中断。そのまま雑談してヒアリング自体は終了となった。）

※これは2012年４月30日に米崎仮設集会所にてうかがった話をまとめたものである。

（きき手：泉田将治・橋詰琢見・早川麻登・辻智子（記録・まとめ））

佐藤　一男（さとう・かずお）

岩手県陸前高田市在住　職業：漁業

1965年生まれ　岩手県陸前高田市出身

陸前高田市米崎小学校仮設住宅自治会長

NPO 法人桜ライン 311 副代表

一歩ずつ

岩手県陸前高田市・松田　恵美子

あの大震災からもうすぐ２年が経とうとしています。市内からは瓦礫撤去や被災した建物の解体が進み、少しずつですが思い出の見慣れた光景が無くなっています。仕方のないことだとは分かってはいるのですが、悲しくなります。

市街地には、仮設の店舗が出来ていて食料品や衣類品など、生活に必要なものが買えるようになってきています。これからも新たに建つようで工事が進められています。

１.陸前高田市青年団体協議会の活動について

陸前高田市青年団体協議会（以下、市青協）では、今年度も昨年度同様に『青年芸能祭』を開催しました。６月から実行委員会を立ち上げ、10月14日（日）に開催しました。今回は横田青年会、米崎青年会の他に、宮城県の黒川郡連合青年団の合唱と岩手県奥州市水沢地区の伝統芸能「上幅庭田植踊」、そして、陸前高田市気仙町の「仲町虎舞組」保存会の方々に出演して頂きました。仲町虎舞組の皆さんは、この震災で活動を自粛していましたが、この青年芸能祭をきっかけに復活しました。

今回も開催場所は、高田小学校の体育館をお借りしました。今後も芸能祭などのイベントが開催出来る施設が出来るまでは、小学校の体育館をお借りして開催することになると思います。規模は震災前より小さくなりますが、これからも続けて行きたいと思います。そして、仲町虎舞組のように、この青年芸能祭を通じて一つでも地域の芸能が復活する一助になって頂ければ幸いかと思います。

今年度は、芸能祭の他にも新たに市青協で行事を立ち上げました。それは、陸前高田市長との意見交換会です。ある会議で市青協前会長の橋詰琢見さんと戸羽太市長との会話の中で、市長から「若い人から市政への意見が聞きたい」と言う一言を受け、12月までに２度、市長と懇談・交流会を行い、正式に12月15日に第１回の意見交換会を開催しました。初めての企画なので全てが手探り状態でした。最初は司会者を立てず参加者が思い思いに自由に話せるようにしました。会場の設置も机を用意せず、円になって話す体制にしました。そうすることによって話しやすいかと思いました。３月にも第２回目の意見交換会を行う予定になっています。こうして継続していき今後の陸前高田市の復興に青年の意見を反映させていきたいです。

青年芸能際で熱演する松田さん（2012年10月）

２．横田青年会の活動について

横田青年会の活動については昨年同様に盆踊り大会とクリスマス行事を行う事ができました。盆踊り大会については、今年も多くの方が来てくださいました。当日は、開始直前まで雨が降っていて開催が中止になるところでしたが、なんとか開催することができました。クリスマス行事については、今年度も開

催し仮設住宅に住んでいる子供たちにもお渡ししました。今回のお菓子の発注は地元にあるお店にお願いしました。お菓子を取り扱っているお店の向いにパッケージを取り扱っているお店もありましたので、連携してお願いしました。来年もお願いする予定です。

今年度は、横田町内にある『川の駅よこた』主催の『あゆの里まつり』に参加しました。実行委員としてだけではなく、露店も出店しました。当日は生憎の雨でしたが、それでも沢山の方々が来場くださいました。今後も、町内のイベントに参加していきたいです。

３．今後について

今後の活動については、今まで通り青年芸能祭の継続と新事業の継続です。青年芸能祭については、各単位会の出演の他、地域にある色んな団体の方々に声をかけて出演して頂き、更に良いものにしていきたいです。

新事業の方は、これからも定期的に開催してより多くの参加者を募り、色々な意見を集めて復興の手助けになればと思います。これからも、市役所の方々と協力していきたいと思います。

松田　恵美子（まつだ・えみこ）
岩手県陸前高田市在住　職業：会社員
1986年生まれ　岩手県陸前高田市出身
陸前高田市青年団体協議会事務局長
陸前高田市横田青年会会長兼会計
NPO法人桜ライン311理事

希望が持てる地域に

宮城県気仙沼市・高橋　弘則

震災から２年が経ちました。１年前は、あの災害を受け入れられない感情と必ず復興したいと言う強い気持ちがありました。しかし、今はあまりにも果てしない現状にやりきれない疲れを感じています。一向に進まない復興計画、住宅も事業所も建設が進みません。瓦礫は減ったものの建物が無くなった景色はそのままです。職場が再開せず仕事が無いまま時間は過ぎ、将来も見えない人々がたくさんいます。２年という月日を過ごし、はじめから何もなかったかのようなこの景色に慣れ、いつのまにか震災を事実として受け入れています。あの壮絶な出来事の記憶が、自分の中で風化しているようにも感じます。それは、テレビで見る津波の様子や写真を見るたびに感じます。あの日、雪が降った事、街中が真っ赤に燃えた事、ドロドロの瓦礫の中を歩いた事、すごく昔の事のように思えるからです。しかし、未だ被災した方々は仮設住宅に暮らしています。家族が行方不明のまま悲しい日々を過ごしている人々もたくさんいます。そういった、人々にとってはあの日から時間が止まったままなのかも知れません。被災から立ち直れない人、気持ちを振り絞り歩み始めた人、その中で温度差は広がっているように感じます。故に、被災地とそれ以外では温度差どころか、もう過去の事と思われても当然です。あれほど、テレビや新聞で震災の様子が放送されていたのに、１年を過ぎると全国紙や全国放送では震災報道がまれになりました。政治も世論もまるであの出来事が無かったかのように関心は他に移っています。「被

災地」「被災者」と、もう呼ばないで欲しいと話す人もいます。その感情は理解できます。一方で、復興ないままにその言葉が聞こえなくなった時、あの震災は忘れられ、この地域は取り残されてしまうのではないかという危機感が押し寄せてきます。

被災地の厳しさは今も変わりません。もしかすると、関心が薄れている事で震災直後より厳しいかもしれません。震災で全てのものを失っています。家族、友人、思い出、家、財産、仕事、地位、名誉、夢、希望、しかし、今思うように進まない復興、いや復旧に生きる望みさえ失われつつあるように感じます。先日、両親を震災で失った高校生の兄が妹を残して自ら命を絶ちました。この２年で生き残った喜びと希望が、生きる苦しみと絶望に変わってきているとすれば、震災は続いていると言ってもおかしくありません。

先日、テレビで地元出身のマジシャンであるマギー審司の家族の歴史を探る番組が放送されました。その番組によると、この地域は明治時代から４回の津波に遭っており、彼の父の実家はその度に被災してきたそうです。貧しい漁村で集落がみな被災し、多くの犠牲者を出しながらも地域の人々が支えあって生き抜いてきました。それだけの被害に遭いながらも誰もその地域を離れず、自然と共存しながら暮らしてきたというものでありました。この番組で教えられた事が二つあります。ひとつは彼の父も、この震災で自宅を被災したにもかかわらず、この地を離れずに、自宅を修復し一生懸命生きようとしていたこと。それは、ここには長年お世話になった人々がいて何よりもこの地域を愛しているということです。いくら被災してもここに住む事に何の疑問もない、その姿をとても誇らしく感じました。

もうひとつは、彼の曾祖父が被災した人々を励まそうと「神楽団」を呼び披露したという話です。飢饉と津波によって生きる事さえ困難な時に、神楽によって人々は生きる力を貰ったのではないかと想像します。この出来事は､私も言い伝えで聞いたことがあります。この震災でも、直後に復興祭を催し、私達が青年団で伝承してきた「虎舞」を世界中のボランティアを含めた地域の方々に披露しました｡「いつまでも落ち込んでいても仕方がない。前を向いて歩きだそう」と言う保存会長の発案の元に行なわれました。人々は全てを失った中でも､「地域の誇り」の復活に喜びました。そして希望を持って歩き始めるきっかけにもなったと確信しています。それは、この番組にあった､約100年前の神楽を呼んだ出来事につながっている気がするのです。時代が流れても、太鼓や鐘の音は人間の心を癒し、蘇らす力を持っているのではないでしょうか。災害の多い地域であったからこそ、自然と向き合い、それを受け入れ、人のつながりを深め癒されるところから芸能を広げ伝えてきたとすれば、地域の文化と言うよりも生きる為の知恵だったのでしょう。私は、青年団で郷土芸能を伝承してきましたが、それは仲間づくりや組織を維持するための目的と考えていました。しかし、この震災を経験して「地域の誇り」を守ってきたのだ、と実感しました。そして、地域の方々の塞ぎ込んだ心を癒し、前を向いて歩く希望につなげる事が出来たとすれば、青年団冥利に尽きます。

現在小学２年生の娘は震災当時幼稚園児でした。地震と共に、幼稚園の隣にある小学校

の校庭へ避難しましたが、海抜18mある校庭に津波が押し寄せ、さらに高台、さらに高台へと避難し命は免れました。避難所で先生と一夜を過ごし、翌日自宅へ帰る事が出来ました。ライフラインが断たれた状況で、暖房が無く、ローソクを灯し、１日１個のおにぎりで暮らす毎日は幼い子供にとって辛い毎日だったと思います。また､津波が押し寄せる中、必死で逃げた記憶は決して消えることはないでしょう。一生懸命練習してきた卒園式は無くなり、卒園証書も流されました。小学校の入学式も被災した小学校で行われました。友達は、買ったばかりのランドセルも学習机も全て流されています。もちろん、思い出の写真もビデオも何もありません。幼稚園へ通った形跡が何も残っていないのです。娘は、この出来事があまりにも衝撃的過ぎたのか、友達の辛さを知っているからなのか、震災の時の話をしません。その映像がテレビで流れてもただ黙って見ています。「幼いから忘れたのかな」と思ったりもしますが、あの日以降、家では必ず誰かにくっついています。朝、学校へ行く時も、私に黙ってギュッと抱きつきます。だから、出かけるときは必ず抱きしめるようにしています。幼い中にも、どこかであの日の事を引きずっているのかもしれません。そう考えると、あの出来事を心の傷として抱えている子供はたくさんいるのではないかと思えます。

私は、震災後青年団で伝承してきた「平磯虎舞」を本格的に子供達に教えています。我が家の２人の子供も、習い出し、今は生き生きと練習に参加しています。子供達には、被災した子供も多く、仮設住宅に住む子供も多くいます。しかし、その子供達ほど練習への取り組みは熱心で上達は早いです。もしかすると、太鼓を叩く事やたくさんの方々へ披露する事が、子供たちの心の傷を癒し、生きがいになっているのかも知れません。「震災以来塞ぎ込んでいた息子が太鼓を始めて生き生きと元気を取り戻したんです。」と、ある母親に話されました。被災地に心のケアが必要な子供達がたくさんいると聞きますが、もしこの活動が「癒し」になるとすれば、もっとたくさんの子供達を仲間に入れたいと思います。

昨年から、保存会では伝承活動を平磯地区の子供から、同じ小学校の子供全てに対象を広げました。私達元青年団も、小学校の授業で「虎舞」を教えています。その中から、地域を学び、地域に愛着を持った子供達が育ってくれればと願っています。そして、つながりの大切さを知ってもらいたい。

第61回全国民俗芸能大会に出演した「平磯虎舞」
(2012年11月)

この震災で、住めなくなった地域はたくさんあります。しかし、人々のつながりが強い地域は、復旧も復興も早いと報告されています。食料を持ち寄り、協力して水を調達し生き延びたのです。真っ先に取り組んだのが集会所作りの地域もありました。人のつながりが心の支えとなり生きる支えになったとすれば、地域を守る事、地域を愛する事それが最大の防災となり、復興の力となるに違いありません。そのためにも、復興の力となる子供達に伝える活動はとても意味がある事だと確信しています。そして、地域の再生は必ず必要です。

気仙沼市の復興スローガンは「海と生きる」です。地震より、津波という海がもたらしたものによって、全てを無くしたのですが、海なくしては生きて行けません。海の恩恵を受け、長年暮らしてきたこの地の人々はそれでも海と生きたいと願うのです。文明が進化しても、科学が進歩しても、自然と向き合わなければ人は生きて行けないと思います。三陸沿岸に壮大な防潮堤の計画が実行されようとしていますが、自然と向き合っている人ほど、それはナンセンスだと言います。いかに、共存するかそう考えて先人は生きてきたはずであり、その事を忘れず伝えていくことこそ、命を守るもっとも有効な方法ではないでしょうか。

被災地は、ようやく復旧が始まったばかりです。長いトンネルを走っているようにも感じますが、少しずつ前進していると信じたい。そして、間違いなく生き抜こうとがんばっている人はたくさんいます。生きる事は辛い。それはどこでも同じだと思います。しかし、生きれば希望がある。子供たちの為にも、今は苦しんでいる人々の為にも、そして自分の為にも夢と希望が持てる地域に復興していきたいのです。それは、子を持つ親として、地域を担うものとして、そして青年団を経験した者として貫いて行きたいと思います。たくましく生きるこの地の人々を是非見守って頂き、この震災があった事をいつまでも伝えて欲しいと願います。

そして、いつの日か必ず恩返しできるよう前を向いて歩んで行きたい。

高橋　弘則（たかはし・ひろのり）

宮城県気仙沼市在住　職業：会社員（信金職員）

1965 年生まれ 宮城県本吉郡本吉町(現気仙沼市)出身

元日本青年団協議会副会長

(日青協経歴：99 年度･常任理事、

00～01 年度･副会長)

第 61 回全国民俗芸能大会でステージに立つ高橋さん(左)

(2012年11月)

けせん避難所・仮設挿話集

宮城県気仙沼市・芳賀　広美

震災以降、今まで全くかかわったことのない様々な人たちと出会い、同じ被災者仲間としていろいろなお話を聞いてきました。今回は､その一部をご紹介してみようと思います。

一番数が多いのは、2012年２月から通った職業訓練（パソコン技術）で出会った方たちです。

なぜそのような訓練に行ったかと言いますと、私は今まで仕事で長年パソコンを使用して来ましたが、「Illustrator」「PhotoShop」「QuarkXpress」という、いわゆる「印刷業における三種の神器」がメインであり、一般的な「Word」「一太郎」「Excel」といったアプリは、入稿されたデータの確認や、抽出に使うだけでほとんど使えないため、求人票を検索しても「Word、Excel の操作ができる方」という特記事項により、その段階で却下となっていたのです。同じ職業に就くにしても、他業種に移るにしても新たな能力が必要だと思い知らされたからでした。それまでも数ヶ月に一度の割合で同じような講習の募集はあったのですが、地元のハローワークは常に人が大勢いて、チラシに気づいた時には既に定員いっぱいということで、この２月からの講習にはギリギリ間に合ったという経緯があります。

その教室では私と同じように、震災によって離職を余儀なくされ、再就職により幅広く対応できる資格を求めていた方たちばかりでした。大なり小なり被災者という共通項があったため、通常よりも早く打ち解けることができたのではないかと思います。

毎日の昼食時間に「前の職場では」「旦那が」「子どもが」という一般的な雑談もありましたが､「震災の時、どこにいて、こんな風に逃げたの」「避難所でこんなことがあったんだよ」「仮設で…」と、話すことが自然と多くなっていました。「語りたい」「気持ちを共有したい」「話して気持ちを前に進めたい」と色々な気持ちはあったと思いますし、その共通の被災体験で仲間意識が強くなっていきました。

当時、私は『生きる～東日本大震災と地域青年の記録』第１号を執筆していて、最終見直しの真っ最中だったのですが、今ここで聞いたことはめったなことではマスコミ等で伝えられることはないのではないか､自分は『生きる』で当時の様子を広く伝えたいと思ったが、このように色々な目線での被災状況、被災者の今を広く伝えるべきなのではないか、と思ったのです。ただ､『生きる』は「自分の経験を語る」という面が強いものであるという印象が強かったため、秋に『生きる』第２号の編集会議の際に「友人知人からこんな話を聞いたのですが、エピソード集のような感じでもいいでしょうか？」と相談した際に、「企画として、ありだと思うから大丈夫だ」という意見をいただいたので、今回まとめてみました。

本当はもっともっと多くの話を聞きましたが､メモや録音をしていたわけではないので、私の記憶に残っているものの一部をまとめました。記憶でしかないため、一部関係性など違っている箇所もあるかも知れません。聞いたときのニュアンスを伝えたいと思ったので、すべて口語体で書きました。家庭を持っている女性が大半なので､生活感が溢れています。方言等はできるだけ標準語にしましたが、う

っかり残っていた場合はご笑覧ください。
　いろいろな場面で聞いた話なのでテーマごとに分けてみました。

被災直後について

Aさん：津波が来た次の日だったんだけど、避難した体育館から津波で瓦礫の山になった地域を見て、近くにいたおんちゃんが「今こそ観光客を呼ぶべきだろう」って言い出したんだよ。最初は「え？　何言ってんの？」って思ったら、「この瓦礫の山は一度見ておくべきだろう。テレビを通してじゃ絶対にこの凄さは分かんないだろう。こんな大きい災害なんて、この先いつ起こるかわからない。でもどこで起こっても不思議はないんだから」ってことだったんだよね。おんちゃんもちょっと混乱して適切な単語が浮かばなかったんだろうと思うよ。その後こんなに全国からボランティアが来るなんてその時は思いもしなかったけどね。

Bさん：流された家の周りに散乱していた私物をいくつかでも回収したいと思って、家族と行っていたんだけど、バッグとかがことごとく開かれて落ちていたよ。誰かが中を漁ったんだってのが丸分かりで…。火事場泥棒ってやつだよね。これって。

Cさん：うちの避難所で、海外からお嫁に来た人がいたんだけどね、震災直後に母国から帰国命令？　っていうかその頃結構各国から「日本は地震や津波で危険だから渡航費とかは気にしないで、早く帰ってきなさい」っていう連絡が来てたんだって。だから、中国とかから来ていた出稼ぎの人とかはパスポートも流されちゃってた人もいたけど、みんな急いで帰国したんだよ。ところがそのお嫁さん「何で家族がここにいるのに、私だけ帰らなきゃならないの？　私は家族と一緒にいるよ」と帰国しなかったんだよ。すごいよね。後日お舅さんが「うちの嫁は、最高の嫁だ」って自慢してたよ。

Dさん：うちの避難所は、規模が大きかったから自衛隊の人たちが調理をやってくれていたんだよ。でも配膳くらいは自分たちでやろうっていうことで、女性陣が当番制でやっていたんだけど、盛り付ける調理器具とかは自衛隊の物をお借りするんだよね。
　大き目のスプーンで盛り付けた方が楽なものだったから、おばちゃんが「自衛隊さん、しゃじ貸してけらいや」と声を掛けたんだよ。でもね、「しゃじ」が方言だったからわかんなかったらしくて、そこで標準語の「匙」でスプーンってことを教えたら、数週間毎に交代する自衛隊の引継ぎ時申し送り事項になったらしくて、段々言葉が通じるようになっていったんだよ。
　それで、しばらくしてのおかずが「きらず煎り（編集注：きらず＝おから）」だったんだけど、おばちゃんたち、私も知らなかったんだけど「きしゃず」って呼ぶんだよね。「自衛隊さん、そごのきしゃずとってけらいん」って頼んだら、ちょっと考えてから、「これですねっ！」って木でできたスプーンを持って来てくれたよ。言葉の壁って難しいね。

一気仙沼に来ていた自衛隊の皆さんは、大分県からの派遣でしたので、言葉の壁は大きかったのでしょうね。改めて御礼申し上げます。

Eさん：避難中って結構むちゃくちゃな格好してたよね。あるもの着込んだって感じで。

Ｆさん：うんうん、もらい物ばっかりね。カラーリングとかコーディネイトなんかも無視して、紫のシャツにオレンジのセーターとか羽織ってうろついてたよ。人前（ひとまえ＝他人の目のある場所）に行かないしーって。

Ｅさん：避難所にいる時点で、思いっきり人前なんだけどね。みんな同じような状況だから気にしなかったよ。で、人前に出るときに着るのは、避難した当日の格好。一張羅かって。

Ｇさん：一回仙台のほうにいる親戚に子ども達だけ一時的に避難させてもらいに連れてった時、隣町のコンビニでちょっとトイレ借りようかって旦那が車を止めた時、うっかり被災ルックで行った自分の格好が恥ずかしくて、降りられなかったよ。

Ｆさん：そうだよね。大き目のコートがあったら、それを着込んでごまかしたりしてたよね。

Ｅさん：結構最初のほうで、内陸部に（物資で来ないから）下着とか買いに行った時、自動販売機が稼動していて、思わず感動したよー。市内では泥まみれになって転がってたのばかり見たから。水をかぶってなくても、停電だったから動かなかったし。

お風呂事情について

Ａさん：避難所にはお風呂が無かったから、自衛隊で作ってくれたお風呂に通ってた時、「湯船に入る前に体を洗う」というルールなんだけど、やっぱりそうやって入っても、数日ぶりに入ったからまだ垢が残ってる感じがして、もう一回出てから石鹸で洗ってたら「入る前に洗ってくださいね？」って注意されちゃった…。最初にも洗ったんだけどね…。

Ｂさん：自衛隊のお風呂って言えば、偶然お風呂上りの親戚のおばちゃんに会ったよ。ただね、最初わかんなかった。昔から常にお化粧していたから、数年会わなかった＋すっぴんってことで、「あれ？」ってなっちゃった。

Ａさん：そうだよね。避難中はお化粧してる人が少なかった、っていうかできなかったからみんなすっぴんで、段々水道とかが復旧してきて…、仕事が再開したから…って久しぶりに会ったら、なんか雰囲気違うなって思ったら、メイクしていた！　眉毛がある！って人が多かったよ（笑）。

Ｃさん：私も避難所にお風呂なかったけど、家が無事だった親戚のうちで、水道がまだ復旧してなかったけど、井戸水とか使ってたまーにだけどお風呂沸かして呼んでくれたんだよね。で、お風呂入ってウキウキって帰ってくると、髪がふわふわになってるから、すぐに「おっ、お風呂入って来たのか？」ってばれるの（笑）。

Ａさん：うちの地域は自衛隊のお風呂が設置されるのがちょっと遅かったけど、その代わり隣町の温泉施設から招待があったよ。マイクロバスで迎えに来るから20人までって人数制限付きだけどね。それで、喜んだのも束の間「対象者：高齢者、障害者、子ども（付添可）」って書いてあったのを発見してねぇ。どれにも該当しなかったから留守番係になっちゃった。

Ｂさん：あ、ごめん。うちは温泉施設のホテルに二次避難してたから、お風呂は結構自由に入れたよ。

―直後、「いいなー」の声が上がりました。……当然ですね。

支援物資について

Aさん：支援物資でもらった物にあまり文句は言いたくないんだけど、市町村を通さない形で来たのがあったんだよ。弟の友達の友達って人が、友人知人に声を掛けて集めて、それを被災地の友人（弟の友人）宛に送ってくれたやつを、「若い女性用のとかも入ってるってから、お姉さんに持って行って」と大きなダンボール一つもらってきたんだけど。あ、物資で来る衣服って子供用、中高齢者用、男性用が多くて20代～30代の女性用のってほとんどなかったから、すごく嬉しかったんだよね。でも、開けてみてびっくりしたよ。だって下着類とか靴下がメインだったんだけど、全部「使用済み」だったんだよ。一般的な衣服なら古着でも喜んでもらったよ。当時本当に何もなくなってたから。でも流石にこれは無理だった。もしかしたら、間違えて捨てるためにまとめていたのを送っちゃったのかも知れないけどね。あれはショックだった…。

Bさん：あぁー、それはちょっとアレだよね。そういえば、そこまで愚痴ることじゃないけど、市を通してもらった歯磨き粉が「サンスター」のアクアフレッシュだったよ。青と白のストライプの奴。いやー、あれはなんか懐かしくて笑えたよ。歯磨き粉って使用期限ってないんだね。

Aさん：あ、下着系で言えば、ちゃんと新品の何枚かのセットをもらったんだけど、一回着用したら、ゴムがびろ～んって伸びちゃって使えなくなったのがあったっけ。新品だけど、長期間仕舞いこまれていたかしてたのかな？

Cさん：文句じゃないけど、ちょっと残念な話。うちを含め在宅避難者も結構いる地域だから、いろいろ食料とかを各家庭の人数分に分けて配ってたんだよ。で、「みんな平等に」という信念でやってたらしくて、避難所で暮らしている人たちにも同じだけ分けてたそうなんだよ。つきたてのお餅（切り餅）が避難所に届いたときにも同じように配ったら、避難所にいる人は食事が出るから、食べるタイミングがなくて、せっかく送ってもらったのにカビを生やしちゃったって落ち込んでたおばあちゃんがいたよ。こういうこともあるから、日持ちしない形での物は難しいよね。せめて真空パックの市販品か、お米そのものを送ってもらった方が、まだよかったと思うよ。

Aさん：うちの避難所でも同じように在宅避難者に食料配ってたよ。ただね、菓子パンが多かったんだけど、一応古いほうから廻したくなるでしょ？先入れ先出しで。なんだけどちょっと几帳面な人がいて「賞味期限が切れたものは食べたくないからいらない」って言われたことがあったなぁ。他にも「実家に寄ってくるついでに、その近くの人が今日パンとか取りに来てないから、届けてくるね」と善意で持っていったのに「賞味期限切れたのを持ってくるなんて信じられない！」と文句を言われたって話も聞いちゃった。

Bさん：「お菓子類は子どもに」って配布していたんだけど、ある時それを食べた子どもが「おかーさーん。なんか中から苦いの出てきたー」って言ってたんだよ。どうしたんだろう？って思って、そのお母さんの持ってた箱を覗き込んだら「ウィスキーボンボン」だったことがあったよ。お母さんも気をつけて欲しいね。

Aさん：そういえば、やけに箱が豪華なチョコレートが来ていたけど、あれってホワイト

デー用の商品だったっぽいよね。あの当時、正直ホワイトデーの存在自体忘れていたよ。

仮設住宅について

Ａさん：友達から聞いた話なんだけど、仮設住宅ができて入居が始まった頃に、友達の子どもの同級生のお宅でかなり早めに抽選で当たって、避難所になってる中学校から目の前の校庭にできた仮設に引っ越したんだって。で、ある日そこのお宅の子どもが小学校から帰ってすぐに友達と遊ぼうと避難所の方に来たんだって。まあ、当たり前だよね。友達はまだほとんどそこにいるし、ついこの間までそこにいて、一緒に遊んでいたんだし。

ところが、近くにいたおばさんに「仮設に入った人はこっちに来ないで！」って言われて泣きながら仮設に帰ったらしいんだよ。それまでは「同じ被災者」「同じ避難所の仲間」って感じでみんな仲がよかったんだけど、仮設への入居ってことでちょっとだけバランスが崩れちゃったのかも知れないね。でもこの話を聞いたとき、子どもに当たるのは大人としてどうかと思ったよ。

Ｂさん：仮設に入居してから、私たちが仕事に行ってるうちに学校から帰ってくるから子どもにも鍵を持たせたんだよ。ところが、今まで家には絶対誰かが居て、子どもは鍵をかける習慣がなかったから、帰ってきてからすぐに遊びに行く時に、鍵穴に鍵を挿しっぱなしで出かけちゃってたよ…。もう「泥棒さんいらっしゃーい」状態で。何も無かったから良かったものの、全部流された後に揃えた、なけなしの財産を空き巣にやられたらどうするつもりなんだろう（苦笑）。

Ｃさん：うちも持たせてたら、かばんの中で行方不明にしちゃって、仕事中に電話が掛かってきたと思ったら「遊びに出かけたいけど、鍵が見つからないからそのまま出かけていい？」って…。今までおじいちゃんおばあちゃんと同居だったけど、仮設で世帯分離状態になっちゃった家も多いからそういう点で慣れてないんだろうけどね…。

Ｄさん：うち、ばあちゃんがそれやってる…。玄関の鍵は掛けたんだけど、風通しのためにって窓を少し開けてお茶のみに出かけようとしてた…。

―多分、今はだいぶ改善していると思います。

Ａさん：2011 年の梅雨から夏は雨が多くて、やっと仮設があたって入居してもどの家もすぐに除湿機を買いに走ってたよね。うちは部屋数が多い（３Ｋ）から除湿し切れなくて、毎日天井付近に水滴がたまっちゃうんだよ。それでどうしたらいいでしょう？って市役所の人に聞いたら、「建物の構造上仕方ないので、毎日ク〇ックルワイパーとかで拭いてください」っていわれて、毎日天井と壁を拭く生活だよ。密閉率が高いのも考え物かも知れないね。

茶の間で寛いでいたら、「こんにちはー」って聞こえたから、玄関に行ったら、誰もいなくて、茶の間に戻ったら、前の（棟の）お宅に来てたお客さんだったってことが何回もあるんだよね。仮設って棟と棟の間が車一台分くらいしかないから、よその玄関での声のほうが聞こえやすいから参ったよ。

Ｂさん：うちなんか、同じように「こんにちはー」って聞こえて、玄関（引き戸）に人影が見えたから開けたら、お隣さんのお客さん

だったことがあるよ。設計段階できちんと玄関を離して作っている仮設もあるけど、うちの仮設の玄関は隣の戸との間が10センチくらいしかないから、風除室ができるまで結構間違うことが多かったよ。同じように戸がくっついてても、水場の関係で開く方向が離れているお宅はそんなことは少ないみたいだけどね。

Aさん：うちは玄関がドアだから、人影が見えなくて本当に来てるのかが分かりにくいよ。

Dさん：風除室って言えば、それができる前は玄関の外に靴を置いていて、朝目覚めたら、夜中に雨が降ってて、靴がびしょぬれになってた！なんてことが何回もあったよ。庇が小さかったんだよね。

Bさん：それもあるのかな？うちの仮設では各家庭によって靴を玄関ドアの外に置く家と、中に置く家があるから、訊ねていくときに結構気をつけないとうっかり土足で入ったりしちゃう人がいるって話を聞いたよ。

　うちのだけかな？仮設の窓って壁にくっつき過ぎてない？しかも２ＤＫの場合、せめて（各戸の）中心に寄ってつけてくれればいいのに、両端に離れてるの。隣の家の窓とくっついている感じ？そこに物干し竿の金具がついているから、物干し竿の長さを調整しないと、隣の家の茶の間（居間）の真ん中付近まで竿が伸びちゃうんだよ。…ていうか、うちの隣が長くして使ってるから、うちの洗濯物が押しのけられて困ってるんだよね。たまに竿ごと落ちちゃうしさ。もう少し設計段階で気づいて欲しかったよ。

―結構困っている様子でした。ちょっとしたことでもストレスが溜まってきますね。

その他

Ｂさん：この間（2012年春）掛かってきたセールスの電話なんだけど、開口一番「マンション投資をしてみませんか？　副収入となる家賃収入で将来も安泰ですよ」って言われたから、今はそんなことよりもまず自分の家を建てたいんですよって言ってさらっと断ったつもりだったんだけど、まあセールスさんの口の回る回る。切るタイミング見つけられなかったよ。「マイホーム新築ですか？でしたらそちらの方も当社で…、というかマンション投資で新築資金を云々…」、…いや、だからね。うちは被災して家がなくなったから早急に建てたいのであって、マンションと新築資金なんて無理だって…。「あ、被災なさったんですか。申し訳ありません。お見舞い申し上げます。実は私の親戚の家も波は掛からなかったんですがどうたらこうたら…。で、被災なさったんなら、保険金とか、義捐金とかを資本に…」。

　もう相手する気もなくなったよ。その「保険金」ってのだって、家に掛けていた分なのか、それとも…。人によって瞬間的に思いつくのは、自分が身近にかかわった方でしょう？

　うちは幸い、家と車を流されただけだけど、これがもし家族を亡くしてたら平静でいられたかどうか。

―この話は、家族を亡くした人が回りにいない時に聞きました。

芳賀　広美(はが・ひろみ)
宮城県気仙沼市在住　職業：団体職員（臨時）
1972 年生まれ　宮城県本吉郡本吉町(現気仙沼市)出身
前宮城県青年団連絡協議会事務局次長

復興座談会で現状を語る芳賀さん（2012年12年）

Ｍ９．０　震度７の地から（その２）

宮城県栗原市・加藤　義弘

2011年３月11日から２年が経過しました。日本中や世界中の誰もが、東日本大震災による大規模災害を忘れずに、そして犠牲となった方々を鎮魂しています。そんななか、長野県栄村でも翌３月12日未明に震度６強の大地震が発生し全村民の97%が避難を余儀なくされた事実が、あまり認識されていないように感じます。もちろん、自分も映像でしか確認することができませんでしたが、あの大津波の被害と比較すれば、局所的で、広がりをみないのも無理はないかもしれません。

同じように、３月11日震度７の本震、４月７日震度６強の巨大余震を記録した、我が地元金成も犠牲者こそなかったものの、地域インフラに大被害を受けています。「内陸部にも目を向けてくれ」などと言うつもりはありませんが、日本全体が大きく傷ついていることを忘れないでほしいと願っています。

地域の状況

『生きる』第１号でも記したとおり、発災直後から約１週間続いた停電対応では、停電復旧の見通しに関して情報収集と市民へ情報提供をしました。約１ヶ月続いた市内全体での断水対応では、市職員の所属部署に関わらず総出での対応が余儀なくされ、職員も自分が担当する分野の被害状況の把握とその対策をやりながらの断水対応で、市職員も疲労困憊状態でした。

この時にもっとも気を遣ったのは、職員の健康管理です。復旧の最前線に立つ職員が離脱していくことで、負の連鎖につながってい

きますが、そんな状態にならないよう、職員ひとり一人の健康チェックと事前の声がけがとても重要だったと感じています。

自治体が担う、地域インフラの復旧も、被災箇所・事業量ともに莫大であり、建設業者がフル稼働しても早期復旧は難しく、２年を経過した今もなお、被災し、未だ手つかずの状態の箇所がたくさんあります。

栗原市では、東日本大震災の前に、2008年６月14日に発生した岩手・宮城内陸地震でも大きな被害を受けており、その復旧工事が完了したのは、一昨年の８月、つまり、３年以上の歳月を要しての復旧完了でした。今回の災害復旧工事は、もちろん沿岸部の災害復旧工事も本格的に動き出している影響もあると思いますが、前回、岩手・宮城内陸地震を上回る相当の期間が必要ではないかと予想されます。

震災からの復旧が少し進むと、復旧と併せて復興の取り組みも同時にすすめられます。ここで考えなければならないのは、復興を焦らないことではないでしょうか。復旧を一定程度進めることがまず第一で、被災者自身が動き出そうとする心や、物流の見通しが不完全な状態で復興を唱えることが本当にいいのだろうかという疑問があります。具体的な検討は専門家に委ねますが、今後のあり方として、復旧と復興の相関性とそのタイミングについて、人々の気持ちと暮らし、地域再生などを観点とした検証がぜひ必要だと感じています。

宮城県青年会館の状況

宮城の青年の殿堂、宮城県青年会館の被害についても『生きる』第１号で記していたとおりであり、苦しい経営状況の中でも、総額約2,300万円の費用で建物･設備等の災害復旧工事を2012年３月までかけて完了することができました。

宿泊の利用申し込みは、地震発生直後から災害復旧工事等に携わる業者、ボランティアを中心として受け入れてきましたが、８月頃からは、青少年団体の申し込みを優先して受け入れるように努力をしてきました。これは、災害復旧も大事ではありますが、将来を担う青少年が集う宿泊研修の機会を早期に提供していくことが、ほとんどの公共の青少年施設・社会教育施設が稼働していない状況をみるにつけ、将来を見据えたときに必要であると考えたからです。

レストランでは、食材も満足に確保できない状況でも、おそらく県内でも最も早く、食事を提供する事に努力を重ねてきました。寒い時期の被災で、そんなときに暖かい食事を摂ることができると喜んでいただけました。ごく数日前までは日常的なことが、失って初めてそのありたがみを感じ、大きな感謝につながるものだと実感しました。

当たり前のことが、当たり前にいつもあるということは、感謝する心を奪われていくことかもしれない。折にふれ、そんなことを気づかせてくれる、社会教育活動が継続的にできないものだろうか、と考えます。

また､約2,300万円の費用を投じて復旧工事をした建物に、昨年あたりから目に見えない被災が明るみに出てきました。具体的には外壁の仕上げモルタルの浮きによる雨水の浸入によって、建物内部に水が漏れてくる症状が出てきたのです。外壁が剥がれ落ちれば当然復旧してきましたが、そんな被災状況を把握

することができなくて、今の状況となっています。これだって地震による被害です。また、地中に埋設している下水管や雨水排水管のズレなどによりその機能の一部が損なわれていることも判明しています。これらの復旧工事に、今後さらに約800万円程度の費用を要する見込みとなっています。何とかしなければなりません。

大規模地震による建物被害は、時間のない中で調査し、工事に取りかかりますが、こんな事例もあることを忘れないでいてほしいと願っています。

青年の変化

宮城県青年会館では、みやぎ青年交流推進センター事業にも取り組んでおり、その中でいわゆる結婚相談事業も展開しています。

震災前は、男性・女性ともに精神的にも経済的にも自立することができ、生活するうえでも便利な社会になり、非婚化が進行していたのではないかと考えていました。しかし、震災後は、結婚相談に訪れる青年が増えているのです。これは震災で家族や親戚、友人、同僚など身近な人が犠牲になっていく状況を目の当たりにし、一人で生き抜いていくことのつらさを実感した結果だと分析しています。改めて人と人とがつながりを持ち、絆を深めていくことの欲求が現れてきたのではないかと考えられます。

人々が社会生活を営み、他者と関わりながらより豊かな生活を送っていく、そんな中でお互いに尊重しあうことを基礎として、生涯をともにするパートナーを求めることは、ごく自然な行動です。これからも若者たちがより豊かな生活ができるように、他者との豊かな関わりを創造していくためにも、青年団の存在と役割は大きいと考えます。

一方、青年団の動きとしてはどうかというと、これまでのつながりを発揮しての安否確認や被災者支援などの動きは、積極的で、むしろ行政主体のそれより、かなり機能していたのではないかと見ています。残念なのは、かつてのつながりから、新たなつながりにその広がりを見せていないことです。青年団のつながりを発揮して、様々な行動を展開した地域では、大きな感謝をされています。そんなことを身近で見て、ふれている若者たちへアプローチをして広げていくチャンスだと捉え、意識していくことができればよかったのではと思います。もちろん、あの緊急時にそんな余裕を持って取り組みを進めることができたのかと問われれば、返す言葉もありませんが。

ただ、今回の被災経験だけではなく、青年団の再生や仲間を広げていくチャンスは、行動をとおして、生かしていくことによって広がっていく事を、今後も肝に銘じて、がんばってほしいと願っています。

むすびに

発災から、これまで、ご支援をいただいた皆さまに深く感謝を申し上げます。

いまだに、全国の仲間たちから、「気にはなっていたものの、具体的に何も行動ができなかった」という連絡が届きます。

ご心配をいただくだけで、感謝です。決して悔いることなどなく、仲間を想う、友を想う、純粋で素敵な心を絶やさず、いつまでも持ち続けていただくことを切に願ってやみません。

今回の悲惨な経験を無駄にしないことが、今を生きている我々に課せられたテーマだと考え、今後も発生が予想されている南海トラフ大地震などへの備えを整えるとともに、ともに人智を結集して、日本再生に傾注していきましょう。

加藤　義弘（かとう・よしひろ）

宮城県栗原市在住　職業：自治体職員

1960 年生まれ　宮城県栗原郡金成町(現栗原市)出身

元日本青年団協議会会長

(日青協経歴：92～93 年度･常任理事、

94～95 年度･副会長、96～98･会長)

(財)宮城県青年会館　常務理事

青少年体験活動指導者全国フォーラム宮城県プログラムで挨拶をする加藤さん(2011 年 12 年)

震災後に直面した雇用問題と被災地の現状

宮城県登米市・岩崎　大輔

１．震災直後に実感した命の尊さ

私は震災の被害が大きかった宮城県石巻市内の企業に勤務しています。震災当日は社内の建物に逃げ込みましたが、２階に居た私の膝丈まで浸水しました。６m程の津波だったと思います。職場内でバラバラになった同僚たちが心配で一晩を過ごしましたが、翌朝に仲間の顔が見えた時が一番嬉しく、命の尊さを実感した瞬間でした。(『生きる』第１号参照)

震災による弊社の被害は甚大で、本社事務所をはじめ生産設備がほぼ全滅。社員に死亡・行方不明者はいませんでしたが、協力会社従業員で９名の方々が死亡・行方不明になりました。また、従業員の大半が自宅の全壊（流出含）等、大きな被害を受けました。中には４人の家族を一度に失った方もいました。

震災３ヵ月後の岩崎さんの職場前（2011年６月）

２.進まない再建計画に苦労した一年

震災直後は、みんなが自分の生活基盤を整えることが優先でした。しかし私は職場労組の役員でもあったので、自宅に居ながら常に

最悪の状況（倒産等）を考えていました。３月末に会社から「再建の方向で行く」という方針が示されたので、まずは組合員と家族の安否確認と合わせて会社再建の方針も伝える事から職場復興を目指しました。バラバラになった従業員の当面の居住地（避難先）の確認は困難でしたが、４月初旬に集約も完了しました。本来ならば、全体集会で報告するところですが、当時は場所も無く（公共施設は全て避難所)､何とか一人ひとり当たっていくという感じでした。

会社が再建は決まったものの、その方向性くらいは確認したいと思い、幾度も会社側に労使協議の開催を申し入れましたが、復興計画が具体的に決まっていない事を理由に何度も延期と先延ばしされました。ようやく12月に労使協議会を開催しましたが、我々が一番心配していた合理化については、その時点で計画は無いと報告を受けました。

３．寝耳に水の合理化案。初めて経験する合理化闘争へ

2012年２月９日早朝、突如「会社側へ公的機関の支援が決定。それに伴う合理化も計画されている」と報道されました。まさに寝耳に水の出来事でした。翌日には組合側に対して、労働条件の切り下げと希望退職募集の提案がされました。具体的には従業員４分の１の54名の削減、基本給の引き下げを含む労働条件の引下げ等です。

当然、みんなで働く場を残す為にも、計画の見直しを求めて連日連夜、期限ギリギリまで交渉しました。しかし、期限が短かった事もあり、ひとり一人に対して説明も不十分だったので、きちんと状況を飲み込んでいない組合員もいましたが、残念ながら一部条件の見直しだけで合理化案に労使合意する事になりました。

希望退職募集期間は「誰が残るか？残れるか？」という状況の為、一気に職場の雰囲気は悪くなりました。あれだけ職場の再建を夢見てきた仲間達の結束を壊し、お互いが仲間を責め合い､震災で疲れた気持ちも影響して、ますます不安な気持ちになりました。

「家族を亡くして家も財産も失い、さらに勤め先まで失うのか」｢家族も養わなければならないし、家も再建しなければならないし」あちこちで悲鳴にも似た声を毎日聞いていました。多くの仲間が被災しているので生活の糧を奪われることへの不安、さらに新たな住まいや生活基盤を整える為にも退職を選択することは簡単に出来ません。

しかし、中には「早期退職して貰った退職金で今ある借金を返すか…」といった切実な声もありました。通常の企業の業績悪化に伴う合理化ではありません。地域全体同じ様な状況で、倒産や合理化で職を失った方々が街に溢れている中、今度は自分がそうなるのか？不安感にみんなが押しつぶされそうになっていました。

その状況の中、希望退職募集が始まったので簡単には希望退職募集人数に到達しません。それに対し会社側は、募集期間延長や２次募集まで行ない、個人面談では遠まわしに退職強要的な発言が発せられたりするなど、毎日会社側との闘いでした。

希望退職を選択したのは、年齢層的に50代以上の方々が大半でしたが、みんな口を揃えたように「我々が身を引くことで、若い人たちに働く場を残したい」と同じことを言って

会社を去っていく姿には、今でも「本当に申し訳ない」という思いでいっぱいです。この年齢の方々は家庭を支える一家の大黒柱であり、企業としても技能や経験豊かな方々たちです。この間、自宅の再建も終わらないのに濡れた畳に寝起きしながら職場に出勤して復旧工事に尽力した仲間や、避難所から通勤しながらも職場の再建を望んで働いてきた多くの仲間が去っていった事は一生忘れることが出来ません。

一番印象深いエピソードで、退職した一人の組合員が組合員証を持ってきた時のことです。

私も「うちに組合員証があったのか？」と思いましたが、後日調べると、かつて昭和の時代に入社した組合員には支給されていたようです。組合規定には「退職時には必ず返却すること」と書かれていて、ずっとこれを持っていてくれたのかと思うと、思わず涙が出てきました。力になれずに申し訳ないという気持ちと、今まで会社のために尽くしていただき大変ありがとうございますという気持ちでいっぱいになりました。

結果的に会社側は人員削減目標を強行的に達成。残った従業員も、労働条件を引き下げだけで無く、長年築き上げた技能と信頼関係を失った中で再出発する事になりました。

４．去るも地獄・残るも地獄の雇用状況

震災直後は、市内の大手企業が相次いで休業になり、従業員は雇用調整金を受給して職場の再開まで生活を維持する厳しい状況でした。しかし、中小企業になると、職場の再建どころか復旧の見通しも立たないので、大半の企業が一旦従業員を解雇して、その間支給される失業保険で生活をつなぐという現実でした。企業の多くが「設備が復旧して再稼働できる状況になったら再雇用したい」というものの、再稼働までに時間を費やした為、経費削減の為の人員削減等で再就職出来ない人も数多くいました。

また、津波で住まいを失った為、住み慣れた土地を離れて遠くへ住まいをかまえたり、避難先の仮設住宅が元の住まいから遠くに離れてしまった方々は､「今の住まいの近くで職を探す方が良い」という考えから、やむなく離職してしまう現実もありました。

このように、沿岸部からの人口流出が深刻な問題になり、2012年３月の地元新聞によると､宮城県内では石巻市は５千人以上が転出、沿岸部の他の町でも軒並み千人を超す人口の流出となり、転出超過率で見ると平均８～９％の人口流出となっていました。

逆に仙台市は６千人近い人口の増加で、その他の内陸部の市町村も軒並み３桁の人口増を記録、また関東をはじめとする県外への流出も多く、その為に将来を見据えての産業再生に必要な若手労働力の不足や、急激な少子高齢化が懸念され始めていました。

私の職場が合理化を実施した時期には、徐々に震災からの復旧も進み、土木関係等求人は出始めましたが、水産業や製造業などの地元基幹産業が復旧しない状況でもあり、先行きが見えない事には変わらず、将来を見据えて安定してこの地で生活していくことが出来るのか？という悩みが常に付きまとっていました。

その様な状況の中、４分の１の仲間が退職という新たな道を選択しましたが、果たして新たに生活の糧を得る所にたどり着くことが

出来るのか？他人事とは言うものの協定書に調印した者として常に気がかりでした。

この間、定期的に退職者に連絡を取り、何人かに様子を伺って来ましたが、再就職活動は想像以上に厳しい現実でした。

求人を探しても管内（自宅から通える範囲内）での働き口は少なく、少々離れた地域か大都市周辺（宮城だと仙台近郊）に出ないといけない状況であったり、たとえ希望する職種があったとしても、採用人数が１名とか非常に難関であったり、仮に面接にたどり着いたとしても「石巻の方々は義援金とか保険金貰っているから、まだ生活的には大丈夫でしょう？」とか「仮設住宅だからインターネット環境はないですよね？（実際は環境面では問題はない。メールとかやり取りできないでしょう？というようにイメージで判断）」と、企業も表面的にしか判断してくれないという声を聞いています。

また、沿岸部から内陸部に移り住んでいる方々の中には、震災被災者対象求人制度（被災者を雇用した企業に補助金が入る制度）を活用して就職活動を行っている方もいますが、移り住んだ地域の中には「元々求人がない地域に企業を誘致して何とか雇用を生み出したのに、採用されるのは被災地域の方々だけだ。」いう声も実際あったりしています。被災者側からは「この制度が無いと逆に就職できない」という声もあり、両方の立場を見ている私には意見し難い現実的な問題であります。

この震災によって建設・建築を始めとする業種の求人が増加しており、それに伴い他の業種の求人も徐々に増加傾向であります。皮肉にも新卒者内定率が増加傾向になり、生まれ育った地域で働くことが出来る青年も僅かですが増加し、青年団関係にも、震災後に職に就くことが出来た仲間も多くいます。しかし、一家の生活を支える中高年齢層や女性向けの求人が少なく、求職内容にもアンバランスが発生しています。

求人を行う企業の方も大変です。震災からの復興に多額の資金を費やすため、人を雇うにも費用的に厳しいので非正規労働者や、給料を安くするなど条件面を引き下げるしかありません。条件面があまりにも低いと働きたいと思う人も少ないので、ギリギリの条件での求人になります。生活の為にやむを得ず働き口を選択する者も確かにいます。

国や地方自治体の対策も確かに早急に必要ですが、こういう場面に青年の声が反映させられないのか？と強く感じています。

企業に残って再建を選んだ方も大変です。全ての企業がこうではありませんが、被災した企業の大半が、労働条件の引き下げを含む合理化を実施しました。確かに復興まで一時的に会社側に預けている労働条件との認識に立ち、会社自体が以前の状況に復興してきた段階で回復するなら良いのですが、簡単に回復することは決してありません。長い時間をかけて回復の足掛かりを作る必要があります。

働く人への対策も必要です。組織＝人ということを忘れてはいけないと思います。

合理化で、慣れ親しんだ職業から転職したり、信頼できる仲間が退職したり亡くなったり、色々な状況があり働くことに対してモチベーションが下がっている点があるとしたら大きな問題だと思います。賃金カットも含め、少人数経営で過密労働になる可能性があります。しかし、以前と同じような時間外手当はもらえず、なおかつ、一時金が出るか出ない

かとなれば、ますます将来が不安になってくると思います。こういう状況になると、会社の利益はほとんど借入の返済に回ってしまいますが、返済か投資ではなくて労働者側に還元できるものがあれば可能な限り、少しでも投資してほしいと思います。

５．震災復興へ私たちの声を！

被災地域で色々な企業が倒産、あるいは撤退するような状況で、特に失業率を含めて雇用関係には様々な問題があると思います。そこで政策的に青年の声を伝えられるような状況を作れないものか？それが出来るのが青年団ではないかと思うことがあります。

私たちは大規模災害発生時に、第１段階の人命救助や第２段階のライフラインの整備をすることは出来ません。では何ができるのかと言ったら、今からの第３段階で政策的なこと、あるいは今の地域の状況を訴えることだと思います。

将来を見据えた地域づくりの話し合いの場の中に、私たちの雇用と生活環境の現状を積極的に伝えることが出来る環境づくりが今後、必要になってくると強く感じています。

復興座談会で現状を語る岩崎さん（2012年12年）

岩崎大輔（いわさき・だいすけ）

宮城県登米市在住　職業：会社員

1975年生まれ　宮城県登米郡豊里町(現登米市)出身

宮城県青年団連絡協議会事務局長

全日本造船機械労働組合ヤマニシ分会書記長

震災直後の東松島市の光景（岩崎さんの職場近く）

（2011年３月）

震災を経て～その後

宮城県山元町・齋藤　緑

東日本大震災から１年８ヶ月が過ぎた。怒濤のように過ごしてきた日々も、だいぶ落ち着きを取り戻し、以前と同じような生活をしているかのような錯覚にとらわれる時間が増えてきました。しかし、意識が現実に戻ると2011年３月11日に変わってしまった、景色が確かに目の前にあります。

私は１年８ヶ月経っても、まだ勇気がなくて、自分の目で見に行っていない景色がほとんどです。知人友人の所在も怖くて確認していない。町の中などで偶然会い、「わぁ無事だったんだね～よかった～」と喜び合えるのを待っている状態。りんごラジオに通い、そのスタッフとして、町のイベントなどに参加していると、そのような機会が必然的に増えます。なので、私にとっては今もりんごラジオがかけがえのないものであり、心の支えになっています。

りんごラジオで情報発信する齋藤さん(2012年７月)

ここ数ヶ月、亡くなった友人を町で見かけることが増えました。と言ってもお化けではありません。似たような背格好の人を見かけると友人に見えてしまうのです。私の中でその友人が亡くなってしまったことを受け入れていないのかな・・・。

私は年明け2013年１月から、生活が大きく変わりました。と言っても古巣に戻った形ですが・・・青年団の活動を続けるために１２年前に辞めた幼稚園に戻りました。その幼稚園は今回の震災で津波に流され、バスの中に避難させていた園児が８名亡くなりました。また職員も１名亡くなっています。この幼稚園から、もう一度手伝って欲しいと声をかけて頂き、戻ることを決意しました。12月までお世話になった会社が、自宅近くのＪＲの駅が流されたことで、通勤に２時間かかるようになってしまったことが転職の大きな要因です。また、被災地に住みながら、被災地での活動がりんごラジオのみになっている歯痒さも感じていたこともありました。しかし、いざ転職の日が近づいてくると、24時間365日被災地の中にいることへの、精神的な不安が込み上げて来ていることも事実です。

実際に幼稚園での仕事が始まると、震災の日から時間が止まっているように感じました。仕事を始めて１ヶ月が経ちましたが、毎日毎日同僚の先生方や通園している子どもたちから、地震・津波そしてその被害状況の話を聞かされます。また、通園バスに添乗して子どもたちの家に送り迎えに行くと、園児の家の隣にはまだ、津波に流されたままの家や建物が点在しています。今はとにかく現状を受け止め話を聞くことに徹していますが、聞いている私が１週間で体調を崩してしまいました。そんな自分にも情けなく愕然としましたが、震災の爪痕は実際に過酷な被害にあった人々にこんなにも心の中に深く傷が突き刺さっているんだな・・・と改めて感じています。私

自身の直接の被害は愛車が流されたという程度ですが、それでも未だに車の中にあった小物などを思い出しては、「そうだ・・・無かったんだ・・・。」と思い出すことがしばしばあります。なのに、それ以上にたくさんのものを無くした方々は、どれだけ心が締め付けられるような思いをしているのかと、何度「あの日に帰りたい・・・」と思うのかと・・・前を向いて歩くことは大事ですし、みんなそれぞれに頑張っています。でも、いつ何時ポキッと折れてしまいそうな細い心で頑張っている方々が多いのが現状です。

齋藤さんが勤務するふじ幼稚園①

また、私が住んでいる山元町は人口の流失が止まりません。ＪＲが現在、代行バスで運行中で通勤や通学が不便になったということと、なかなか復興が進まず土地の整備等に時間がかかっている等が要因かと思います。その復興案等でも、さまざまな意見が飛び交いなかなかまとまりそうにありません。震災前より良い町にするためにたくさんの意見が出ることはとても良いことだと思いますが、スピードも大事かなと感じています。

私は、この町で私自身ができることをしようと、決意して転職もしたので、何とか、今踏ん張っている方々のほんの些細な支えにしかならないかと思いますが、精一杯やっていこうと思います。

齋藤　緑（さいとう・みどり）

宮城県山元町在住　職業：幼稚園教諭

1967年宮城県旧古川市生まれ、旧築館町・旧志津川町育ち

元日本青年団協議会副会長

(日青協経歴：98～02年度･常任理事、

03～04年度･副会長)

学校法人やました学園ふじ幼稚園教諭

齋藤さんが勤務するふじ幼稚園②

あの日から、間もなく２年
福島県会津若松市・吉田　恵三

私の故郷である会津若松市や会津地方では、今春１月６日から大河ドラマ「八重の桜」の放映が開始されたため、観光客の入り込み数に大いに期待を寄せる人々で盛り上がりを見せています。

東日本大震災が発生し、実質的には放射能線量の心配がなかった会津地方では、次々と仮設住宅が建設され、現在でも原発被害を被った人々が生活をしています。かつての住まいがあった浜通りでの除染は往々にして進まず、避難できなかった豚や牛などが餌を求めて町内を滅茶苦茶にした挙句に、餓死や屠殺されているようです。一時帰宅が認められている地域はありますが、人々が帰宅し、元どおりの生活ができる日の見通しはまったく立っていません。

除染などをする際に出される廃棄物など廃棄先や貯蔵先、運搬先、あるいは埋立地などの選定も進まずに右往左往しています。政治の停滞など許されない大切な時期に、あろうことか衆議院が解散され、一番大きな争点になるはずの原発の是非は、少数政党の乱立というパフォーマンスの影に隠れてしまいました。そして政権が交代しましたが、参議院は与野党逆転の状態にありますので、依然として政治の混乱が続くと思われます。まったく、この日本という国の体質こそが、復興が進まない一番大きな要因だと思わざるを得ません。

避難された方々の中には、今後の生活に悲観したのか、自殺してしまった方もおいでに

なります。また、避難しているある町の町長は議会から不信任案を突きつけられ、議会を解散しました。

県外に避難し、職を得て、あるいは進学して懸命に生きている人々もたくさんおいでになります。

あれから２年が経過しようとしているのに、私たちは何をしてきて、何が出来なかったのでしょうか？まったく私たち人間は、過去の反省も踏まえずに、同じことを繰り返してしまう国民になってしまったのでしょうか？

会津地方は、２年が経過しようとしている今も風評被害に苦しんでいる現実があります。

江戸時代に日本の三大藩校のひとつに数えられた日新館での「什（じゅう）の教え」や白虎隊の悲劇の物語など、少年少女の情操教育に事欠かない会津には毎年、沢山の修学旅行生がやってきていました。しかしながら震災以降は、修学旅行生が激減し、その結果、会津若松市内の２大温泉郷である、東山、芦ノ牧温泉の宿泊施設は大打撃を受けました。最近は回復傾向が見受けられるものの、依然として低空飛行が続いています。

米や野菜などの農産物も、回復基調にありますが、震災直後は、全て線量検査され、安全性が確保されているにもかかわらず、売り上げが半減し、取引価格の低迷が続く現状にあります。

そんな時に、「八重の桜」の放映がＮＨＫから発表されました。会津地方のみならず、福島県の人々は、これこそが低迷する経済を打破するきっかけになると、喜びにあふれています。

ヒロインの八重を綾瀬はるかが演じています...。主人公の新島八重は、全国的には無名の存在ですが、八重は、明治時代になり、兄の覚馬が暮らす京都に行き、新島襄と出会い、結婚しました。新島襄は、同志社大学を創立したことで、その名を知られています。

八重は戊辰戦争での会津鶴ヶ城の篭城戦では断髪し、男装して鉄砲を片手に奮戦したと伝えら、「幕末のジャンヌダルク」と呼ばれ、襄は「八重は決して美人ではないが、生き方がハンサム」なので「ハンサムウーマン」と称え、襄の死後、八重は日清、日露戦争では篤志看護婦として従軍して「日本のナイチンゲール」と呼ばれたそうです。（私はもちろん八重のことは以前から知っていましたが、大河ドラマ放映が発表されてから、そのように呼ばれていたのか？と初めて知りました。決して大がドラマの宣伝のための作り話ではないと思います。（笑））

ＮＨＫは東日本大震災での被害に苦しむ東北・福島ゆかりの人物にスポットをあて、大河ドラマとして放映を決定したのでしょう。桜は日本の象徴でもあり、日本人が最も愛する花でもあります。

放映されてから、建設されたドラマ館は早くも大盛況で、観光客も大勢やってきていると報道されています。まさしく「八重」効果です。これで会津も一息つけそうです。

そのように考えていたら、少しおかしい気持ちになってきました。それは「八重の桜」以前にも、会津に関する大河ドラマやテレビドラマはあったからです。むかしむかしの大河ドラマ「獅子の時代」では、菅原文太が会津武士を演じ、その視聴率は前作の大河ドラマ「平清盛」を上回っていました（笑）。独眼

竜政宗や「天地人」の上杉景勝は一時期会津若松城主であり、直江兼続が家康宛に書いた有名な書状は、会津若松城で書かれたものです。かつて日本テレビで放映された年末時代劇「白虎隊」も高視聴率で、いずれの番組放映の年の会津は盛り上がっていた記憶があります。

しかしながら、こうした盛り上がりをきかっけとして、会津は、観光も産業も活性化し、持続できできたのでしょうか？もちろん答えは「ノー」です。

何故、こうした盛り上がりを持続できなかったのでしょうか？何故私たちは、大河ドラマ＝先人の偉業ばかりを頼りにしかできなくなってしまったのでしょうか？私たちには一体何が欠けているのでしょうか？私は、その答えを「青年団活動」の中に見つけました。

これまでの私たちは「ないものねだり」ばかりに夢中で、「あるもの探し」に力を注いできませんでした。例えば身近にある慣習（会津人には当たり前でも、外の人からみたら「へぇぇ！！」というもの）や受け継がれてきた伝統などに、これまでどれだけ目を向けてきたでしょうか？青年団活動のように、地域に住んでいる私たち地域住民が、地域を愛し、地域にあるものを大切にしてこなかったからこそ、大河ドラマのようなものに頼るしかない地域になってしまったのではないかと思います。

観光客やお客様は、お金と時間をかけて旅をしています。見知らぬ土地で本当に見たいものとは、地域住民がこだわっているものであったり、地域住民が愛してやまないものだったり、その地域にしかないものであったりではないでしょうか？真に地域が活性化しているか否かは、地域住民が地域を愛する心の大きさであったり、地域資源を大切にし、地域住民自らが育み、地域住民が持続させていくことに見出せるのではないでしょうか？

今、全国の地方自治体は、地元の中小企業を尻目に、企業の誘致に全力を傾注しています。しかし誘致企業は、従業員は雇用できても、売り上げはたいてい本社にもっていかれます。昔と違って現代の誘致企業が雇用出来る人数は、たとえ大きな工場でも、たかが知れていますし、従業員に支払われる給料は、今の若者が地元で買い物はしない現状をみても（笑）、なかなか地域内にストレートには落ちていません。それでも地方は、地元の中小企業への支援もそこそこに、誘致企業にいい顔をしていませんか？。誘致企業に対しては固定資産税の免除などの優遇措置もあります。

しかし、これまでの歴史を振り返ると、誘致企業は、儲けがなくなれば地域がおかれている現状をお構いなしに、撤退していくことがたびたびありました。その様は、まさに「焼畑商業・工業」です。会津では、かつて誘致した工場の業績が悪化して、一部工場が閉鎖され、従業員は解雇されたり、宮城や三重、鹿児島県などへ転勤を命じられています。転勤命令に従わない場合は、当然のごとく解雇となります。その結果、家族がバラバラになってしまったり、慣れ親しんできた地域から離れざるを得ず、地域コミュニティが崩壊する状況も見受けられます。誘致企業ばかりを責める意図はありませんが、地域が頭を下げ、地域に来ていただいた誘致企業に、結果として地域が滅茶苦茶にされてしまうことも起こり得るのです。

また日本の大企業は、利益確保優先のため、国内の産業空洞化をよそに、人件費や物価の安い外国に進出して利益を確保しようとしています。これでは国内で働ける場所がなくなってしまい、生活できない若者やお年寄りがますます増えていきます。本当にこれでいいのでしょうか？

私は、こうした構造にこそ、現在の日本経済が低迷している大きな原因があると考えています。

その一方で、地域の中小企業は、生まれ育った地域において、どんなに利益が生まれなくても、必死に地域でがんばろうとしていませんか？その結果、廃業してしまう中小企業もあると思いますが、私たち地域は、もう少し地域でがんばっている人々に、様々な形で手を差し伸べてもいいのではないでしょうか？

人も、学校も、企業も、お店も、地域の一員です。これらのうち誰一人欠けることなく皆で一緒になって地域のことを考えれば、もう少し「地域の盛り上がり」が長続きすると思います。

避難者で自殺をしてしまった人は、一時帰宅して、もう避難先には戻りたくないと、死の前日に夫につぶやいたそうです。この方にとって地域とは、その人そのものだったのでしょう。その地域には、家族がいて、お父さんやお母さんのぬくもりがあり、思い出があり、仲間がいて、仕事があって、生きがいがあったのでしょう。それが奪われたとき、そばに家族がいるにも関わらず、選択したのは自らの死だったのです。やはり生まれ育った故郷がいちばんの居場所なのだと、気づかされました。

復興が進まないのは、むしろ私たちが過去の歴史を振り返らずに、反省を生かさずに、その場しのぎの生き方しか出来ない私たち人間にも問題があると思います。

真の復興を目指すため、今最も必要なことは、自分の住んでいる地域を見つめなおすことだと思います。そこに様々なヒントがあります。そう思えるのも、青年団活動に取組んできたからです。
青年団活動で様々な人々に出会い、学ぶことが出来たからです。

震災から２年が立ちましたが、私は本当に、心の底から「青年団」活動をやってきて良かったと実感しています。

吉田恵三（よしだ・けいぞう）
福島県会津若松市在住　職業：自治体職員
1968年生まれ　福島県会津若松市出身
前日本青年団協議会会長
(日青協経歴：06～07年度･常任理事、
08年度･副会長、09～10年度･会長)

日青協会長退任挨拶をする吉田さん（2011年５月）

第３章 支援活動の記録

特定非営利活動法人 静岡県青年団連絡協議会の取り組み
～静岡県青年問題研究集会・拓け KATARI 場 2013～

まとめ：NPO 法人静岡県青年団連絡協議会監事　鈴木大志

平成25年１月19日（土）～１月20日（日）、第55回静岡県青年問題研究集会「拓け KATARI 場2013」を１泊２日の日程で開催した。

今回は、日本青年団協議会からお話をいただき、震災をテーマとして基調講演と語り合う分科会をつくることとなった。

当日は、岩手県青年団体協議会監事（前会長）の泉田将治さん、東海大学講師の辻智子先生、日青協事務局の尾路克彦さんに来ていただいた。

初日の基調講演では、泉田さんから、東日本大震災の被災体験、またその後の町の様子など写真を交えて語っていただいた。消防団として復旧や捜索に取り組んだ話しや震災を体験した仲間や町の人たちの様子など、テレビや新聞では知ることのできない本当の被災地の状況を聞くことができ、参加者みんなが改めて震災の恐ろしさを感じているように思えた。また、自分の体験を多くの人に伝えることで、この震災を忘れないでほしい、風化させたくないという想いのこもった講演であった。

基調講演後の分科会には、泉田さん、辻さん、尾路さんの３名にも入っていただき、参加者３名、司会者２名の計８名で語り合いを行った。分科会では、基調講演や『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～第１号』をもとに、震災について体験者にさらに聞いてみたいことを質問したり、基調講演では語られなかったこと、現在の被災地の状況などの話を聞いたりすることができた。また、静岡県は東海地震で大きな被害がでると言われている地域でもあるため、自分たちの地震への意識や備え、東日本大震災から感じたことなど、参加者の震災についてのレポートを踏まえて語り合いを行った。

防災について話し合った分科会

分科会の中では今回の震災を受けて、東海地震もいずれは発生するだろうとみんなが思ってはいるものの、災害への備えや対策などはまだまだ出来ていない様子がみえた。また、何を備えておくべきか、本当に必要なことは何なのか、実際に経験した人の話を聞くことで、やっと実感できたのではと感じる。体験談の中では、仲間との何気ない雑談が咄嗟のときに役立ったり、青年団活動での経験が被災したときにも活かせたという話を聞き、普段からの話すこと、聞くこと、自分から情報を得ることの大切さに気づいたり、青年団活動へ取り組む気持ちが前向きに変化したりという様子があった。また、備えについても生活する地域についての歴史や言い伝えから災害について知ることができたり、現在の地域

の様子からどこに避難するべきかを知っておくことなど、物だけではない備えについて学ぶ機会となった。

今回、この震災をテーマとした分科会を通して、参加者は自分の住む地域を知り、一緒に活動する仲間と災害について語り合いたい、活動に活かして仲間や地域の人たちにも伝えていきたいという想いを持つことができた。また、震災による現在の実際の様子を知り伝えていくために被災地へ行ってみたいという話にもなった。今後はその想いをだんだんと実践していくことで、参加した一人ひとりから震災の教訓やこの語り場で学んだことを活かしていってほしい。そして、それぞれの想いが一つとなった青年団活動から地域の人たちやその他の多くの青年に防災についても発信していってほしいと思う。

泉田将治さんの講演を聞いて(感想)

鈴木　俊久さん
（元静岡県青年団連絡協議会会長）

・実体験を伝える大切さ、聞くことができる大切さを感じた。
・消防団員としての震災体験は現役青年や、消防団員にとってとても大切な話しであり、静岡県内の消防団員に聞いていただける時間があればと感じた。
・被災地に足をはこんでほしい！との言葉に、今だからこそ、これからだからこそ忘れないように風化させないように訪れることが大切だと感じた。
・被災地青年団としての、新しいまちづくりについての考え方、取組み、関わりについてもっと聞いてみたかったです。
・被災地の教訓に基づく、青年団としての取組み（防災、減災に向けた）を、全国的に考え行動することが必要であるし、そのことに取り組むことが､時代のニーズとなり、青年団の活性化や必要性の再検討に道をつけることにつながらないだろうか！
・被災地から学ぶ､青年団が提案する「地域、社会づくり・人づくり」をつくり上げることができないだろうか？

講演する泉田さん

曽根　美樹さん
（三保青年団(静岡県静岡市清水区)）

私は、2011年３月11日、東京駅で家にも帰れず構内をダンボールで過ごし、その後の横浜での避難を終えて静岡に戻りました。その時、被害にあった人・地域の中で温度差が感じられました。知り合いが被害にあった、という方も必死でテレビやインターネットから情報を得ようとしていました。ただ、ＡＣのコマーシャルのように、毎日流れる地震についての報道に、もう見たくない、見飽きたという声も聞き、大切なことなのになぜそう思うのかと怒りを覚えるのと同時に、とても悲しい気持ちににになったことを覚えています。東日本大震災についての現状をＴＶで見たり、

被災された方のお話をきく度に忘れてはならない、この話は他人事ではないと思うのですが、時間が経ち、仕事や青年団など目の前にあることが忙しくなるとそれで精一杯になってしまいます。でもそれではやはりダメだと思うので、また同じ悲劇がくり返されないためにも、泉田さんのおっしゃっていた防災意識をしっかり持ち、非常食の確保、家族と避難場所などの話し合い、会社にいる時の対応について確認したいと思います。

また、今後岩手県の友人に会う時には、いつも通り、笑って楽しく過ごしたいと思います。

お話を聞かせていただき、ありがとうございました。

石川　峰さん
（静岡県三島市青年団体協議会）

貴重なお話が聞けました。ありがとうございました。

教育現場にいる自分は、どう子どもに話せるだろうか、いざという時にどんな対応を自分ができるかと思いながら伺っていました。話を通じて、明確（単純）なひなん方法、命を守るという意識が大事なのだろうと感じました。また、自然の中で我々が生かされているということを忘れないようにしたいものだと感じました。

学校現場では、子どもという多くの命を預かっています。そこで自分が瞬時に判断して行動できるかどうかは、不安の種でもあります。地域の特徴、環境を理解しておくことや自分なりの価値判断基準をしっかり考えておくことが必要なのだと感じます。

静岡県は、東海地震がくるといわれて30～40年になります。気のゆるみという点では、県民に蔓延している状況だろうと考えます。いま一度、防災意識を高めて身一つでとにかく逃げる、とにかく命を守ることに気をおきたいというふうに思いました。

※一昨年、ボランティアで民家の荷物整理（搬出、処分）をしましたが、人の物であるのに、処分・処分と淡々と動いたことを思い出しました。

東北復興プロジェクト「ship for ship」

高知県青年活動実践協議会にぎわいボニート（代表：大崎博士）

（※これは 2012 年度全国地域青年「実践大賞」への応募レポートを転載したものです）

活動開始の経緯

東日本大震災がきっかけに「自分たちにできることとは？」について考え、出た答えが「まずは動く」被災地に行ってみようとの結論でした。また、私達が住む四万十市西土佐地域は、物理的な若者の数の減少に伴う、継続的な活動が困難な状況となりつつあり、何かしようとしても仲間がいない（少ない）状況が続いていました。

このような背景から、自分たちが「動く」ことで地域内だけではなく、県内各地で同じ状況にある各地の青年（団）組織・個人に「つながり」が生まれ、プロジェクトの過程で培われる「ノウハウとネットワーク」は、漁具倉庫を届ける（この段階ではまだ決まってなかったのですが）と言う「東北復興」の一助になるだけではなく、「中山間地域に主体性が生まれる」きっかけになるのでは？と考え活動し出しました。

西土佐連合青年団の呼びかけで始まったプロジェクトはその規模の大きさ、高知県内各地広範囲からの参加という事もあり、プロジェクトの活動母体として「高知県青年活動実践協議会にぎわいボニート」を結成し活動してきました。

東北復興支援「ship for ship」プロジェクト

2011年の「みちのくYOSAKOI」（宮城県仙台市で開催）に参加した際、仙台市の隣にある名取市を訪問し、現地の方から被災状況の説明を受け、意見交換を行いました。閖上（ゆりあげ）地区は震災前まで日本有数の赤貝の産地として知られていましたが、地震による津波の為、ほぼ全てが流失している状況でした。漁協さんなど現地の方からの聞きとりを行う中で「漁船や建物は国や県からの支援により再開の目処は立っているのですが、日々の漁を営むにあたってロープや碇などの漁具（約100kg）の保管が出来ず、自宅から毎回運んできている」とのことでした。このヒアリングを機に「漁具倉庫」を届けるプロジェクトが立ち上がりました。プロジェクト名は、船の「ship」からリーダー・フレンド・パートナーなど様々な「ship」に繋げて行きたいとの思いから名づけました。「ship for ship」プロジェクトの始まりです。

建設資金集め→県内各地のイベント出店（３月～12 月）：高知県内各地 13 箇所

漁具倉庫は１棟あたり約100万円の建設費用がかかるのですが、資金捻出の大半を高知県内の青年団・大学生に呼びかけ、県内各地のイベントに出かけ物品販売を行いました。イベント参加の目的は漁具倉庫建設資金の為の「売上げ」が主なのですが、この活動を通じて、「青年団（社会人）と大学生」や「私たちと地域のみなさん」との交流も活動の軸に据えました。地域の青年との交流や、青年団 OB の方による講演会などを開催しました。活動には「東北の為に何かしたい」若者はもちろんでしたが、「単純に楽しみたい・地域に行ってみたい・友達を増やしたい」若者など、

気軽に参加するメンバーも多く､「楽しみながら高知県を知って仲間づくりと東北復興を行う」私たちの復興支援のスタイルを確立しました。

おかげさまで、約50万円を漁具倉庫建設資金として捻出することができました。

名取市視察訪問（２回：６月・９月）

「設計案や建設場所」「資材調達、スタッフ宿泊場所、当日お手伝いの手配」など、現地での意見交換を通じて建設計画のイメージを膨らますと共に、詳細を詰めて行きました。

物理的な距離（車で片道約18時間）もあり、メール等でやりとりすれば良い場面もあったかもしれませんが、直接足を運ぶことで、自分たちと「名取市・漁協・商工会青年部・尚絅（しょうけい）学院大学」など名取市の方との連帯・一体感が生まれたように思います。

ワンコイン（500 円）鳴子募金

（メッセージ鳴子（募金活動））

「高知から東北へ気持ちを直接つなぎたい」「目に見える形の募金を」と言うことで取組み始めました。よさこい踊りの際使う「鳴子」に募金形式（500円）で募金して頂いた方にメッセージを頂き、みちのくＹＯＳＡＫＯＩで訪れた際現地の方に直接お渡ししました。

物販を行うイベント会場での呼びかけだけでなく、家族や友人など個人でも呼掛けを行い、多くの寄付を頂きました。頂いた鳴子は１個ずつの配布と、七夕飾風に仕立てたものをお配りしました。

当日は仮設住宅へ訪問した際に手渡ししました。その際、現地の方が一緒に鳴子を持ってよさこい踊りを楽みました。

名取市での漁具倉庫建設

（9/23（日）～25（火））

余談ですが、昨年の活動は雨と言うか荒天にことごとくたたられました。地域イベントのいくつかは「ここ」しか降らない状況だったり、よさこい祭りでは雷、直前イベントでは台風と天気との闘いでした。漁具倉庫建設は９月23・24・25日で行ったのですが、最初の２日間、晴天が予想された中、雨と風が吹きつけとても作業できる状況ではありませんでした。ただ、高知から来ていることで、良くも悪くも腹をくくって作業を行いました。

高知から大工さん５名、現地の尚絅学院大学のみなさん８名、名取市役所復興支援課のみなさん６名で進めました。人手が必要な時には大勢、大工さんしかできない時間帯は少数と効率よく作業は進みました。

また、初めてで不慣れな学生同士ではありましたが作業を通じて協力しあい、一体感が生まれ交流は進みました。宿泊場所は尚絅学院大学の施設に布団を手配して頂き、これだけでもありがたかったのですが、歓迎会も開いて頂き、漁具倉庫を通じた若者同士の交流が進んだことは大変良かったと思います。将来的には全国の青年団や大学生がこのプロジェクトに参加し、交流すればなんと楽しいことだろうか？と妄想が膨らみました。

よさこい祭り参加

（8/10（金）・11（土）：高知市）

漁具倉庫建設は高知市の大工さんに手伝って頂いたのですが、主力は自分たちのような未経験者。家屋に比べて床や水回りが無い分作りやすい「漁具倉庫」ですが、建設物は一

般的に一度仮組みをしてから本組みを行うとのことで、一度練習する必要がありました。漁具倉庫に使う部材の一部をよさこい祭りの際使う地方車（ぢかたしゃ）に使うことと、地方車の構造が漁具倉庫と似ていることから、格好の練習の場となりました。また、大工さんも手伝ってくれたことで、頑固なイメージのある（実際頑固だったのですが…）大工さんとコミュニケーションが図れたことは本組みを行うにあたって大変有効な場となりました。

よさこい祭りは自分たちにとっては「仲間づくり・リーダー育成の場」「地域交流きっかけの手段」として活用したのですが、戦後から始まる祭りは今年で60回、全国にも約200箇所開催されるなど、「活動を広く知ってもらう為」に有効な手段として参加しました。チームとして参加するのは勿論、ＪＲ高知駅前での物販を行い、また、観光客など、現地飛び入り形式にして、多くの方に呼びかけ・巻き込むスタイルを確立しようとしました。

当日は名取市のマスコットキャラクター「カーナくん」も参加して、にぎわいに花を添えました。来年は名取市と合同で参加したいと考えています。

「ship for sip」立ち上げレセプション

漁具倉庫建築が決まり、物販イベントが行われ、活動が形になって来始めた、６月30日（土）に正式なプロジェクト立ち上げレセプションを高知市で開催しました。これまでの取組みと今後の計画について話をし、プロジェクトへの賛同者を増やしたいとの思いと、もうひとつ踏み込んだ「いっしょに動く仲間探し」を主な目的に開催しました。

当日は名取市から震災発生後から詳細にカメラに収められた小斎誠進さんをゲストに招き、「その時」の様子や、発生から現在までの名取市の様子をお話頂き、報道だけでは伝わらないありのままの名取市を感じることが出来ました。

海の語り部（6/29（金）：宿毛市）

小斎さんの来高に合わせて県西部宿毛市・四万十市でお話し頂きました。宿毛市は防災担当の方はじめ、平日の夕方にも関わらず市役所の職員約30名の方にお集まり頂きました。

ちょうど宿毛市は南海大地震に備えて小学校の合築について議論されている最中と言うこともあって、活発な質疑応答がされました。夜は県西部幡多地域の若者が集う「情熱交流会」が行われており、この場でもお話し頂きました。

みちのくＹＯＳＡＫＯＩ参加
（10/6（土）・７（日））：仙台市・名取市

昨年の「みちのくYOSAKOI祭り」以来２回目の参加。高知から片道約18時間のバスだったのですが、現地合流組含めて約40名で参加。両日とも日中は名取市を訪問、２日目はよさこい祭りに参加するスケジュール。初日は名取市主催の「漁具倉庫完成セレモニー」に参加しました。

よさこい祭りに参加頂いたカーナくんに今回は高知のご当地キャラ「カツオ人間」が参加し、にぎわいに花を添えました。また、旬のカツオのタタキとカツオ餃子をふるまい、緊張感の中にも和やかな雰囲気を作り出しました。

２日目は美田園（みたその）仮設住宅を訪問。正直どのように接していいのか不安が大きかったのですが、みなさんに温かく迎え入れて頂き、高知から持参した「メッセージ鳴子」をお配りしました。お配りするとどなたも「教えて～」と、予想以上の反応で、会場は踊り講習会となり一気に打ち解けました。また、スタッフがバスにメッセージ鳴子を取りに３往復するなど、大いに盛り上がりました。

よさこい祭りは純粋に自分たちが「楽しい」のですが、その「楽しい」を共有することができると「もっと楽し」く、また、メンバーの充実感が違いました。このみちのくプロジェクトだけでなく、自分たちが今まで取組んで来た普段の活動の中でもこの仮設住宅での１時間が１番印象的な時間となりました。

今　後

東日本大震災を風化させない様に、毎月「11日」前後の週末に街頭募金を行う予定です。また、県内各地の青年（団）に、このプロジェクトの賛同者、いっしょに動いてくれるメンバー探しを主な目的に、各地でプレゼン・意見交換する場所を作る準備を進めています（月１回予定）。

個人・地域に主体性が生まれる「中村青年団」の復活

プロジェクトを通じて昨年「中村青年団」が復活しました。青年活動が下火になっている高知県では青年活動の「ノウハウ」やＯＢのみなさんとの「ネットワーク」が大変少なく、何かにトライしようにもハードルが高い状況だと感じています。今回のプロジェクトを通じて、県内各地の若者との交流が生まれ、また、ＯＢのみなさんとの交流により、「前に進む」推進力が個人・地域の若者に生まれたように感じます。

南海大地震に備えた「私たちにできること」

近い将来私たちの住む高知県も南海大地震が起こることが予想されています。震災の復旧・復興は行政や自衛隊などが中心になって進められますが、行政が手の届かない時があります。今回も「私たちを忘れないでほしい」とはセレモニーで佐々木名取市長はじめ多くの方にお聞きした言葉です。お互いに顔が見えていることで親近感が生まれ、もしもの時にはお互い支えあう。「細くでもかまわない、長くこの交流を続けたい」。漁協委員長出雲さんが言われました。今後も漁具倉庫を届けるこのプロジェクトを通じて名取市のみなさんと「支援だけではない交流」を続けて行きたいと思います。

また、プロジェクトを通じて全国の青年団・大学生とつながり、つながることで有事の際それぞれのできる範囲での支援をして頂く。南海大地震に備えた「私たちにできること」として今後も続けて行きたいと思います。

大分の青年たちの支援活動

大分県臼杵市・板井 泉一（フリーポート大分代表、元大分県連合青年団団長）

先の震災後、直接の影響が無かった九州の私たちが、どこか実感が無く、他人事のような感覚であった中、「おおいた自由学校」（語り合いや自主活動を通して、人や社会との繋がりを学ぶ活動）のメンバーの中から、「被災地に入り自分たちの目で、現状を確かめる事が重要ではないか」という声が上がり、平成23 年７月にメンバーのうち３人が日本青年館の山本信也常務夫妻と共に被災地気仙沼に入ることとなった。

現地では、元日青協副会長・元宮城県団会長の高橋弘則さんに、南三陸町や気仙沼市内等を隈なく案内して頂いた。市中はまさに想像を絶する惨状であり、青年団ＯＢの方々からお話を伺い、初めて震災の甚大さと厳しい現実を再認識させられた。

大分に帰った私たちは、それぞれの職場での募金活動やチャリティーのゴルフ会やコンサートなど様々な活動を行い、平成 23 年度は30 万円の支援金を送ることが出来た。

また、私の地元臼杵市でも青年団の仲間を中心にした青年団体で組織した臼杵市「気仙沼復興支援」実行委員会を立ち上げ、「うすき竹宵祭り」（２万本の竹ぼんぼりやオブジェを城下町に飾り、９万人の観光客が訪れる）で平成 23 年、24 年と気仙沼の物産品販売と写真展を開催した。

その様な中、実行委員の中から、「相手の顔が見える支援が重要であり、報道では伝わってこない被災地の方の話を直接聞きたい」という声が上がり、平成 24 年６月に前記の高橋弘則さんと元本吉郡青年団体連絡協議会長で漁師の芳賀孝司さんを招いて、「気仙沼から学ぶ　災害に負けない地域づくり・知活フォーラム」を開催することとなった。

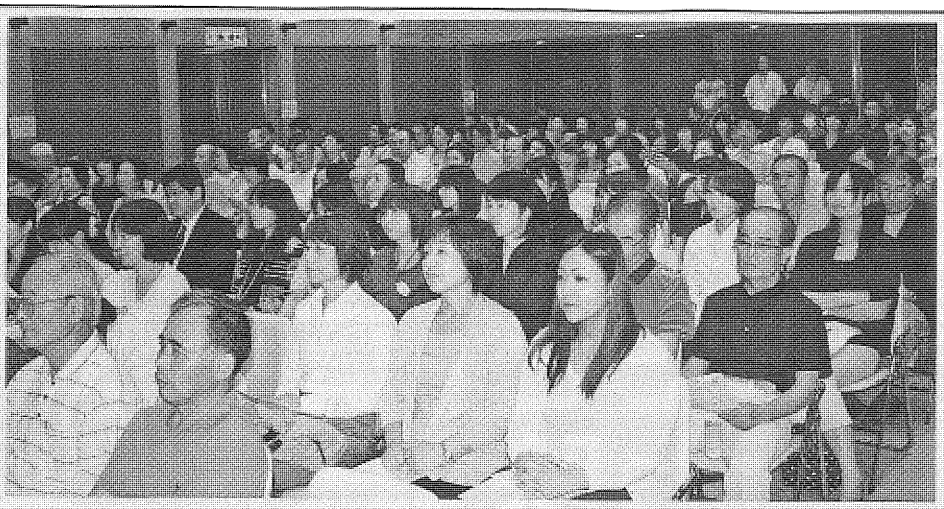
当日は、二人のリレー講演後、市長や来場者より感想を頂き、市民からは多くの善意が寄せられ、収益金 30 万９千円の支援金を送る事が出来た。（高橋さん、芳賀さんの震災当日の体験については『生きる』１号に収録）

朝刊）　２０１２年(平成２４年)６月１４日　木曜日

災害に負けない地域へ

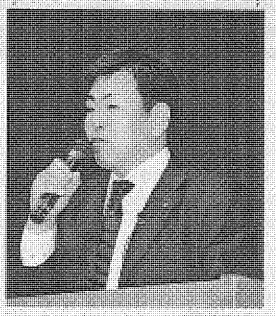
気仙沼市民が講演

苦しい現状打ち明ける



フォーラムに約250人が参加＝臼杵市中央公民館

講演する芳賀孝司さん㊨と高橋弘則さん



臼杵でフォーラム

「気仙沼から学ぶ　災害に負けない地域づくり知活フォーラム」が臼杵市中央公民館であった。宮城県気仙沼市民２人が講演。東日本大震災後の多くの支えに感謝しつつ、今なお前進が困難な被災地の現状に理解を求めた。

臼杵市と気仙沼市は特産品のカボスとサンマを縁に、東京での「さんま祭り」などを通じて交流がある。フォーラムは臼杵市内で活動する青年団体が組織する臼杵市「気仙沼復興支援」実行委(板井泉一会長)の主催。約250人が参加した。

漁業を営む芳賀孝司さん(42)は震災当時を「自宅を流された絶望感と、家族が生きていた安心感とで複雑な気持ちだった」と振り返った後、漁業について「食品中の放射性セシウム濃度の国の基準は1㌔当たり100㏃以下だが、消費者の基準は〝ゼロ〟だ。0・56㏃出ても取引先は買ってくれなくなった」と苦しい現状を打ち明けた。

気仙沼信用金庫職員の高橋弘則さん(47)は「支えてくれる人がたくさんいるということが、何よりも強い支え」と感謝。その上で「二重ローン問題で国が面倒を見ると言いながら、いまだに成果が出ず地元企業も前に進めない。住民も働く意欲をなくしており、求人を出しても人が集まらない」などと課題を話した。

（宗岡博之）

この旅を終えて・・・

谷山（たにやま）　天一（ひろかず）

岩崎大輔さん、伊藤治彦さんには大変お世話になった。両名には３日間ずっとエスポール宮城号を運転していただいた。疲れた時、私たちは寝ていた。

みんなで、南三陸町の「日の出荘」に泊まったのだが、岩崎大輔さんのいびきはすごかった。２メートルの距離で寝ていた私は、夜中の３時に目が覚めて、それ以後眠れなかった。１メートルの距離にいた伊藤さんは大丈夫だったのだろうか。

震災後、初めて被災地へ行った。被災地は過酷な大地となっていた。テレビでは、オリンピックをやっていたが、どうでもよく、見る気が失せた。東北の地でオリンピックのことを言う人は、一人もいなかった。オリンピックより今日、明日、１年後の生活だった。曲がった鉄。砕けたコンクリート。津波がぶち抜いた家。あちこちにある巨大な瓦礫の山。大川小学校では、校舎の中から雀の鳴き声が聞こえた。学校周辺にはたくさんのひまわりが咲いていた。

復興!?どんな形になったら復興なのだろうと思った。元通りのまち？新しいまち？それとも違う何か…。震災から１年３ケ月余り。みんなが幸せになるまで何年かかるのだろうと思った。前に進んでいるようで、ほんとは何も進んでいないように思えた。

震災で受けた心の傷は一生消えない。もし、心の傷が癒えるとしたら、と全く同じものを手に入れるか、同等、あるいはそれと思えるものを手にした時だと思う。かつ

て、私も大切なものを２人亡くした。そして、今、かつて亡くしたものの代わりとなるものを手に入れた。私自身が父親となり、女の子が手元にいる。あれから 28 年、少しはマシになった。

何の因果か、1,000 年に１回と言われる大震災が起き、東北の青年らとあと数十年、同じ時代を生きることとなった。私にできることは小さいが、この「新燃岳の灰」の販売をできる限り続けていこうと思う。大きいことは言わずに、１年１年確実に実行していきたい。毎年、７月29日は宮城県南三陸町の「サンライズ」へ、７月30日は山元町の「翔」へ。

この活動を続けることは、「青年団が何たるものか」との一つの証になると思う。青年団ＯＢの私は、この活動を支援し、全国各地の「青年団」が元気を出し、また頑張れればいいと思う。青年団が元気で頑張っている地域は、いい町になるのだから。

最後に、宮城県青年団の皆様には大変お世話になった。心より感謝申し上げます。皆さん、お酒は霧島酒造の「霧島」を飲んでいた。いつかこちらに来られた際には、お声掛けください。隣町の霧島酒造の工場見学にでも行って、ゆっくり焼酎でも飲みましょう。

（高原町青年団灰プロジェクト実行委員、元高原町青年団会長、元宮崎県青年団協議会常任理事）

宮崎日日新聞（朝刊）　2012年７月28日

若い力で復興後押し

高原町青年団 → 南三陸、山元町

火山灰販売の益金寄付へ

震災支援

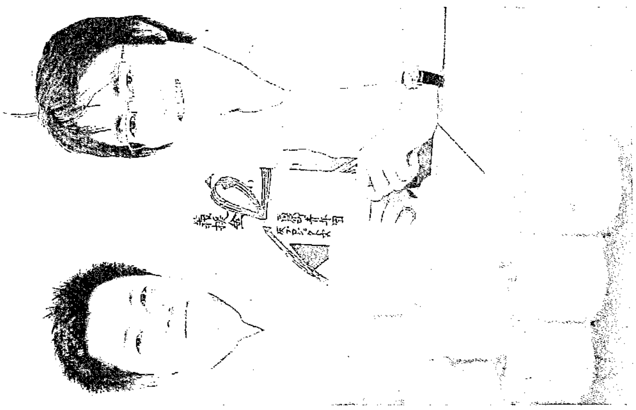
東日本大震災の復興支援のため、昨年5月から新燃岳噴火の火山灰を小瓶に入れて販売している高原町青年団灰プロジェクト実行委員会（六部一智久代表）は今月、当初の販売目標だった2千個を達成した。28～30日、町職員の六部一代表(29)らが宮城県を訪れ、津波被害を受けた南三陸町と山元町の青年団に益金計40万円を送る。六部一代表は「規模は全く違うが、被災地同士。降灰被害を受けた高原の若者が頑張っている姿を見て元気を出してほしい」と話している。

当初、火山灰を販売し新燃岳被害の義援金を集める予定だったが、昨年4月、南三陸町でボランティア活動をした六部一代表が「新燃岳被害とは桁が違う」と実感。全額震災支援に充てることにした。

噴火直後、皇子原公園に積もった火山灰を実行委メンバーが手作業で瓶に入れ、2千個用意。町内の農産物直売所・杜の穂倉やインターネットで1個300円で販売し、経費100円を除く200円を義援金として集めた。

益金を届ける山元町は高原町が震災支援で職員を派遣したという縁がある。六部一代表のほか、実行委メンバーで、いずれも町職員の谷山天一さん(38)と有村和敏さん(26)が届ける。

六部一代表は「使途は限定しない。復興に若い力は不可欠。青年団が元気になる活動に使ってほしい」と語る。今後も火山灰を販売する活動は続けていくという。



新燃岳火山灰の益金を届ける六部一代表（右）と谷山さん

宮崎日日新聞（朝刊）　2012年８月22日

東日本大震災

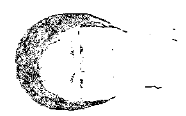
被災地から

―県民の活動報告

宮城県南三陸町と山元町にお金を届けた

高原町青年団灰プロジェクト実行委員会代表の六部一智久さん(29)

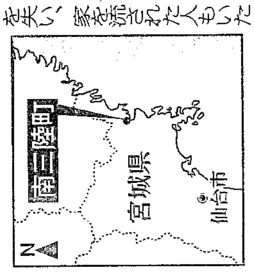
東日本大震災の復興支援のため、新燃岳噴火の火山灰を瓶に入れて販売する活動を続けている。当初の販売目標だった2千



個を達成したので、7月末に宮城県を訪れ、益金計40万円を津波で多くの犠牲者が出た南三陸町と山元町の青年団に届けた。

南三陸町は震災直後の昨年4月に訪れて以来、2回目。以前よりがれきが片付けられていたが、建物の解体はあまり進んでおらず、新たに建てられた建築物もないようで、被災当時とさほど変わってはいなかった。また、多くの住民はいまだに仮設住宅や高台に住んでおり、人の気配も感じられない。そんな静かな町を時折観光バスが行き交っていた。被災地が観光名所になっていることに違和感を覚えた。

「観光名所」に違和感



青年団員の中には津波で家族を失い、家を流された人もいたが、皆それを全く感じさせないほど明るく、前に向かって進んでいくとの決意が感じられた。

青年団員との会話で印象に残っているのが、津波被害を受けた防災対策庁舎の問題。町は解体の方針を示していたが、地元住民の中に保存を求める動きが出てきてまだ結論に至っていない。津波で妻を亡くしたある青年団員は「見るたびにつらくなるので前を通らないようにしている。解体してほしい」と訴えていた。話を聞くまでは広島の原爆ドームのように、震災遺構として保存し、震災を後世に伝えていくべきだと思っていただけに難しい問題だと感じた。

益金40万円は額としては少なく、これが直接、復興支援につながるとは思っていない。ただ、はるか遠くの高原町で被災者を応援している人たちがいることを伝えたかった。昨年の新燃岳噴火で高原町は全国から多くの義援金をいただいた。噴火から1年半が過ぎたのにいまだに毎月、お金を送ってくださる方もいる。誰かが自分たちを見てくれていると思うと、不思議と頑張る力がわくのだ。

これから宮城県の町を作っていくのはそこに住んでいる人たちで、私たちは応援することしかできない。今後も被災地を忘れず、火山灰を販売して益金を届ける活動を続けていきたい。

（随時掲載）

第４章　記録から学ぶ
『生きる』１号を読んで

『生きる』第１号に想う

北海道栗山町・本田　徹

はじめに多くの命と財産を奪い去った東日本大震災により犠牲になられました方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された方々、そのご家族の方々に心よりお見舞いを申し上げます。

当時、私は職場にいましたが、震度はさほど大きくありませんでしたが長い揺れが続いたため、どこかで大きい揺れが起きているのでは？と感じ災害情報を確認しました。その後、帰宅しテレビで街をのみ込む大津波の映像を見て言葉を失いました。

この東日本大震災の１週間前に全国青年問題研究集会が日本青年館で開催され、私も久しぶりに時間を忘れ語り合いました。映像を見ながらすぐ仲間のことが脳裏に浮かびました。その一方で私自身、あまりの惨劇に、その事実を呑み込めずにいたように思います。地震直後から携帯電話はつながらない状態だったため連絡は控えていましたが、日を追うごとに少しずつ連絡ができるようになりました。日青協のホームページも毎日拝見させていただきました。仲間の残念な知らせに胸が締め付けられました。被災していない私ですら現実を受け止めがたいものでした。被災を防ぐために住民の安全を優先し犠牲になられた行政職員、警察官、消防職員、消防団員も数多くいたことを後に知りました。

被災した方々が体験した、震災直後の携帯電話がつながらない不安、そして予測を大きく上回る津波の恐怖、家にすら帰ることができない絶望感。地震や津波によって見たことのない光景が目の前に映った時、もし自分がその場面に直面していたら果たして冷静な判断ができただろうか……家族、地域、そして仲間のためにどうしただろうか。その時の苦悩と精神状態は、想像を絶するものだったと思います。

また地震と津波に起因する東京電力・福島第一原子力発電所の事故によって、今も９万人以上の方が避難されています。その中でも５年以上生活可能な放射線レベルに下がらない帰還困難区域から避難された方々は、戻れる希望すら見えず今も不安な生活を強いられていると思います。除染作業は成果が見えづらく、作業形態や雇用にも問題が生じているなど、不安はぬぐえないでしょう。また風評被害によって、農業も大きな打撃を受け、震災後には一部地域の農産物が消え、価格が上昇するなど全国的に影響を及ぼしました。さらに原発の事故以降、インターネットで西日本や北海道の野菜を購入する方が急増し、それまで増え続けてきた農産物直売所が東北、関東を中心に減少し、安心安全だった地産池消の流れにも影響を与えました。地震や津波によって農地を失った方々はもちろん、今もなお風評被害に悩まされる生産者への対応も、国が急いで支援に取り組む必要があります。

『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～第１号』を拝読させていただき、私たちも悲しみや苦しみをしっかりと受け止め、明日への教訓として活かさなければなりません。また被災された方々が共に支えあい、助け合うことで多くの苦難を乗り越えてこられたのだと感じました。被災地の支援に青年団が起こした行動は被災された方々の心の支えにな

ったでしょう。全国の青年たちが、被災者に寄り添い共感することによって、より大きな支援が繰り広げられると信じています。助け合いの精神は青年団運動の基礎であり、未曾有の大災害に立ち向かった多くの青年団や先輩たちに青年団の底力を感じました。

もうすぐ２年の歳月が経とうとしています。被災された方々の悲しみは癒えることはないかもしれません。東日本大震災はあらゆるものを奪っていきました。しかし復興を目指し避難された方々はそれぞれの避難先で新たなコミュニティーが作られています。防災意識が高まり、地域コミュニティーの再生が求められる今、青年団が培ってきた力が今後もますます必要となってくるでしょう。

最後に、この記録の作成に関わられた皆様の想いの輪がさらに広がると共に、1 日でも早い被災地の復興を心より願っています。そして私もその輪を広げる一員として関わっていきたいと思います。

本田　徹(ほんだ・とおる)

北海道夕張郡栗山町在住　職業:自治体職員

1972年生まれ、北海道夕張郡栗山町出身

元日本青年団協議会会長

(日青協経歴：03～04 年度･常任理事、

05～06 年度･副会長、07～08 年度･会長)

日青協会長退任挨拶をする本田さん(2009 年５月)

他人事にさせないために

北海道当別町・穴澤　義晴

震災の状況、復興に向かって動く現地の状況を読まさせて頂き、私は、現在札幌地域で暮らす会津人として、当たり前のように他人事ではなく感じながら、どう動いていけばよいか、私なりに、福島を中心とした若者支援の現場の状況を調べながら、若者支援実践者として動き方を模索しています。今回は、そんな立場から少し書かせて頂きます。

私が現在関わっている若者支援の現場では、定職に就けず、社会との接点が持てず、生きづらさを抱える若者が増加し、社会的ひきこもりの問題も、当事者・家族の困難が深まる一方です。

今そんな現場で私たちスタッフは、彼らを取り巻く周囲の人たちに、他人事ではない自分ごととして関わりを持って頂くような、つなぐ取り組みを進めています。お互いがお互いを必要とする存在となりえるか、お互いがお互いの困りごとを補う形で関係が出来ていけば、必要とされる関係が生まれ、さらにお互いがお互いを深く知り合えることにつながり、助け合いの関係の輪が広がっていく事になります。支援する支援されるの関係ではない、お互いに共に生きていく関係が生まれていくのです。

このような関係が生まれる背景には、お互いに困りごとを出し合う事が重要なポイントになってきます。私たち若者支援者は、縦割り行政のそれぞれのバラバラな施策（就労・生活・居場所づくり・仕事づくり）をつなぎ合わせる形でかろうじて仕事を成り立たせていたり、支援スタイル（基本的な支援のあり方）についても、各団体が持つノウハウがせんこうして全国的な基本スタイルを確立するまでには至っていないのです。これが若者支援者が抱える困りごとです。被災地の困りごとは、今回の文集を拝見したり、また、福島の若者支援者との交流会を通しながら、感じているところです。

これから、福島に、全国の支援者・研究者に声をかけて、若者が福島の未来を創っていくために、取り組みを開始しました。震災被害の中でも原発の問題も抱え、より多くの困難を抱える福島に入り、福島の支援者・研究者と協同で福島の若者の困りごとを再度拾うところから初めて、共に地域に生きる事をテーマに、話し合いを進めています。また、若者が中心に、仕事づくりを通して、町を生き生きと再生しようとしている取り組みを学びに、福島の若者支援者と共に韓国に渡り取材をしてきました。韓国（ソウル市）では、ハジャセンター(ハジャは日本語で「よしやろう！」の意味)若者の居場所から社会的企業育成までを一貫して行っている現場を視察し、日本における新しい若者支援の場がどうあるべきか、どのような機能を持つべきかを感じてきました。そして、３月17日には、福島の全国の支援者・研究者に声をかけて今後どう動いていくかを検討するフォーラムを実施します。

福島での取り組みが、若者支援の基本スタイルとして確立し、そのスタイルが、被災地全体に広がっていく事、全国的に広がっていくことを目指しながら、全国の若者支援の困りごとと、福島の困りごとを結びつけて、支援する･支援されるだけの関係ではなく､「と」の関係を創っていく事を大切にしながら、進

めていきたいと思います。

福島のそして被災地の課題を、全国の人たちが、自分ごととして、これからも人々がずっと持ち続け、関わり続けていけるために・・・・

穴澤　義晴（あなざわ・よしはる）

北海道石狩郡当別町在住　職業：団体職員

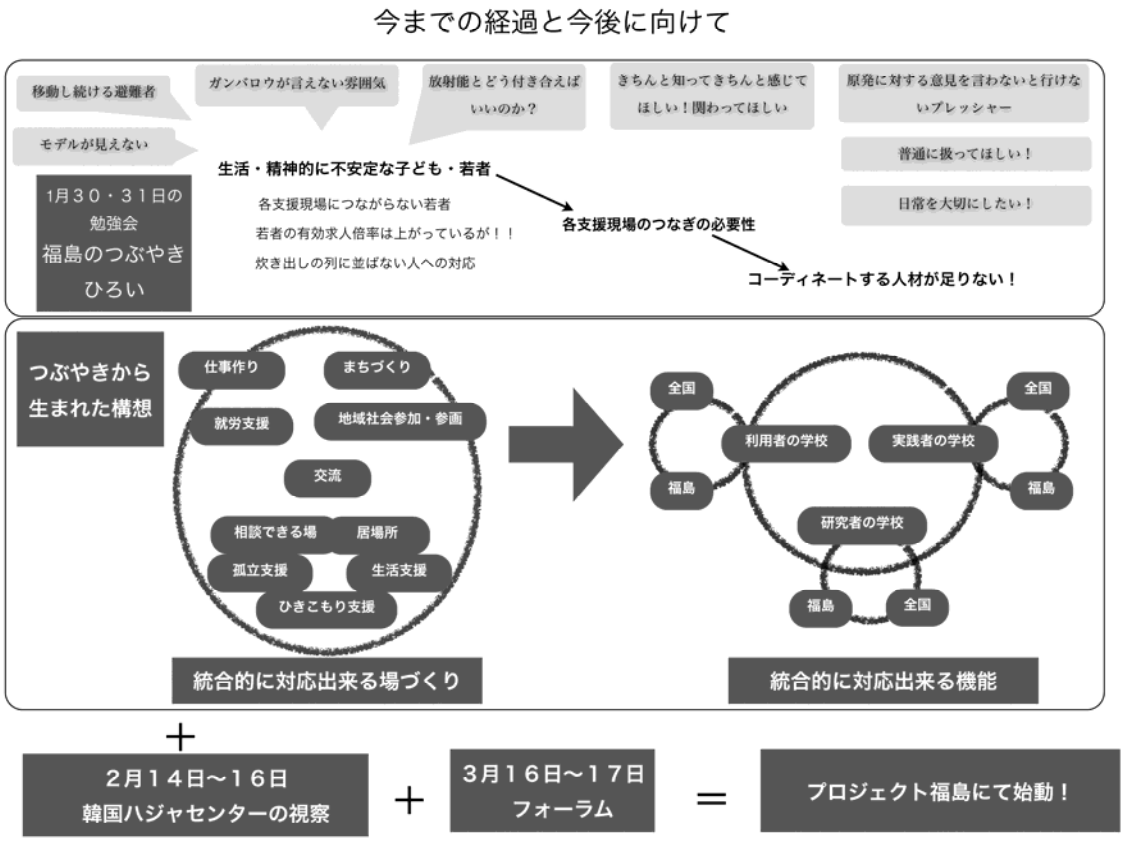
1965年生まれ　福島県会津若松市河東町出身

(財)札幌市青少年女性活動協会青少年担当課長

NPO法人コミュニティワーク研究実践センター事務局長

日本青年団協議会助言者

第57回全国青年問題研究集会で助言者を務めた穴澤さん（2012年３月）



「心をひとつに」～優しさは伝染する～

栃木県足利市・鈴木光尚

『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』を、繰り返し読ませていただいて万感胸に迫るものがある。岩手・宮城そして福島の被災地からのナマの青年たちのつぶやきと、それを支援する全国各地の青年たちの声が、反響し合って、美しい魂の交歓の場が紡ぎ出されている。

大槌の青年は、未曽有の経験を伝えていくという覚悟を語り、陸前高田の青年は、被災地の現場にこそ課題も、また問題解決の芽もあることを語る。もう一人の陸前高田の青年は、津波の最大到達点に桜を植えることにより、後世に津波の被害を伝え、二度と犠牲者を出さない、という覚悟を秘めたプロジェクトを始めた。多彩で多様な被災地に根づいて生きる青年たちのそれぞれの覚悟がまぶしい。

今回の災害はまさに未曽有のものであり、２万人近い死者・行方不明者を出し、家屋などの被害も甚大であった。しかし、最も深刻な被害は、津波が生活の基盤ごと壊滅的に破壊してしまったところにある。その意味では、あの阪神淡路大震災と比べても、比較にならないほどのダメージを東北の被災地に与えてしまったのだ。阪神淡路大震災の被災者たちが元の生活に戻るためには、平均して１年半以上かかった、と言われている。復旧まで、である。その先の復興には、より時間もかかっており現在までも尾を曳いている。私は当時、被災者とボランティアとしてかかわった人たちのその後の生活の一端をサポートし続けているが、物質的な立ち直りはできても、精神的な回復には時間を要する方々が少なくない状況である。それを上回る東日本大震災である。

直後から、縁あって、壊滅的な被害をうけた宮城県南三陸町にかかわった。ボランティアセンター立ち上げや避難所や仮設住宅での被災者と支援者とのコーディネーション。そして、地域の持っているさまざまな桎梏の傾聴と調整や和解・・。そして、十数年かかわってきた岩手県陸前高田市。また、知人が被災した宮城県山元町や岩手県釜石市‥など、毎週のように支援に通っている。また、被災地からの相談や調整業務については毎日深夜にかけて頻繁に連絡がある。被災地は、実はこれからが正念場である。真の復興のために、みなさんに継続的な関心と支援をお願いしたい。と、同時に、私が理事長をしているＮＰＯ法人（特定非営利活動法人）が、足利市より指定管理を受けている足利市民活動センターにおいて、全国的にも評価の高い被災地支援活動が持続的に行われた。被災各地への復興支援金・物資はもとより、南三陸町への市販薬の緊急支援。釜石市ボランティアセンターをはじめとして各ボラセンに、現地で不足している“土嚢袋”を数万袋。山元町をはじめとして“災害ボランティア・バスパック”を頻繁に企画し、若いボランティアたちに多数、ガレキ撤去や泥出し作業の現場で被災地復興に尽力してもらった。一方、現地に行けないお母さんたちには、岩手の避難所のおばぁちゃんたちの生きがいとなりわいの両立と、元気を取り戻してもらうために季節の山菜などを裏山で採って送ってもらい、センターで“被災地岩手の山菜を食べて復興支援しよう！”と販売協力をした・・等々。私たちの活動の合言葉「心をひとつに」は、現代日本

が失いかけていた、“人と人のつながり（絆）から希望を生み出す”という覚悟を秘めたものなのである。現在は、福島に、よりウエイトを置いて活動をしている。

福島の青年の語るように、私たちは福島を直視しなければいけない。青年は、人の痛みを理解すること、そして“絆”“結い”という思いやりの精神を説く。

人と人とのつながり“絆”から希望は紡ぎ出される。また、私たちに現在求められているのは、その“絆”を、それぞれの生きる場で、見える“カタチ”にする知恵と、協働する実践力である、と思う。

私は、いま生命（いのち）の現場で、人間の魂の尊厳を目の当たりに見させていただいている。震えるような心からの感動を日々この身に刻みつけている。

春は・・まだ遠い。しかし、浪江の青年の語るように、“歩く時には前を向いて歩くことだ”。時には涙が一緒でもいい。歩きだそう。歩きだしたら、前を向いて歩くことだ。君たちには・・それが、きっと出来る。

鈴木　光尚（すずき・みつなお）

栃木県足利市在住　職業：NPO 法人職員

1947年生まれ　栃木県足利市出身

ＮＰＯ法人足利の風理事長

ＮＰＯ法人足利ＮＰＯフォーラム代表理事

足利市男女共同参画審議会会長

日本青年団協議会助言者

青年活動推進コーディネーター養成事業地域別研修 in とちぎで講義をする鈴木さん

（2008 年７月）

語り継ぐこと

福井県鯖江市・山田　絵美子

まず初めに、この度の東日本大震災により亡くなられた方々、また、被災されました皆様ならびにそのご家族の皆様に心からの哀悼とお見舞いを申し上げます。皆様の安全と被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

私は、この手記を読み始めたとき、読み続けることを躊躇したことを覚えています。この震災を体験していない私が涙し、読むことを躊躇してしまうということは、手記を書いた皆さんがどれだけの思いで書かれたのか。早く忘れたい、思い出したくない記憶であったのではと想像します。１つの判断が生と死を分けるような状況がいくつも記されていました。もし私が同じ立場だったら同じような行動をとったのだろうか。どんな判断をすることが大事だったのだろうと、読み進めていくほどに多くの事を思い、考えました。どの行動・判断が正しかったのか答えはそれぞれに、いくつもあると思います。

今回の震災で失うことも多くありましたが、「絆」、「コミュニティ」などの人間同士のつながりの大切さ、人間は一人では生きていけないという当たり前のことが浮き彫りになりました。しかしそれは、私たち青年団が活動を通して学んできたことです。

今回の震災があった後、県内の多くの先輩から「恩返しをしなさい」と言われました。

私たち福井県も福井地震、ナホトカ号重油流出、福井豪雨など被害にあったとき、全国各地の多くの青年団の仲間に助けていただきました。全国の仲間がいたからこそ、今の私たちの活動があるのです。

私たちはもちろん福井地震（※）を知りません。しかし、多くの先輩が語り継いでいるからこそ今でもその状況を知り、思いを受け継ぐことが出来るのです。

今回みなさんが「この経験を記録に残したい。多くの人に知ってほしい。伝えたい。そして、この経験を次に生かしてほしい」という思いから、文字に残されたことにより、私たちは今回の震災で生き抜いた仲間の現状を知り、また全国の仲間が復興に向けどのような行動をしたのかを知ることが出来るのです。

このみんなの思いの詰まった手記を一人でも多くの人々と読み、伝え、語り継いでいき復興の１歩へとつなげていきたいと思います。

山田　絵美子（やまだ・えみこ）

福井県鯖江市在住　職業:会社員

1976年生まれ、福井県鯖江市出身

日本青年団協議会常任理事

（※）福井地震

1948年６月28日午後４時13分（当時はサマータイムで午後５時13分)、福井平野を震源とするマグニチュード7.1の地震が発生。震源近くでは住家の全壊率100％の集落が多数出現した。

全壊34,000棟強、焼失4,100棟、死者3,769人。石川県、県中南部、滋賀県から救援が行われた。(内閣府中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会報告書より)

http://www.bousai.go.jp/jishin/chubou/kyoukun/rep/1948-fukuiJISHIN/index.html

日青協第２回理事会で答弁する山田常任理事

（2012 年９月）

震災から２年を迎えて

滋賀県東近江市・戸嶋　幸司

『生きる』第２号発刊にあたり、私の感じた「東日本大震災」を振り返る機会を与えていただいたことに感謝する。併せて、2013年２月２～３日にかけて、震災後初めて岩手県陸前高田市に足を運ぶことができたことで、新たな思いを持って東日本大震災に向き合えた。世の中から風化させてはいけない。同時に、自分自身の気持ちの中でも風化させてはいけない思いを、思いのまま書こうと思う。

―震災前後の私―

2011年３月11日、私はコミュニティFMでの生放送を控え、自宅にいた。14時46分前後、私は実家に荷物を取りに行くため、たまたま車を運転しており、滋賀で震度３の揺れが起きたことも気づいていなかった。その後、15時ごろ自宅に戻りテレビを観ると、緊急地震速報や緊急ニュースが鳴り響いており、妻に「地震あったん？」と聞いてみるが、妻も揺れを感じていなかったようで「え？なんのこと？？」と返事が返ってくる程度。滋賀ではそれほどの感覚でしかなかった。

その後、次々と報道に入ってくる情報、それを慌ただしく読み上げるニュースキャスターの様相に、不安と緊張を掻き立てられたことを覚えている。

局に向かい、まずは番組内容をどうするのかについてディレクターと相談し、①地域情報を流すコミュニティFMであること②少ない情報量で逆に不安を与えかねない、この二つを考慮し通常の番組プログラムとして 17 時に放送をスタートさせた。

しかしながら、番組中にもタイムリーに入ってくるインターネット情報は、次第に明らかになる被害の甚大さを鮮明に伝え、もはや私自身も冷静ではいられなかった。そこで、番組が始まっておよそ一時間後、地震・津波の状況、被害を伝える番組に切り替え、残りの時間を過ごした。

その夜から、青年団の仲間との情報交換の日々が始まった。現地が停電だという状況を鑑み、出来る限り電話やメールをしないように呼びかけたり、緊急ブログや google 社のパーソンファインダーへの書き込みを率先して行った。というより、その程度しか出来ることが無かった。ただただ、連絡の取れない現地の仲間の無事を祈るしかなかった。

テレビで沿岸部の津波被害が映し出される。海のない滋賀で生まれ育った私は、「津波」というものの実感や恐怖、またそれに対する教えもなく育った。そんな自分にとって、テレビで流れる映像は、ＳＦ映画のワンシーンを観ている感覚だった。しかし、現実世界の、青年団でもよく耳にする「大槌町」「陸前高田」という名称が流れるたび、想像ができない状況に、心が締めけられた。それと同時に、震度９を記録した宮城県栗原市の情報の少なさにも不安がよぎった。

・・・それから数日の間、次々に青年団関係者の生存確認、ナマの現地の情報が手に入り始める。「生きていた」それだけで大きく胸を撫で下ろす一方で、未だ連絡の取れない大槌の加藤国雄常任理事、気仙沼の芳賀広美さん、栗原の加藤義弘先輩の安否をただ祈っていた。

その後、加藤義弘先輩と芳賀広美さんとは連絡が取れたが、加藤国雄常任の情報は一向に入ってこない。その一方で、地震直後の大槌町役場での動きについての情報が流れ始める。「災害対策本部の設置中に多くの役場職員が波にのまれた」と。真面目でまっすぐな加藤常任の事を考えると、「もしや・・・」という思いが頭をよぎりそうだったが、受け入れたくない思いで「必ず生きている」と自分に言い聞かせていた。

すると、震災から一週間くらいが経ったころ、加藤常任が生きている！見た人がいる！との情報が日青協に入った。私はあまりの嬉しさに、情報源を確かめることもなく各所へ加藤常任の生存情報を流してしまった。そう、確かめることなく。その後、加藤常任の義妹さんから私宛に、「私たち家族もまだ会っていないが、どこで見たという情報があったのか」という電話が入った。当然、答えられない自分自身がいた。そこで、情報の発信源を確かにするために、岩手県団の元会長や加藤常任が在籍していた人形劇団のブログなどから情報収集をした結果、「ニュース番組を観ていたら、○○避難所で炊き出しを手伝っている加藤さんらしき人を見かけた」というものに行きついた。その答えを持って義妹さんに折り返しの電話をした時、愕然とした。義妹さんからの返答はこうだった。「私たちがいたのも○○避難所なので、もし兄がいれば出会っているはずです」。その言葉の後、正直何を話したのかあまり覚えていない。ただただ誤情報を流したことに対して謝罪した。もちろん、ご家族から責められることなんてなかったが、人の生死にかかわる情報に対し、軽はずみな行動をとった自分を責めた。いや、今でも責めている。

―陸前高田市を訪れて―

震災からおよそ２年が経った陸前高田市を訪れ、土曜の夜は市青協のメンバーと呑み交わし、日曜には未だ津波の爪痕が残る市街地を見て回った。

まず、市青協のメンバーとの呑み会では、地震、津波、避難所生活、家族、仕事…様々なことをざっくばらんに話し合った、というよりはただ聞いているだけだった。話を聞いている途中、自分でも驚いたが自然と涙が溢れていた。メンバーの話す一言一言は、とても何気なく、さりげなく、さも普通のことのように話していたが、想像を絶する光景を目の当たりにしたメンバーの、２年経ったからこそ話せる言葉が、私にはとても重く、深いものだった。しかし同時に、彼らの今後を見つめる視線、言葉の“力強さ”は躍動感に満ち溢れ、周囲の人をも元気にするパワーがあった。私自身も「生きる」ことの意味や理由を教えてもらっているようだった。

翌日、日本青年団新聞の取材を終え、陸前高田市青協前会長でNPO法人桜ライン311代表の橋詰琢見さんに市内を案内してもらったが、そこで見たものは、私の想像をはるかにしのぐ街の姿だった。「え？２年経ったのに？？」ずっとそんな思いを持ちながら車で移動した。折れ曲がったままのガードレール、倒壊したままの建物、更地のような市街地・・・テレビの映像や現地を訪れた方からの話だけでは想像もつかない、「復興」という言葉にはほど遠い光景が広がっていた。もちろん、震災直後からすれば瓦礫は整理され、代用地に住宅が建ち始めている。しかし、関西人？というか、私の周りの、被災地を見ていない人に被災地の写真を見せた時、ほぼ全員が「え？まだこんな状態なん？」という反応であった。

高台から街を眺めたとき、ふと考えた。「自分は何をすればいいのだろう。何ができるんだろう・・・」その後、この思いが新たな自分を生み出す結果となる。

２年前のままの陸前高田市民会館(2012 年２月)

―過去を伝える、今を伝える―

陸前高田市から帰ってきてからも「自分にできること」を模索し続けた結果、一点の光が見えた。私はコミュニティFMのパーソナリティ。他の人よりも、より多くの人に「伝える」術を持っている。これを最大限に生かせないかと考えた。より多くの人に当時の悲惨さを伝える、より多くの人に現在の状況やそこに住む人の生き様を伝えていく事は私にもできるかもしれない。

現在、局のディレクターに企画を提案し、『生きる』の朗読や現地で生活する青年の声を直接届けられる番組を作ろうと考えている。直接的な「復興」には繋がらないかもしれない。しかし、被災地からほど遠い、私の住む街の住民には、小さな発信でも繰り返す事がこの震災を風化させない、他人事だと思わせないことに繋がると信じている。

最後に、現地を訪れたからこそ、今の私がいる。

戸嶋　幸司（とじま・こうじ）

滋賀県東近江市在住　職業:自営業

1977 年生まれ　滋賀県神崎郡能登川町(現東近江市)出身

日本青年団協議会副会長

(日青協経歴：08～10 年度･常任理事、

11～12 年度･副会長)

第 60 回記念全国青年大会で開会宣言を行う戸嶋副会長（2011 年 11 月）

仲間の声を伝えたい

鳥取県米子市・砂口　真

2011年３月11日午後、私は仕事が休みであったため自宅におりテレビを見ていた。そして２時46分。鳥取県米子市は中国地方の日本海側にある。東北でのあの大きな地震の揺れを感じることはなかった。見ていたテレビ番組が地震によってすべて臨時ニュースに切り替わった。そこから、私の目がテレビから離れることはなかった。ニュースでは、自分が今までに見た事がない、津波警報が発令しているのに港に居る人。津波が目視出来たのか突然避難する人の姿。車や船、そして家が会社が津波により押し流されて行くライブ映像。それはまるで、おもちゃが流されているのかと勘違いするほど、衝撃的な映像であり、今も鮮明に覚えている。

それから１年後に発刊された『生きる』第１号。そこには、私と志を同じくし青年団活動をする東北の仲間や先輩たちの壮絶な記録が書かれていた。

テレビや新聞の情報では知ることが出来ない仲間の状況、家族や友人の事。そして自分たちが産まれ育った町が大津波によって崩壊した生々しい状況を知り、今まで私が考えていた以上に辛く、悲しい思いをされたのが分かった。

一番印象に残ったのは、消防団が遺体を見つけ、引き揚げる作業をしている話だった。遺体が五体満足で見つからず、体の一部だけといった状況の方が多かった事。そして何より、知人の遺体を引き揚げる作業をした事。普通に生活していたら絶対に経験しない事を、青年がおこなっていた事を知り、とても複雑

な思いになった。もし私がその状況におかれたら、同じことが出来ただろうか。きっと無理なのではと思う。

2011年の第60回記念全国青年大会の時に、東京で被災地の青年と話す機会があった。彼は、津波の被害にあった上空写真を見せてくれて「ここ、俺の家があった場所」と笑いながら教えてくれた。私が思っていた以上に元気で明るく、その時の状況を詳しく話してくれた。長く話し込んだ最後に、私は「何故そんなに明るく話が出来るのか」と尋ねた。すると彼は､「本当は辛いけど笑って明るくしてないと、自分自身が壊れてしまう」と話してくれた。私はそれを聞き、うなずく事しか出来ず、返す言葉が見つからなかった。

私たち青年団は、自分が産まれ育った町で地域活動をしている。しかし、地元に密着している青年団が現在、全国的に減少し、団員も少なくなっている。この現状で東日本大震災をうけて、この『生きる』を読んで感じたことは、青年団が無くなってしまえば、地域では人と人との繋がりがなくなり、このような大震災が発生した時に助け合う事が難しいのではないだろうか。青年団とは非常時の地域の生命線を担っているのだと改めて感じる事が出来た。

今後、鳥取県や中国地方でも大きな災害が発生するかもしれない。そのときに、東北の仲間が『生きる』を通して伝えてくれた経験や教訓を無駄にしたくない。私は、この仲間の声を多くに伝えていきたい。新たな犠牲者をこの日本で出さないために。

砂口　真（すなぐち・まこと）

鳥取県米子市在住　職業：会社員

1980年生まれ　鳥取県西伯郡伯耆町出身

鳥取県連合青年団団長

青少年体験活動指導者全国フォーラム鳥取県プログラムで挨拶をする砂口さん（2012 年１月）

『生きる』第１号を読んで想う

香川県綾川町・岡下　進一

震災からの数日は、昔の仲間の安否を毎日祈り情報収集に努めていました。一人またひとりと無事が確認できるごとに周りを気にせずガッツポーズが出たり、飛び上がったり、奇声を発したことを覚えています。

震災から２年近くが過ぎようとする今、日々追われる生活の中でふと立ち止まるとあっという間の２年に感じました。日青協から届いた震災の記録。被災者の方々の実録は、経験していない私をその瞬間の惨事を想像させる、まさに生の文章でした。その想像は自然と私に涙を流させ、共に運動していた仲間の一人ひとりの顔、思い出を回帰させてくれました。また、今までも多くの災害が発生し青年団活動の中で様々な支援活動をしてきたことも思い出しましたが、今までの自分をどうしても評価できずに、今回も自分に何が出来るのかを常に悩み続けていました。前回の災害より少しでも役に立てるのか？その時一瞬だけでなく継続できるのか？など課題は山積みですが、仕事・家庭を持つ自分との生活との共生（調整）はやはり今回も難しいと実感しています。そんな中、実際に被災地へボランテァに出向く機会を得て被災地で昔の仲間と触れあったこと、活動できたことは私の大きな財産となりました。

私がこの記録誌の中で、また、震災後被災者の青年団の先輩や仲間との触れあいの中で感じたのは、青年団運動をしてきた仲間の心の強さです。心の強さとは、常にその現実の中で立ち止まることなく次に何をすべきか考え、行動を起こす行動力です。震災の最中でさえその恐怖、悲しみと共生しつつも行動を起こし、今もこれからも行動し続ける青年団の仲間の姿は、自分のやってきた青年団活動を輝かせ、自信を持たせてくれ、生きる活力を与えてくれます。本来なら私が生きる気力や勇気を届けないといけないのに。これからも今まで同様自分に何が出来るかを常に悩み求めて、被災者の仲間に思いを寄せ生きていこうと思います。「行動こそが真実」、私の尊敬する青年団の先輩がよく言っていた言葉ですが、これからも考えるだけでなく自ら行動しようと思います。

最後に今回の震災での日青協の素早い動きには感心しました。ウェブでの対応は遠く離れ気を揉む私たちの情報窓口になり、ありがたかったですし、運用のタイミングや運動への展開も評価しています。この記録第一号ももう一度私たちに考えさせるきっかけを与えてくれるものとなりました。阪神淡路大震災や多くの災害を経験した積み上げの成果であり、私自身その時代にあった対応能力を今後も磨いていきたいと感じました。ありがとうございました。

岡下　進一（おかした・しんいち）

香川県綾歌郡綾川町在住　職業:自治体職員

1967 年生まれ　香川県綾歌郡綾南町(現綾川町)出身

元日本青年団協議会会長

（日青協経歴：02～03 度･常任理事、

04 年度･副会長、05～06 年度･会長）

日青協会長退任挨拶をする岡下さん（2007 年５月）

この想いを伝えていく

香川県善通寺市・西梶　三枝

もうすぐ東日本大震災が発生して、２年が経とうとしています。『生きる』１号を読んだとき、2011年３月11日の情景が、ラジオから流れてきた情報、テレビで見た情景が鮮明に思い出されました。

あの日、私は仕事の関係で買い出しに出かけていました。買い出しが終わり、スーパーから車に乗ってラジオで流れてきた情報にしばらくその場で聞き入っていました。（いつも車の中ではラジオを聴いていたので…）ラジオから流れてくる情報に胸がドキドキし、急いで職場に帰りテレビをつけてみた光景はまるで外国の様子か、もしくは映画を見ているかのようでした。やはり心配なのは、東京や東北の仲間のことでした。電話をかけても繋がらない。もやもやした状態で数日を過ごし、常に日青協のウェブサイトで情報を収集するしかその時の私はできませんでした。

『生きる』を今読んでみると、その時の状況が目に見えるかのように伝わってきました。遠く離れた四国でマスメディアを通して入ってくる情報とはまた違い、一人一人の様子が伝わってきて、目頭が熱くなる場面がいくつもありました。そのような中で、やはりみんな、青年団で培った経験、人脈が活かされているなと感じました。青年団をしている、またしていたメンバーはそこの地域で何らかの関わりがあり、中心になって活躍している人もたくさんいます。あのような場でも自分のことより地域の人たちのことを考え行動している様子が伝わってきました。

私はコープかがわ（生活協同組合）の役員

をしている関係で震災支援のために2012年には２回程、岩手の被災地を訪れたり、また西日本の理事さんの集まりで震災の様子を聞いたりする機会があります。そこで聞いた様子とはまた違う様子をこの『生きる』から知ることができました。特に陸前高田は私も訪問してきたので、この本からはとても私が震災後に見た光景と思えないようでした。私が見たときも復興とはまだまだ呼べない状態で、そのままの状態かと思えるようでしたが、当日、２、３日はとても考えられない光景だったんだなーと感じました。

それから、支援に動いた青年たちも即行動で頼もしさを感じました。このような場で不謹慎かもしれませんが、今の青年達が頼もしくもあり、このように青年団があれば何かの時には大丈夫という思いが私の中ではおこりまた誇らしくもなりました。

では私は何ができるのか、何をすべきかということを、この『生きる』を読んでいくうちに考えさせられました。私たちのコープかがわでも、被災地支援に取り組んでいます。日生協（日本生活協同組合）で取り組んでいることもありますが、コープかがわ独自で取り組んでいる内容もあります。その中の一つにかがわから呼びかけ、四国全体に広がった取り組みもあります。私はそのような場を通じてこれからも、ここ四国から支援をしていきたいと考えています。

また被災地の方が言っていました。「被災地のことを、私たちのことを忘れないでほしい。」「みんな終わったことのように、復興は進んでいるかのように思われていますが、東北はまだまだです。」と。

私たちはいつもの生活ですが、東北はまだまだ復興していない。被災地の方々の思いを忘れてはいけない。またそのことを、忘れかけている人がいたら伝えていかなければと改めて感じました。

『生きる』の作成にあたり自らの被災体験をつづった青年団の仲間たち、先輩たち、またこの作成にかかわった方々に深い敬意を表したいと思います。これは記録誌ではありますが、後生まで語り継いでいきたいと感じました。

西梶　三枝（にしかじ・みえ）

香川県善通寺市在住　職業:会社員（パート）

1965 年生まれ、愛媛県宇和島市出身

コープかがわ　地域組合員理事

元日本青年団協議会副会長

（日青協経歴：93～96 年度･常任理事、

97～00 年度･副会長）

活動家養成事業かつけんで講師を務めた西梶さん

（2012 年６月）

仲間が地域で生きてきた証

高知県檮原町・立道　斉

2011年３月11日、私は地元の高知県梼原町の職場にいました。

「東北が大変なことになっちゅうぞ」と先輩の声がして、職場の誰かがテレビのスイッチを慌てて入れた後、テレビの映像には堤防を越え人家に押し寄せる津波の風景が映し出されていました。

その影像を呆然と見つめながら、私の中に１ヶ月前の２月、宮城県団の青年問題研究集会に助言者として参加するため宮城県青年会館にお邪魔した光景がよみがえっていました。青研集会を通じて二日間共に過ごした宮城県団の皆さんの姿や仙台空港の風景。津波は容赦なく、押し寄せ、ついには仙台空港を飲み込んでいきました。

とっさに、伊藤治彦会長（当時）に安否確認のメールを入れました。しばらくして、「無事である」との返信があり安堵しました。しかし、その他の方については、安否の確認ができないとのことで不安が頭をよぎりました。その日は、ほとんど眠ることができず、ただテレビから流れてくるニュース影像を呆然と眺めていました。

震災発生の一週間前には、日本青年館で全国青年問題研究集会が開催され、宮城県の青研にお邪魔したこともあり東北地域の皆さんの交流会にお邪魔して、遅くまでお酒を酌み交わしました。その夜が、岩手県選出の日本青年団協議会・加藤国雄常任理事との最後の夜となりました。加藤さんは、地元大槌町の自治体職員として、庁舎が地震によって被災したため、庁舎前に防災対策本部の設営をしている最中に津波の被害にあわれたと聞きました。最後の最後まで地域の為に職務を全うされ、本当に責任感の強い加藤さんらしい最後であったと思います。

『生きる』には、同じ時代に青年団の活動を共にした多くの仲間の生の声が綴られています。拝読しながら、それぞれの地域で、職場で、しっかりと職責を果たしながら、懸命に奮闘した仲間の思いと、死が迫る恐怖が克明に記されています。一言、一言、綴られた言葉に、どんな思いであったかと目頭が熱くなりました。また、自分であったなら、どのように行動できたのだろうかとも。

なんとしても東北の地にうかがいたいと思っていた時、今年１月に岩手県団の青研集会へ参加させてもらえる機会をいただきました。そして、大槌町や陸前高田市の青年に、直接、お話を伺うことができました。

津波が押し寄せてきた時に消防団として活動されていた方や、避難所でリーダー的な活躍をさせていた方。がれきの撤去作業をしている時にご遺体と対面した時のことなどのお話を伺いました。話をされる皆さんは、一様に、暗くならないように気丈に振る舞われているように感じました。ですので、お話をうかがう私が涙するわけにはいかないと思いながらも、そうした現実をどのように受け止めてよいのか分かりませんでした。

交流会の席では、陸前高田市の七夕祭りの映像を見させていただきました。モニターを前に数人が懐かしそうに話をされていました。「ここなぁ」「なつかしいなぁ」そんな声が聞こえるなか、説明をしてくれた方の「ここの町は全部なくなりました」との言葉が胸を締め付けました。

お酒が進むなかで、「俺たち、何で生き残れたのかな」と、誰かがぽつりと話す声がきこえました。「復興」という言葉がニュースから聞かれなくなりつつある今日にあって、被災された皆さんの本当の復興はまだまだ遠いのだということを改めて実感いたしました。私たちは、同じ時代を共に青年団員として活動した仲間として、こうした仲間の思いを途絶えさせないようにしなくてはならないと強く思います。

『生きる』はこうした仲間が地域で生きてきた証です。大変な思いを経験しながら今日を生きる仲間の声なき声、その思いが未来に託されていけるよう私たちは今を生きる青年のつとめとして、復興への活動の明かりを全国に灯していきたいと思います。

立道　斉（たてみち・ひとし）
高知県高岡郡檮原町在住　職業:地方公務員
1976年生まれ、高知県高岡郡檮原町出身
日本青年団協議会副会長
（日青協経歴：09～10 年度・
常任理事、11～12 年度・副会長）

第 61 回全国青年大会で開会宣言を行う立道副会長
（2012 年 11 月）

『生きる』からの学び

沖縄県南風原町・照屋　仁士

2011年３月11日、東日本大震災により、亡くなられた加藤国雄さん始め多くの皆様に哀悼の意を表すと共に、被災されたすべての皆様の生活の復旧・復興を心より祈念申し上げます。

第１章被災の手記を読んだ時、さまざまな景色や物凄い惨状が頭の中を巡り、叫び声さえ聞こえるような気がしました。震災はまだ続いているのだと感じた。すべての場所を見たわけではなく、すべての方々と話したわけではない。でも確かに私が訪れたあの場所は、半年後も、１年たってもまだまだ復興が進まず、厳しい現実が続いています。私は何もできていない・・。ただ忘れない・・。考え続け、歩みを止めないことぐらいしかできないのかもしれません。

手記を読みながら、不思議と何度か読んだことがあるように感じました。それは、沖縄の平和祈念資料館にある戦争手記と重ったのです。戦争も当時は止められない、また起こってからしか気づくことのできない「想定外」だったのだと思います。しかしその後の対応は、まぎれもない「人災」であり、一刻も早く、そして継続的に復旧・復興を目指していかなければならない。同時に２度とこのような惨事が繰り返されることのないよう、私たち自身もできる行動を起こしていかなければならないと感じました。

なかなか進まない復旧、決まらない保障、知らされない正確な情報、怒り、悲しみ、様々な感情を乗り越えて歩みだす心境、それぞれの立場で記されているこの記録はきっと数十

年後への強烈なメッセージになるでしょう。泉佐野の西野くんは語っている「まず自分の身を自分で守ろう」と。災害はどこにでも起こり得る、私達青年団は身近な仲間が感じたこの意味を、誰よりもどの団体よりも強く発信しよう！福島の渡辺直也さんは叫んでいる「ただ福島に訪れてほしい！福島の人と出会ってほしい！」と。私達青年団が、偏見をなくし、仲間の身の回りで起こっていることをしっかりと認識し、自分にできる行動をひとつひとつ起こしていこう。私達青年団は、生まれ育った環境は違えど、「地域が大好き」という共通の想いを持って活動している。だから初対面でも、たとえ出会ったことがなくても、「仲間」として想いを共有できる、そんな団体であり続けたい。

最後になるが、今回の東日本大震災であらためて青年団の、そして日本人としての「絆」や「郷土」が見直されました。これまでの阪神淡路大震災や多くの災害でも度々青年団の一早い行動が取組まれ、私達はその重要性を確認してきました。しかし、現在、青年団は衰退し、社会的評価や行政の支援等は後退しています。今一度、組織の在り方やその価値を見直し、定義づけ、各地に青年団を再構築していかなければなりません。

私の住む沖縄も、戦後57年、復帰40周年を経過しても、未だに基地問題や領土問題を抱え、日本政府から大きな差別を受けている。もしかしたら今後の被災地もそうなりえるかもしれない。私は絶対に仲間のことを見捨てず、寄り添って活動を続けていきたい。

照屋　仁士(てるや・ひとし)

沖縄県島尻郡南風原町在住　職業:町議会議員

1976年生まれ、沖縄県島尻郡南風原町出身

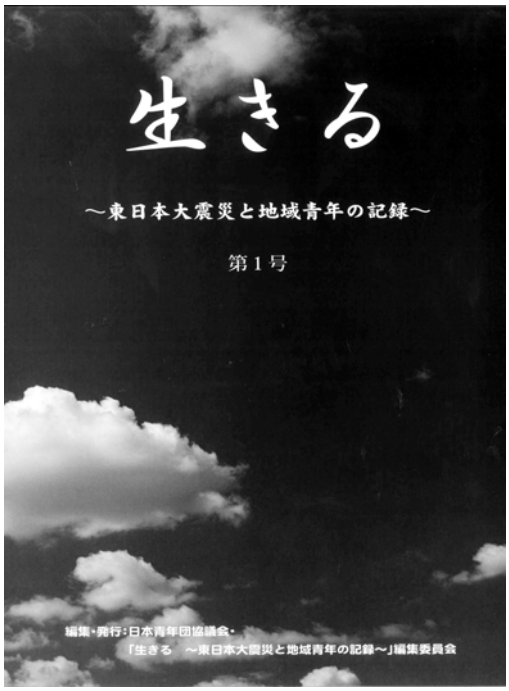
日本青年団協議会副会長

（日青協経歴：09～11 年度･常任理事、

12 年度･副会長）

第１回理事会で演説をする照屋副会長

（2012 年３月）



―― 目次 ――

■はじめに
■目次
■東日本大震災に関する青年団関係の動き
―― 2011年3月11日～2012年3月11日――
■第１章　大震災での体験をつづる
岩手県
震災体験を次の世代の人へ・・・・・・・・・・大槌町　佐々木　訓　8
あの日を忘れない ～2011.3.11 東日本大震災～・・・釜石市　小國　太一　11
東日本大震災手記・・・・・・・・・・・・・陸前高田市　泉田　将治　12
東日本大震災手記・・・・・・・陸前高田市（北上市）　橋詰　琢見　15
被災体験記・・・・・・・・・・・・・・・陸前高田市　松田恵美子　17
東日本大震災体験記・・・・・・・・・・・陸前高田市　村上　宏　21
宮城県
Ｍ９．０　震度７の地から・・・・・・・・・・栗原市　加藤　義弘　22
大震災から学んだ地域のつながり・・・・・・気仙沼市　高橋　弘則　27
東日本大震災手記・・・・・・・・・・・・・気仙沼市　芳賀　孝司　31
東日本大震災体験記・・・・・・・・・・・・気仙沼市　芳賀　広美　36
東日本大震災を経験して・・・・・・・・・・登米市　岩崎　大輔　52
震災を経て・・・・・・・・・・・・・・・・由元町　齋藤　緑　68
福島県
東日本大震災以降の行動記録と感じたこと　会津若松市　吉田　恵三　75
継続は力なり・・・・・・・・・・・・・・会津若松市　渡辺　直也　78
出るも地獄、残るも地獄・・・・・・浪江町（秋田市）　古農　満　81
■第２章　支援活動の記録
石川県青年団協議会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
大阪府岸和田市青年団協議会・泉佐野市青年団協議会・・・・・・・・98
岡山県青年団協議会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
日本青年団協議会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
■この記録冊子ができるまで・・・・・・・・・・・・・・・辻　智子　117
■おわりに　～青年団の仲間たちへ～・・・・・・・・・・・田中　潮　125

『生きる　～東日本大震災と地域青年の記録～』　第１号

（2012年３月発行）

編集・発行：日本青年団協議会・『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』編集委員会

代表：辻　智子（東海大学特任講師）

生きる　～東日本大震災と地域青年の記録～　第２号

編集・発行：『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第２号編集委員会
代表：辻　智子（東海大学特任講師）
日本青年団協議会
岩手県青年団体協議会
宮城県青年団連絡協議会
福島県連合青年会

発　行　日：2013年３月28日
連　絡　先：〒160-0013　東京都新宿区霞ヶ丘町７－１　日本青年館内
日本青年団協議会気付
電話 03-3475-2490　ＦＡＸ　03-3475-0668
URL http://www.dan.or.jp　E-mail: shakai_josei@dan.or.jp
〒259-1292　神奈川県平塚市北金目 4-1-1
東海大学課程資格教育センター　第四研究室　辻　智子

※この取り組みに際し、科学研究費補助金(研究活動スタート支援・平成 23～24 年度「地域共同体の変容と青年集団―東日本大震災に直面して―」課題番号 23830076、代表者：辻智子)を聞き取り旅費等に活用させていただいた。

表紙の写真（第 61 回全国青年大会写真展　最優秀賞）
撮影：村上和三さん、陸前高田市青年団体協議会副会長、陸前高田市米崎町青年会会長

この写真は、陸前高田市気仙町恒例の夏の送り盆行事「気仙川川開き」の光景で、震災後、初めて行われた時のものである。撮影者の村上さんは、焼鳥を焼くなど裏方で忙しく働く傍ら陸前高田市青年団体協議会の広報用に写真を撮っていた。これがその一枚である。写っているのは地元青年会ＯＢの「のりさん」。灯篭はもっと上流から流しているが、実行委員だったのりさんが、自分も知り合いの名前を書いて流したいと皆から少し離れた下流でこっそり流すところを、たまたま村上さんが撮影した。

気仙川は震災の際、津波が遡上してきた川だが、地元の人たちにとっては昔から生活の一部だった。８月７日に七夕祭りをして先祖を迎え、８月 15 日に「川開き」で先祖を送るのが、この地域の毎年恒例の先祖供養の盆行事である。2011 年のこの日に限って川の流れがいつになく穏やかで波も立たないほど静かだったため灯篭はなかなか川下に流れて行かず、いつまでもそこにとどまって漂い続けていたという。亡くなったたくさんの人の顔を思い浮かべながら、村上さんは、「まだ、帰りたくないんだな」と思ったそうだ。

村上さんの家は市内米崎町で目の前が海という場所にあった。津波で家は流され、現在、家のあった場所は「がれき集積地プラント」になっている。震災当日、村上さんは市内内陸部にある仕事場（職業は大工）から同僚（親戚）に頼まれて、その息子さんの無事を確認しに行った。途中、街中を抜けて行ったが、「あと５分遅かったら俺は津波に飲まれてました」という。自宅前を素通りし同僚の家へ。息子さんは無事だったが、家屋が地震で軋んだのかドアが開かず、無理やりドアを開けて彼を家の中から外に出した。間もなくどこからか「津波だ」という声があがり、見に行ったら高田の町が砂煙で何も見えなくなっていた。村上さんも「ここも危ないかもしれない」と思い、まだ家の中にいる周辺の人たちに津波が来ると叫んで、自身も車で坂道を全力バックで高台へ避難した。その後、その同僚の家にも津波は到達し、１階の天井まで浸水した。あそこまで津波が来るとはよもや考えられない場所だったと青年会メンバーは口々に語る。

取材の最後に全国の青年団へのメッセージは、と聞くと、「被災地は忙しいんだ、来てくれよ」とのことだった。

（取材･まとめ:尾路･戸嶋･辻）